フレイム・ウォーカー外伝　-Behind the Scenes-

エスパー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フレイム・ウォーカー外伝　－Ｂｅｈｉｎｄ　ｔｈｅ　Ｓｃｅｎｅｓ－

【Ｎコード】
Ｎ６４００Ｎ

【作者名】
エスパー

【あらすじ】
表があれば裏がある。例え一つの物語であっても、そこには様々な視点がある。ここに語られるのは、舞台裏の話――。
という訳でフレイム・ウォーカー外伝です。各章の裏話や、各キャラクターの過去話を短編形式で色々載せていくつもりです。特に本編に深く関わる話は（多分）出ないと思うので、読む必要は全くありません（オイ）

とある立ち位置からの状況報告・？（前書き）

今回はフレイム・ウォーカーのテルノアリス編の裏側を、ジン・ハートラーからの視点で描いた話です。本編とは違い、三人称でございます。

とある立ち位置からの状況報告・？

テルノアリスの現政権を握る王族を狙う、テロリストの存在。それは『倒王戦争』終決後、幾度となく大陸の各地で争いの火種を生んでいた。

そしてその争いの火種となり得る事象の全てを、未然に防ぐ為に行動する者がいた。

ジン・ハートラー。

全ギルドメンバーの中でも、五本の指に入ると言われる程の実力者。

彼は、紅い髪の少年の物語が始まる少し以前から、すでに物語の役者の一人として、運命という名の台本に組まれていた事になる。

彼自身、それを意図していた訳ではない。

この世界に運命と言うものがあるのなら、彼はただ、その流れに飲み込まれた一人だったのだ。

銀髪の少年の物語が動き出すのは、テルノアリス襲撃事件が起きる、一月前の事である――。

首都テルノアリスから東に十キロ程離れた場所に位置する街、『ツェペル』。

その街の一角、昼間から大勢の人で賑わう酒場の前に、その少年の姿はあった。

ジン・ハートラー。銀髪の髪に碧眼。白と黒の特徴的なラインの入ったローブを身に纏い、背中に鍔の形が違う二本の剣を背負った少年は、二十代後半の無精髭を生やした男と立ち話をしていた。

「――今の話は本当なのか？」

ジンは神妙な面持ちで、念を押すように尋ねた。
無精髭の男は、そんなジンの様子を面倒臭く思ったのか、少々顔を顰めて答えた。
「ああ、間違いねぇよ。俺が見たのはあの『英雄』、ミレーナ・イアルフスだった。話してた相手はマントを着てフードをかぶってたから性別はわからねぇが、これだけはハッキリ言える。ありゃあ確実にテロリストだな」
やけに自信を持って言い切る男の様子に、ジンは訝しげな顔をして聞く。
「なぜそう言い切れるんだ？」
「そりゃあ簡単な話さ。あの人間の独特な雰囲気。それが間違いなくテロリストのモンだった。これでも俺ぁその筋の人間を見抜く眼力を持ってるからな」
「……」
ジンは無精髭の男の言葉を鵜呑みには出来なかった。人を見掛けで判断するのは良くない事だとわかってはいるが、それでも眼の前の男の怪しげな雰囲気が、ジンの警戒心を刺激して信用する事を拒んでいる。
今ジンは、とある噂の真偽を確かめる為に、首都近郊の街や村を一つずつ回っている。
その噂とは、『首都近郊の街や村に、首都を狙うテロリストたちが集結している』、と言うものだ。
そしてそれは、その噂の真偽を確かめていた時だった。ジンは自分自身でも、信じられないような事を耳にした。
かの『英雄』、ミレーナ・イアルフスがテロリストと関わっているかも知れない、と。
ミレーナ・イアルフスと言えば、その名を知らない者はいないとさえ言われる程の有名人だ。

『倒王戦争』――。
今から十二年前に起きた、当時のテルノアリス王を倒す為に起きた戦争。その戦争の中で、王を倒す為に立ち上がった五人の『魔術師』と呼ばれる存在。ミレーナ・イアルフスは、その五人のメンバーの内の一人だった。
そしてジンは、そのミレーナ・イアルフスと深い関係にある人物を知っている。
ディーン・イアルフス。
炎のような紅い髪が特徴的なその少年は、『倒王戦争』によって両親を失い、戦争孤児だった所をミレーナ・イアルフスに拾われ、彼女に育てられた。そして後に、ミレーナ・イアルフスはディーンにとって、『魔術』の師匠ともなる。
ところが一年程前、ミレーナ・イアルフスは突然行方を眩ました。
それまで十数年一緒に暮らしたディーンに、何も告げずに。
そんな経緯から、ディーンは今でもミレーナ・イアルフスの行方を探して、一人旅をしている。
だがジンは、そんなディーンの行動に水を注すような噂を耳にしてしまった。
(……あいつが知ったら何て言うだろうな)
心の中でそう呟き、ジンは浅く溜め息をつく。
ディーンとはまだ数えるぐらいしか行動を共にしていないが、不思議と意気投合出来てしまっていた。だからこそ始末が悪い。彼の身の上を知っているからこそ、同情心のようなものが芽生えてしまう。
いや……、とジンは首を横に振る。今の自分は任務の最中だ。公私混同は正確な情報を探す上で障害にしかならない。今は余計な事を考えず、自分の役割を果たすのが先決だ。
「時間を取らせてしまったな。またこちらから聴取を行なう事もあると思うが、その時はよろしく頼む」
「――ああ。わかったよ」

ジンは浅く礼をして、無精髭の男に背を向けた。
そしてしばらく歩いた後、ジンは何気なく背後を振り返った。
丁度その時、無精髭の男は酒場に入ろうとしている途中だった。
その男の表情に、ジンは一瞬違和感を覚えた。
酒場へ入っていく男の横顔に、笑みが浮かんでいたような気がしたからだ。
「……気のせい、か？」
そう呟いてみたものの、結局ジンは、それを確かめる事は無かった。

この一月後、ジンは『ディケット』と言う街で、偶然紅い髪の少年と再会を果たす。
それが後に、『テルノアリス襲撃事件』と呼ばれる戦乱の幕開けだった事を知る者は、誰もいなかった――。

とある立ち位置からの状況報告・？（後書き）

わかりにくかったかもしれませんが、ここでの話は本編の始まる少し前の話でした。

こんな感じで裏話が続きます。

とある立ち位置からの状況報告・？

動き出した運命と言う名の歯車は、彼の気付かない内にその速度を増していく。
紅い髪の少年と廻り合い、首都に向かう道の途中で、ジンはある人物に遭遇する。

「この大陸に変革を齎す者だよ、少年」

首都へ向かう途中に立ち寄った遺跡で遭遇した男は、そんな言葉を口にした。
その人物の名は、アーベント・ディベルグ。
自らを反王族軍のリーダーと称し、山吹色の短い髪の男は不敵な笑みを見せる。
その男の存在が、噂という不確かなものを現実のものとして実体化させた。
確実に、首都テルノアリスに危機が迫っていた。

首都に到着してすぐ、ジンは紅い髪の少年と一旦別れ、王族に調査の内容を報告する為、テルノアリス城を訪れていた。
城の門を潜り、城内に入ったジンは、城内を警備する正規軍兵士に声を掛ける。
「『ギルド』所属ナンバー〇六四、ジン・ハートラーだ。元老院ハルク・ウェスタイン様に調査報告を伝えに来た」
ジンは警備兵に、表面に剣と槍と斧が交差した金の装飾がされた

バッジを差し出した。これは『ギルド』で支給されている、ギルドメンバーである事を証明する為の物だ。バッジの裏側には、ジンのフルネームと、バッジを支給された年号が彫り込まれている。
「――確認した。ハルク様はすでに、謁見の間でお待ちになられている」
（……？　到着する時刻は伝えていないはずだが……）
疑問に思いながらも、ジンは先導する警備兵士の後を追った。

◆　◆　◆

「やぁ、ジン。久しぶりだね。キミの到着を待っていたよ」
ジンが謁見の間に着くなり、そんな明るい声がジンを出迎えた。
首都の中央に屹立するテルノアリス城。その城内の北側に位置する、王族との謁見の間。ある程度限られた者にしか与えられていない、王族との面会の権利。ジンはその限られた者の内の一人という訳だ。
その謁見の間の中央。紅い絨毯が敷かれている所までジンは歩いていき、片膝をついて一礼した。
「こちらこそお久しぶりです、ハルク様」
ジンから数メートルの間隔を開けて三段高くなった位置には、王族専用の金の装飾がされた、背凭れの長い椅子が一つ置かれている。
その豪華な造りの椅子に、長い若竹色の髪を後ろで一つに纏め、眼鏡を掛けた青年が座っている。少し眼がつり上がっている知的な雰囲気の青年は、ジンにとってかなり目上の存在だ。
現テルノアリス、およびジラータル大陸の政権を運営する元老院の一人、ハルク・ウェスタイン。

彼は畏まった様子のジンに笑って言う。
「いつも言ってるだろ？　ボクに気を使う必要はないって」
「いえ、そういう訳には……」
ジンはハルクに会う度に、いつもこうして注意される。
だが、ジンにとってハルクに敬語を使うのは当たり前の対応である。こうして厚意にしてもらっているとはいえ、相手は目上の貴族なのだ。とてもじゃないが、くだけた感じで話す事など出来そうもない。
と、少し困っていたジンはある事を思い出した。
「ところでハルク様。なぜここにおられたんですか？　到着の正確な時間や日にちは、連絡していないはずですが……」
ジンが口調を崩さない事に若干不満げな顔をしながらも、ハルクはジンの質問に答える。
「簡単な事だよ。つい数時間前に、キミの友人のエリーゼ・スフィリアがここを訪れていてね。彼女にキミの到着する日を占ってもらったんだよ。それにしても彼女は凄いね。占いで出た時間と、ほとんど差がないんだから」
「あいつがここに……？」
ジンの古くからの友人であり、占い師でもあるエリーゼ・スフィリア。彼女の占いの的中率が高いという事は、この城に住む王族たちの中でも有名な話だ。それにより、彼女は王族に占ってくれと頼まれる事も多々ある。恐らく今日来ていたというのも、それと同じ話だろう。
「ところでジン。調査の方はどうだったんだい？」
ぼんやりと考え込んでいたジンは、ハルクの言葉で我に返った。
報告する事は色々ある。ジンはゆっくりと口を開いた。

◆　◆　◆

「――う～ん。多分そいつは、元貴族のアーベント・ディベルグなんじゃないかな？」
彼の言葉に、ジンは訝しげな顔をする。
「貴族……？　あの男が、ですか？」
信じられない、と言いたげなジンの様子を見て、ハルクは思い出すかのように説明を始めた。
「ディベルグという名前は、『倒王戦争』以前までは五大貴族と呼ばれる高尚な家系だったんだ。だけど知っての通り、『倒王戦争』で前テルノアリス王は『反旗軍』によって倒された。そしてそれによって、『魔王』側に付いた貴族たちはその権利を剥奪され、城を追われる身となった。ディベルグというのも、その貴族の内の一つだよ」
フフ、と愉快そうに笑って、ハルクは続ける。
「もし本当に、キミの見た人物がそのアーベント・ディベルグならば、彼がテルノアリスを狙う理由も説明がつく。彼はボクらを殺す事で、過去の栄光を取り戻そうとしているんだよ。――全く、厄介な男に眼を付けられたものだね」
そう言って苦笑するハルクの様子は、困っているというよりもむしろこの状況を楽しんでいるようだった。
若干顔を顰めて、ジンは即座に言葉を紡ぐ。
「あの男が首都を狙っているのは事実です。早急に手を打たなければ、取り返しのつかない事になりかねません」
「そうだねぇ。他の元老院の者にも意見を求めてみなきゃいけないけど、これはもう確定事項だろう」
ハルクはゆっくりと腰を上げると、真剣な表情で眼下のジンを見つめた。
「これより元老院および正規軍は、アーベント・ディベルグを最重

要犯罪人とし、身柄を拘束、もしくは殺害も視野に入れて行動を起こす。ボクは正規軍の内部で討伐隊も編成するよう手配し、アーベントの捜索を行なわせる。キミはこの件を『ギルドマスター』に報告して、ギルドメンバーからも応援を頼めるようにしておいてくれ」

「……！　わかりました！」

ジンは片膝をついたまま、綺麗にその場で一礼した。

本格的に始まろうとしていた、テルノアリスを巡る戦乱の渦。

だがジンはこのすぐ後、紅い髪の少年が負傷し、城に運び込まれた事を知る。それによって、何が齎されたのかを知る事になる。

表があれば裏がある。その逆もまた然り。

紅い髪の少年がジンの行動の全てを知らないように、ジンもまた、紅い髪の少年が何をしていたのかを知るはずがなかった。

とある立ち位置からの状況報告・？（後書き）

という訳で、ここでの話は本編でテルノアリスに訪れた直後。ディーンと別れた後のジンの話でした。

とある立ち位置からの状況報告・？

それは今にして考えれば、必要な出会いと別れだったのかも知れない。

テルノアリスを狙うアーベントと言う男と遭遇し、テルノアリスに着いて間もなく、ジンは紅い髪の少年がアーベントに敗れた事を知る。

そしてそれにより、紅い髪の少年がある存在を失った事も。

リネ・レディア。

ジンが紅い髪の少年と再会した時、彼女はそこに同伴していた。

紅い髪の少年が、偶然出会ったという少女。彼女の正体は、『倒王戦争』の頃に滅亡したとされる一族、『妖魔』の生き残りだった。そして彼女はアーベントによって連れ去られ、行方不明となっていた。

彼女を失った事で、紅い髪の少年は一時戦意喪失にまで追い込まれていた。

だが、ジンが事前に教えていたエリーゼ・スフィリアの存在によって、彼は再び戦う意志を取り戻した。

彼が城の『修練場』に籠っている間、ジンは己の役割を果たそうと奔走していた。

紅い髪の少年から教えられた、エリーゼからの伝言。

その内容を理解した上で、ジンは元老院のハルクに進言を行なっていた。『街の検疫所に詰めている兵士の中に、テロリストに通じている者がいるかも知れない』と。

その情報の出所が王族から高い信頼を得ているエリーゼだったため、ハルクはジンの進言に難しい顔をしながらも、その意見を否定しようとはしなかった。
「――確証は無いけれど、彼女の言う言葉なんだ。確かめてみる価値はあるかもね。多分他の元老院たちも、反対する者は少ないと思うよ」
「……！　ありがとうございます！」
ジンは言い表せない感謝の念を、深く一礼する事でしか表現出来なかった。
どんなに王族との親交があるとはいえ、何の確証もない進言など、簡単に切り捨てられても全くおかしくない。むしろ否定されなかったのが奇跡と言える。
ジンは頭を上げ、再びハルクに頼み込む。
「この件、進言したからには俺も立ち会います。取り調べるのは無理だとしても、せめて兵士たちを連行するぐらいの事は――」
「そんなに固くなる必要は無いよ、ジン」
少々必死になっていたジンを宥めるように、ハルクは笑って言う。
「初めから、こういう事態になればキミにも協力を頼むつもりだったんだ。だからそんなに構えなくていい。――キミには北側の検疫所の兵士を調べてもらおう。頼めるかい？」
「はい、わかりました！」
ジンは再び深く一礼し、颯爽とその場を後にした。

◆　◆　◆

夜の闇はすでに深く、日付はとっくの昔に変わっていた。

だが、だからと言って夜が明けるのを待つなどという悠長な事をしている状況でもない。アーベントはいつ行動を起こすかわからないのだ。出来る事は早めにやっておく必要がある。

ジンは正規軍兵士五人を引き連れ、街の北側、第二検疫所へと訪れていた。

この街の検疫所は、各方角に二ヵ所ずつ設置されている。北側にはもう一つ、第一検疫所があるが、そちらの兵士はすでに取り調べの為、テルノアリス城に呼び戻してある。その間は当然、別の兵士が検疫所に配置されている。その辺りに抜かりは無い。

（次はここだな。……果たして、エリーゼの読み通りとなるかどうか）

ジンは心の内で呟くと、軽く深呼吸をした。緊張の為か、少々鼓動が速くなっている。それをどうにか落ち着かせ、ジンは真っ直ぐ前を見る。

「――行くぞ」

周りの正規軍兵士に短く告げ、前方の検疫所に向けて歩き出す。

ジンたちは物の数分で検疫所の傍に辿り着いた。灯りは点いている。検疫所に詰めている兵士は二人。その二人が交代制で、二十四時間街に出入りする者の検疫を行なっているのだ。

と、傍まで近付いて、ジンは妙な事に気が付いた。

（……？　灯りは点いているのに、人の気配がしない？）

ジンの感じた通り、灯りの点いた検疫所からは人の気配はおろか、話し声すら全く聞こえない。

まさかと思い、ジンは検疫所の扉を数回ノックした。

「『ギルド』所属のジン・ハートラーだ。元老院ハルク・ウェスタイン様からの命により、こちらの兵士の方に尋ねたい事がある。至急テルノアリス城まで同行願いたい」

返事は返って来ない。無言という答え。

ジンは間違いないと感じ、蹴破るような勢いで扉を開けた。

案の定、検疫所の中には誰一人いない。文字通り、蛻（もぬけ）の殻（から）だった。

「くそっ！ここがそうだったのか！」
ジンは同じく信じられないという顔をした兵士たちに、ほとんど怒鳴るように告げる。
「すぐにテルノアリス城の元老院の方たちに報告を！　北側第二検疫所の兵士二名が逃亡！　恐らくテロリストと繋がっていると思われる！　捜索を開始すると伝えてくれ！」
「は……、はいっ！」
ジンの様子に慄くかのように、二名の兵士が元来た道を走っていった。残った兵士たちは、ジンの代わりに検疫所内の捜査を行ない始めた。
ジンは一人検疫所の外に出ると、悔しさで顔を顰めた。

彼の知らない所で、物語は急速にその足を進めていた。
止める術は最早無い。一つの結論へ向けて、ただ進み続ける。
テルノアリスが戦火に包まれるのは、これから約半日後の事だった。

とある立ち位置からの状況報告・？（後書き）

ここで語られているのは、本編でディーンがエリーゼに会った後。ディーンが『修練場』に籠って特訓をしている頃の裏話です。

何回も読み直したはずだけど大丈夫かな……？

とある戦場からの戦況報告・？

ついにテルノアリスが、戦の舞台となってしまった。
アーベント・ディベルグの企みによって、首都の街に放たれた仮面の人物たち。彼らの行動によって首都の街は、その姿を変貌させてしまった。
その始まりを告げたのは、巨大な爆発。
首都全体を揺るがす程の爆発と、仮面の人物たちの出現によって、紅い髪の少年と同様にジンもまた、同じように理解した。
あの男の狙い通り、戦乱が始まった、と。

最初の爆発が起こった時、ジンはまだテルノアリス城の中にいた。
街の四ヵ所に設置されている駅が爆発。それと同時に現れた、民衆を襲う仮面の人物たち。
その報を受け、俄かに戦闘準備で慌ただしくなる城内。
ジンは城のある一室から、街の様子を冷静に眺めていた。
（爆発したのは列車を発着させる駅のみ。敵勢力と見られる仮面の人物たちが現れたという事は、敵の狙いは白兵戦……か？）
冷静に状況を分析したジンは、自らも戦場に向かう為、その部屋を後にした。
そして城を出る前、ジンは戦場へ出て行こうとする兵士を一人捕まえて、伝言役を頼んだ。
伝言を伝える相手はもちろん、休憩を兼ねて城の外に出ているであろう紅い髪の少年。
兵士に伝えてもらう内容はこうだ。

現状、爆発が起こったのは東西南北にある駅だという事。
敵がどこから現れたのかは不明だという事。
雑兵たちの相手は正規軍、そして『ギルド』メンバーで行なうという事。
紅い髪の少年には、敵を撃破しながらアーベントの行方を探ってほしいという事。
兵士にそれらを伝え終え、ジンは城の巨大な門を潜った。
銀髪の少年が戦場を駆け抜ける。

◆　◆　◆

それは街の西側の大通りを走っている時だった。
突然、進行方向右側にある商店の影から複数の人影が飛び出してきた。
ジンは急ブレーキを掛け、複数の人影と対峙する形で立ち止まる。
相手の数は三人。全員、黒いマントに眼の辺りだけを隠す仮面という同じ格好をしている。体格からして全員男のようだ。
「……お前たちがアーベントの仲間だな？」
ジンは仮面の男たちを強く睨み付けながら、背中に担ぐ鍔の形が違う二本の剣を、同時に引き抜いた。
左手に握った剣は、刀身が透き通るように白く、右手に握った剣は、刀身が闇そのものを纏ったかのように黒い。剣にはそれぞれ、『白滅剣（はくめつけん）』と『黒裂剣（こくれつけん）』という名前がある。
一方の仮面の男たちは、それぞれ剣、槍、斧と、三人バラバラの武器を握っている。これだけ相手の持っている武器の種類が違うと、まともに戦うのは少々骨だ。

況して相手は複数。少しの油断が命取りになる。
と、次の瞬間。相手の側が動いた。
剣を持った仮面の男が、一直線にジンに突っ込んでくる。
ジンは左半身を前にする形の独特な構えを取る。そして左足で踏み込むと同時に、右手の『黒裂剣』を上段から振り下ろした。
するとその剣線に沿って、刀身から黒い物体が生まれた。
いや、物体と言うと語弊がある。
『黒裂剣』の刀身から生まれたのは、斬撃による衝撃波だ。それが眼に見える黒い衝撃波となって、仮面の男に襲い掛かる。
仮面の男はその現象に一瞬慄き、とっさに剣で防御体勢を取る。そこに黒い衝撃波が飛来し、衝撃に押されて仮面の男はバランスを崩した。
そこに完璧なタイミングでジンの左手に握られた『白滅剣』が切り込まれる。横一文字に払った白い刀身が、仮面の男の身体を裂き、鮮血が飛び散った。
「がああああぁぁぁっ！」
苦痛の叫びを上げ地面に倒れ込む仮面の男を無視して、ジンは残りの二人を睨み付ける。
「一応聞いておこう。アーベント・ディベルグはどこにいる？」
「……ッ」
ジンの鋭い眼差しに威圧されたのか、残った仮面の男たちは僅かに後退りした。
だが仮面の男たちは、ジンの質問に答えようとはしない。まともに会話する気がないのか、口を開こうとさえしなかった。
ジンは短く息を吐いて考えを改める。
単なる脅しが効かない相手である事ぐらい、ジンにはわかっていた。だが、出来れば無用な戦いは避けたいと思っているのも事実だ。
（甘さを捨てるしかない、という事か……）
何もしゃべらず向かってくる相手など、その辺の荒野にいる『ゴーレム』と同じだ。情報が聞き出せない以上、最早単なる邪魔者で

しかない。
「話す気がないなら通してもらう。力尽くでもな！」
ジンは両手の剣を握り直すと同時に、仮面の男たちに突貫する。
狙うは右側に立っている、斧を持った方。
しかし、敵も待ってはくれない。
ジンが向かった斧を持った方とは別の、槍を持った仮面の男の方が動いた。
走りながらジンに向けて、その長い得物を突き出してくる。
だがジンの反応は早かった。
槍の刃先の軌道を先読みすると、瞬時に身体を短く捻り、僅かな動作でそれを躱した。
驚く仮面の男のがら空きになった胴の部分に、今度は黒い刀身が斬り込まれた。
「ぎゃあああぁぁ！」
派手に鮮血を飛ばしながら仮面の男は地面に倒れ込む。
その横を瞬時に駆け抜け、ジンは最後の一人に狙いを定める。
突進するジンのスピードに、斧を持った仮面の男は気圧されるかのように顔を顰め、斧を上段に振り上げた。そして一気に、間近に迫ったジンの身体へ向けて真っ直ぐ振り下ろした。
単調な攻撃。それ故に読まれやすい。
ジンは軽くステップを踏むかのように身を翻し、容易くその一撃を回避した。
地面に轟音を上げて斧が減り込んだ時には、ジンはすでに仮面の男の背後に回り込んでいた。
「はあああぁぁ！！」
叫びと共に、ジンは黒と白の刀身を持った剣を同時に振るう。
すると、黒白の衝撃波が混ざり合うように生まれ、仮面の男の身体を容易に吹き飛ばした。
大通りの商店の壁に衝突し、仮面の男は沈黙する。
それを見届けてから短く息を吐き、ジンは両手の剣を軽く握り直

した。
と、その時だった。
「へぇ～。三人が相手だったってのに、まさか無傷とはねぇ～。結構な腕利きがいるじゃねぇか」
「！」
声のした方に視線を向けると、そこには先程の三人とは若干服装の違う男が、ジンを観察するかのように立っていた。
一目でジンは悟った。この男は他の敵とは違う、と。
「『魔術師』か」
警戒を強めるジンに向かって、『魔術師』はニヤリとした笑みを見せた。

とある戦場からの戦況報告・？（後書き）

という訳で、テルノアリス編第六章の裏側その壱、って感じの話です。

う～ん、やっぱり三人称の方が作者的にしっくりくるなぁ～（笑）

とある戦場からの戦況報告・？

戦乱渦巻く首都のとある一角で、ジンは『魔術師』と対峙していた。
初めに現れた仮面の男たちを撃破したジンの勇姿を称えるかのように、『魔術師』はゆっくりと拍手した。
「お名前を伺ってもよろしいかな、銀髪の剣士さん？」
「……ジン・ハートラー。『ギルド』に所属している」
警戒心を最高潮にして答えるジンに、『魔術師』は愉快そうに笑ってみせる。
「そんな怖い顔すんなよ。こっちはてめぇの強さに感心してるだけなんだからよぉ。素直に喜んだらどうだ？」
口元にニヤニヤとした笑みを浮かべ、『魔術師』は舐め回すかのようにジンを見る。
ジンは不愉快に思った。
彼の視線がではない。
彼の態度が、だ。
「――何が面白い？」
「あん？」
「何が面白いと聞いているんだ」
瞬間、『魔術師』の足下が吹き飛んだ。ジンが『黒裂剣（こくれつけん）』から衝撃波を放ったのだ。
爆音を上げて地面が吹き飛び、土煙が『魔術師』の周りに吹き荒れた。
『黒裂剣（こくれつけん）』を握り直し、ジンは怒りの籠った眼で『魔術師』を睨む。
「戦いが楽しいか？　争いが面白いのか？　貴様らみたいな下らない人間の愚行のせいで、多くの悲しみが生まれているというのがわからないのか？」

「悲しみ……？　ハハッ！　悲しみだって！？　何、お前？　そういうアツい事言っちゃう人間なの？　ギャハハハ！　マジかよ！？　超面白ェーーーッ！！」
『魔術師』は盛大に笑う。腹を抱えて本当に面白そうに。
それを一頻り続けた時だった。
突然ピタリと動きを止め、『魔術師』は無表情で言い放った。
「ギャアギャアうるせぇんだよ偽善者が」
瞬間、ジンの足下の地面が突如として隆起し、槍の穂先のように尖った刃物となってジンの左肩の辺りを掠めた。
服が裂け、微かに血が滲む左肩にジンは目を向けようとしたが、そこに『魔術師』の怒声が割り込む。
「ボサッとしてんなよ銀髪っ！！」
「！」
雄叫びのような声を上げながら『魔術師』が右腕を振ると、それに合わせるかのように、今度は大通りに並ぶ商店の石造りの壁が隆起し、円錐状の岩の塊となって飛来してきた。
ジンは咄嗟に『黒裂剣（こくれつけん）』を振るい、黒い衝撃波で岩の塊を粉々に粉砕した。その途端、土煙がジンの視界を奪う。『魔術師』の姿どころか、大通りの景色すら見えなくなった。
（しまった！　目眩ましか……っ！）
ギリッと歯噛みした瞬間、ジンは背後に悪寒を感じた。
感じたが、回避が間に合わなかった。
「ヒャハァァッ！！」
「！」
ゴツゴツした不格好な岩で出来た槍を握り、突貫してきた『魔術師』の一撃が、今度はジンの右脇腹の辺りを捕え、その部分を朱に染めた。
「チィッ！」
ダンッと地面を強く蹴りつけ、ジンは『魔術師』と距離を取った。
右脇腹の辺りがズキズキと痛み、身体中から汗が吹き出し、風邪

で高熱を出したかのように身体が火照る。幸い傷は深くないようだが、今のはまともに食らっていれば重傷になっていただろう。
ジンは痛みを堪えながら、ニヤついた表情の『魔術師』を睨んだ。
「随分セコイ真似をするんだな。とてもじゃないが、『魔術師』とは思えない戦い方だ」
「褒め言葉として受け取っとくぜ。俺をてめぇみてぇな偽善者と同じにするんじゃねぇよ。俺は自分に正直に生きてる。だから相手を殺す時も容赦なんかしねぇ。紳士ぶったりもしねぇ。相手を殺す為だったらどんな事だってやるぜぇ？　こんな風にな！」
振り上げた両手を地面に押し当てる。それだけで『魔術師』の足下の地面が変化を起こした。隆起し、槍状に尖った岩の塊がジンに襲い掛かる。
だがジンは冷静だった。血が流れ、紅く染まった左腕を振るい、『白滅剣』から白い衝撃波を生み出して放った。
先程と同じく、衝撃波を受けた岩の塊は空中で爆発を起こし、土煙が視界を奪う。その中でジンは、姿の見えない『魔術師』に冷たく言い放った。
「大層な自論をお持ちのようだが、本当にわかっているのか？　相手を殺す覚悟を持った以上、自分が殺されても文句は言えない事をな」
瞬間、ジンは『黒裂剣』と『白滅剣』から同時に衝撃波を放った。しかもただ放った訳ではない。自分の身体を中心に円を描くかのように回転を加えて、全方向へ衝撃波を放ったのだ。
黒と白が織り成す衝撃波の波は瞬く間に土煙を払い、同時にその中に紛れ込んでいた『魔術師』の身体を容易に吹き飛ばした。
「ぐあああぁぁっ！」
ダァンッという音を立て、『魔術師』の身体は商店の壁に叩きつけられた。肺から息が強引に吐き出され、『魔術師』は苦しそうに膝を折った。
「ク、カハァッ！」

「攻撃の仕方がワンパターン過ぎる。もう少し頭を使ったらどうだ？」
ジンは膝を折り悶える『魔術師』に、『白滅剣』の切っ先を突き付けた。冷徹な眼差しで見下ろすと、明らかに『魔術師』の顔色が変わっていた。ほんの僅かな回数交戦しただけで、立場があっさりと引っくり返っていた。
「よ、止せ……！　頼む！　殺さないでくれ！」
「……さっきの自論を吐いていた人間とは思えない台詞だな」
ジンがギリッと『白滅剣』の柄を握り締めると、刀身が淡く光を放ち始めた。
相手に最早戦意は無い。だがジンは容赦しなかった。さっきの『魔術師』の言葉が癇に障っていたからだ。
「何の覚悟もない奴が戦おうなどとするな。……反吐が出る」
「止め――！」
紅い髪の少年にすら見せた事もないような冷たい表情で言い放った瞬間、爆音が辺りに響き渡った。
ジンの『白滅剣』から発せられた衝撃波、『白雷』。それが『魔術師』を襲い、爆発を起こした音だった。
商店の一部を破壊し、朦々と上がる煙の中から、ジンは悠然と歩いて現れた。背中の鞘に両手の剣を納め、ジンは煙の上がる商店の方を一瞥する。
『魔術師』は死んではいない。ただ再起不能になるまで、ジンが『白雷』を放ち続けたのだ。
ピクリとも動かなくなった『魔術師』を見つめ、ジンは聴こえていないとわかっていながら、それでも言った。
「命がある事を感謝するんだな。命の重さを知らない者よ」
視線を前に戻し、ジンは首都の街並みを走り始める。
傷は痛む。だがのんびりはしていられない。
まだ何かが起こる。そんな予感がジンにはあった。

とある戦場からの戦況報告・？（後書き）

という訳で、本編の中でジンが言ってた『魔術師』との戦いを描いてみました。
こっちも早く終わらせないとな（汗）

それはそれとして、勝手にランキングの方では、本編よりこっちのが若干ですが人気あるみたいです。
投票してくれてる方がいるみたいなんで嬉しいかぎりです。

とある戦場からの戦況報告・？

幾度かの戦闘を終え、テルノアリス城へ傷の手当ての為に戻ったジンは、そこで紅い髪の少年と合流した。
この街での出来事について何かを発見したらしい紅い髪の少年は、城の中から街並みを観察したいと言ってきた。
丁度元老院の一人、ハルク・ウェスタインも傍にいた事から、城への入城はあっさり許可された。
そしてそれにより、紅い髪の少年はアーベント・ディベルグの本当の狙いを看破する。

すなわち、『術式魔法陣』の発動。

事態に際して、紅い髪の少年から術式を安定させている『魔術師』の討伐を頼まれたジンは、数人の正規軍兵士を連れ、首都の外壁、北西の角の部分に向かった。
そこには紅い髪の少年の予想通り、『魔術師』が待ち構えていた。
紅い光を放つ半径二メートル程の魔法陣の中心に立つ『魔術師』は、街の中に現れた仮面の人物たちと同じ格好をしていた。
「お前たちの企みは看破された。大人しく投降しろ」
最後通告のつもりで、ジンは『魔術師』に冷たく言い放った。
だが『魔術師』はそれに応じた様子は見せない。それどころか、不気味なニヤリとした笑みをジンや兵士たちに向けた。
「ククク……。我々を追い詰めたとでも思ったか？　だとしたら残念だったな」
「どういう意味だ？」
「こういう意味さ。――出でよ、『ゴーレム』！」
「なっ……！？」

勝ち誇ったかのような『魔術師』の叫びで、突然地面が激しく揺れ動き、岩盤を突き破って三つの巨大な塊が姿を現した。鋼鉄の鎧を纏う五メートル超の人型の物体。『魔術兵器』として名高い、『ゴーレム』だ。

（ある程度予想はしていたが、まさか配置されているのが『ゴーレム』とは……！　しかも三体も……！）

恐らく紅い髪の少年も、こういう事態になるのを危惧していたのだろう。城の一室で役目を任された時、彼は少し躊躇っているようだった。

今になってジンは思う。彼の危惧は当たっていたのだと。

「さぁ！　存分に暴れてやれ、『ゴーレム』ども！　『術式魔法陣』はあと僅かで完成する！」

『魔術師』の声に呼応するかのように、三体の『ゴーレム』は活動を開始する。

ジンは即座に、背中の鞘から『黒裂剣（こくれつけん）』と『白滅剣（はくめつけん）』を引き抜いた。そして、緊張で強張る正規軍兵士たちに呼び掛ける。

「『ゴーレム』はあくまで囮だ！　あの『魔術師』を狙え！　奴に『術式魔法陣』を完成させてはいけない！」

「はいっ！」

威勢のいい返事が返ってきた瞬間、ジンは先頭に立っていた『ゴーレム』に突貫した。走りながら『黒裂剣（こくれつけん）』に力を込め、黒い衝撃波『黒閃（こくせん）』を放った。

『ゴーレム』の左腕に被弾した『黒閃（こくせん）』は、鋼鉄の鎧を半分程剥ぎ取った。

だがまだ破壊するには至らない。しかも『ゴーレム』はあろう事かそのダメージを受けた左腕でジンに攻撃を仕掛けてきた。

「！　くっ！」

いかにジンでも『ゴーレム』の巨大な拳を真っ正面から受けては、身体中の骨を粉々にされてしまう。　素直に回避を選び、左に跳ぶジン。と、そこに待ち構えたいたかのように『ゴーレム』が右拳を

放ってきた。
（躱し切れない！　なら――！）
思うが早いか、ジンは右拳目掛けて『黒裂剣』と『白滅剣』を同時に振るった。
『黒閃』と『白雷』の二つを受けた『ゴーレム』の右手は、手首から先が粉々になっていた。
だが『ゴーレム』は痛みによる叫び声など上げない。すぐさま体勢を立て直し、ジンに襲い掛かろうと向かってくる。
（ダメだ……！　こいつが邪魔で『魔術師』の懐に入れない！　このままでは――！）
そう思考するジンの背後。別の『ゴーレム』が今まさに拳を振り下ろそうとしていた。
「ジンさん、避けて！」
「！」
別の場所にいた兵士からの叫び声に、ジンは瞬時に右へ転がった。
その瞬間、ジンのすぐ傍を鋼鉄の塊が通り過ぎた。地面を転がっていたジンは体勢を立て直し、『ゴーレム』と距離を取る。正直冷や汗をかかずにはいられなかった。
「くそ！　迷っている暇も無しか！」
ジンは改めて剣を握り直し、『ゴーレム』の懐へ飛び込もうとした。
だがその時――。

眩く紅い光がジンの視界を覆った。

ジンはハッとして『魔術師』の方を見る。最悪の事態だった。
「ハハハハハ！　残念だったな貴様ら！　『術式魔法陣』の発動だっ！！」
ゴウッという炎が唸りを上げ、首都の街並みが紅い光に呑まれていく。地面に出現した巨大な魔法陣は、恐らく首都全域を囲んでい

るのだろう。
（間に合わなかった……！　くそ……っ！）
ジンは紅い光に呑まれていく首都を見る事が出来ず、歯を食い縛って眼を閉じた。
止められなかった……。阻止出来なかった……。そんな暗い思いに、ジンの心は支配された。
ところが、だ。
「な……っ、何だこの現象は……！？」
「……？」
彼の耳に届いたのは、驚愕しているかのような『魔術師』の声だった。
ジンは恐る恐る眼を開いてみる。そして彼は、自分の眼を疑った。
「これは……！　炎が……、流れていく……？」
首都を飲み込もうとしていた巨大な魔法陣から放たれる炎が、巨大な奔流となってある一点に向かって集まっていく。
その方向を見つめ、ジンはある事を思い出した。
確か紅い髪の少年が向かった先も、この炎の奔流と同じ方角だと。
そしてジンは知っている。『深紅魔法』の使い手である紅い髪の少年が、とある能力を使えるようになる為に必死だった事を。
「これはまさか……、『紅の詩篇（フレイム・リーディング）』なのか！？」
紅い髪の少年から、『紅の詩篇（フレイム・リーディング）』が炎の従属能力だという事は聞いていた。だがこれ程までに強力な従属だと聞いた覚えはない。にも拘らず、現実はジンにこう告げている。
『紅の詩篇（フレイム・リーディング）』が成功したのだ、と。
「そんな……。そんなバカなッ！！」
首都を飲み込もうとしていた炎は、最早完全に消え去った。
呆然と虚空を見つめ、『魔術師』はピクリとも動かない。
「どうやら勝負あったようだな、『魔術師』！」
ジンが声を掛けても、『魔術師』は反応しない。どうやら今の現象のせいで戦意を失ったようだ。

呆然自失。まさに読んで字の如くといった状態だ。
だが、こちらはそうもいかないようだ。
三体の『ゴーレム』たちは遮る意味は無くなったというのに、未だに攻撃態勢を解こうとしない。荒野にいる『ゴーレム』と同じく、人間に敵意を剥き出しにしている。
「護衛とはいえ完全に自立行動だった訳か。――仕方がない。全て破壊する！」
ジンは両手の剣を握り直し、『ゴーレム』に立ち向かった。
この戦いに、もうすぐ終止符が打たれる。
紅い髪の少年の勝利を信じ、ジンは戦場を駆け抜けた。

とある戦場からの戦況報告・？（後書き）

という訳で、ディーンがアーベントと戦っている間の、ジンの戦いの話でした。

こうして書いてると、別視点描くのが楽しくて仕方ない（笑）

とある立ち位置からの状況報告・？

首都テルノアリスを狙うアーベント・ディベルグの企みは、『魔術師』と呼ばれる紅い髪の少年の活躍によって、見事に打ち砕かれた。

『紅の詩篇（フレイム・リーディング）』。

紅い髪の少年が戦いの中で会得した能力。それによって首都は崩壊を免れ、再び平和な日を迎える事が出来た。

だが、まだ全てが終わった訳ではなかった。

紅い髪の少年と、『妖魔』一族の生き残りである少女。

彼らの関係は何処に向かうのか。

ジンはそれを、ただ傍らから見届けるしかない。

首都を狙った戦いも漸く終決し、ジンは少し安堵していた。

紅い髪の少年には礼を言っておかなければならない。

彼がいなければ、恐らく首都は崩壊を免れなかっただろう。

だが首都が救われたのが、彼のおかげだと知る者は少ない。知っているのはジンを含めて、一部の王族と正規軍の中の数人の兵士のみ。『ギルド』に所属している者に関しては、ほとんどが事実を知らない。

（まぁそれでも、あいつはそれでいいと言うんだろうけどな……）

クスッと、面倒臭そうな顔をした紅い髪の少年を思い出し、ジンは笑う。

それに彼にはもう一つ、伝えておかなければならない事が出来た。

彼の探し人、ミレーナ・イアルフスの行方の事で。

『ギルド』の仲間から受けた報告が確かなら、この情報は間違いなく紅い髪の少年にとって朗報になるだろう。これを伝えた時、彼はどんな顔をするだろうか？

と、そんな事を考えていた時だった。

「いやぁ、待たせてすまないね」

部屋の扉が開くと同時に、若竹色の髪の青年ハルクが苦笑しながら現れた。

今ジンがいる部屋は、テルノアリス城内にあるハルクが普段使っている執務室だ。作業机と本棚、床には不思議な模様の絨毯と、貴族にしてはあまり豪華な感じがしない。一時、紅い髪の少年が使っていた部屋の方が豪華な気がする。

話があるとハルクに呼び出され、ジンは謁見の間に向かおうとしたのだが、ハルクがここで話そうと提案してきたのだ。

もちろんジンは例の如く畏まって、自分が入る訳にはいかないと言ったのだが、当然聞き入れてはもらえなかった。

少々緊張した面持ちで、ジンは正面の作業机に座るハルクを見た。

「――それで、話したい事というのは何ですか？」

率直にジンが尋ねると、ハルクは少し困った顔で話し出した。

「実はね……、キミの友人の友人。つまり、あのリネ・レディアと言う少女の事なんだ」

「！」

ハルクが『あの』少女の名前を出した事で、ジンは彼が何を言おうとしているのかすぐにわかった。

そんなジンの表情を苦笑しながら見つめ、ハルクは続ける。

「彼女は『倒王戦争』の頃に滅亡したと言われている一族、『妖魔』の生き残り……。そうだね？」

「……そのようです。俺はこの眼で見た訳ではありませんが、ディーン・イアルフスが重傷を負った際、その傷を『治癒魔法』なる術で治したのが、彼女だと聞いています」

最早隠し通せる事でもないと割り切り、ジンは事実を口にした。

多分自分の考えている事は当たっている。ハルクは、いやきっと、王族たちは――。
「彼女を軍で管理するつもりなんですね？」
ハルクの口から聞く前にと、ジンは先手を打った。結論を無駄に引き延ばしても恐らく意味はない。ならば早く終わらせてしまった方が、どちらの側にとってもいいはずだ。
それが例え、望んでいない結論だったとしても。
「――キミも『史実』の事は知っているだろう？」
ハルクは敢えてジンの質問には答えず、話を先に進める。
ジンもそれを黙って聞いていた。
「『妖魔』の『血』には、『魔術』の力を強める効力がある。実際アーベントもその『血』を飲んで、『魔術』の力が向上したというのは聞いているよ。……となればこの先、アーベントのように彼女の『妖魔』の『血』を悪用しようとする者が必ず現れるだろう。それを防ぐ為には――」
「彼女を軍で保護し、管理下に置く事でその身を守ると同時に、アーベントのように悪用する者の出現を食い止める。……と言う訳ですよね？」
ハルクの言葉を遮る形で、ジンは自分の口から結論を出した。その方が辛さが和らぐと思ったのだ。彼女と紅い髪の少年が引き裂かれる事に、憤りを覚える辛さが。
だがそれは、ほんの少し和らいだだけだった。
やはり納得のいかない思いが、ジンの中にはあった。
「彼には……、ディーン君にはすまないと思う。彼は必死の思いでこの首都を救ってくれたと言うのに、ボクらはそんな彼から大切な友人を奪い取ろうとしている。だけど仕方がないんだ。戦う力の無いボクらはこうする事でしか、自分たちの街を守る事が出来ない。――キミも辛いだろうけど、これは元老院の決定なんだ。わかってくれ」
「……」

ジンは口を開かなかった。開こうとはしなかった。
二人を引き離す事になる。
それを認めるのを、拒む自分がいたからだ。

◆　◆　◆

「――あまり驚いていないようだな」
それは、ジンが紅い髪の少年と共に、少女の休む部屋から去った後。一時間程経った頃だった。
再び部屋を訪れたジンが、ハルクから命じられた事の全てを彼女に伝えると、少女リネは少し寂しそうな顔をしたが、驚いているような様子は見られなかった。
ジンにはそれが意外だったのだ。
「……うん。何となくそんな予感はしてたんだ。あたしの『血』には『魔術』の力を高める効力がある。ジンが今言った元老院からの命令は、そのあたしの『血』を悪い人に渡さないようにする為のものなんでしょ？　なら、仕方ないよ。あたしだって、あたしの『血』のせいで傷付く人が出たら嫌だもん」
そう言ってリネは少し寂しそうに笑った。寂しそうに笑って、寂しそうに俯いた。
もしも今、あの紅い髪の少年がここにいたら、彼女のこんな表情を見て何と言っただろう？　慰めただろうか？　励ましただろうか？　……いや、彼はきっとどちらも選びはしない。どちらも選ばず、ただ黙って現状を受け入れるだろう。
現に彼は、ジンと二人になった時に言っていた。元々俺は一人だったと。俺一人が守ろうとするより、軍が守った方がいいに決まっ

ていると。
恐らく彼は割り切っていたのだ。王族の決定なら仕方がない事だと。元老院に意見を聞き入れてもらえる訳がないと。
だがジンは違った。
彼と違って、そこまで割り切れない。諦め切れない。
だからこそ、ジンは問い掛けていた。
「キミ自身はどう思ってる？」
「……えっ？」
俯いていた少女は、ジンのそんな問い掛けに顔を上げる。
「キミ自身はどう思ってるんだ？　王族の、元老院の命令に従いたいのか？　そんな簡単に諦められるのか？　ディーンと離れてしまう事が、悲しくはないのか？」
「それは……」
少女は言い淀む。本音を言ってしまうのが恐いのかも知れない。本音を口に出してしまえば、抑えが利かなくなってしまうのが恐ろしいのかも知れない。
だからジンは背中を押す。お節介だとわかっていて、それでも言わずにはいられなかった。
「どんな状況であれ一番大事なのは、やっぱりキミ自身の素直な気持ちなんじゃないのか？」
「……」
「例えどんな結果に終わるとしても、悔いを残すべきじゃない。――俺が言えるのは、それだけだ」
言いたい事は全部言った。だがそれは、ジンが言うべき言葉ではなかったかも知れない。しかしだからと言って、ジンには見て見ぬふりも出来なかった。二人には、このまま終わってほしくなかったのだ。
しばしの沈黙。
やがて少女は顔を上げる。
何かを決意したかのように。

◆　◆　◆

あの日から三日後。
ジンは首都の北側、第二検疫所を背に、紅い髪の少年と黒髪の少女の背中を見送っていた。
あの後リネはジンに告げた。紅い髪の少年と一緒にいたい、と。
その言葉でジンも決意した。
王族に、元老院に進言する事を。二人の仲を裂かないでくれ、と。
だが意外にも、ジンがハルクにその旨を伝えると、ハルクはあっさりと了承してくれた。他の元老院にも働き掛けると約束してくれた。
そしてその結果として、ジンは二人の背中を見送っている。
何かを言い合いながら歩いていく二人。それでもどこか、二人の背中は不思議と楽しげに見えた。
「――あなたもまた、旅がしてみたくなったんじゃない？　『ギルド』の任務とか仕事とか、そういうの一切抜きにしてさ」
傍らで、自分と同じように二人の背中を見送るエリーゼが、不意にそんな言葉を口にした。
ジンは優しく微笑みながら、遠ざかっていく二つの背を見つめる。
「さぁ……。どうだろうな」
そんな風に、ジンは答えた。

例え一つの物語であっても、そこには様々な視点がある。
紅い髪の少年が表側とするなら、ジン・ハートラーは裏側の立ち位置だった。
だが物語は続いていく。
彼らの意図しない所で、また別の物語が生まれていく。
その時は、ジン・ハートラーが表側に立つ番かも知れない。

とある立ち位置からの状況報告・？（後書き）

という訳で、テルノアリス編（裏）は終了です。
ジンくんの活躍、いかがだったでしょうか？

次にどんな外伝書くかはまだ決めてないので、ネタが決まったらまた更新します！
それと同時に、本編の方もよろしくお願いします！

Ｃｒｉｍｓｏｎ　&ａｍｐ；　Ｓｉｌｖｅｒ　－出会い－（前書き）

今回のお話は、テルノアリス編の中でディーンが言っていた、ジンと出会うきっかけになった『ある事件』のお話です。
またジンくん絡みのお話です（笑）
ちなみに今回は、ディーンが回想しているという体なので、語りは一人称です。

Crimson & Silver ―出会い―

以前どこかで話した事があったかも知れないが、長い事旅をしている俺にも、友達と呼べる人間がいる。

そいつと出会い、また一緒に立ち向かった『ある事件』の話を、今ここでしようかと思う。

なぜ、と言われると明確な答えが無いので返答に困るが、多分つい最近、そいつと再会したからだと思う。要するに、何かその頃の事を懐かしく感じたんだ。

俺は今旅の途中で、『紺碧の泉（アジュール・ファウンテン）』と言う街を目指している最中なのだが、現在は荒野のど真ん中で休憩中だ。なので時間はたっぷりある。

それは、俺がミレーナを探し始めてから五ヵ月程経った頃。ジラータル大陸の南西、『ケルフィオン』と言う街で起きた出来事だ。

その頃『ケルフィオン』では、『ギルド』から緊急の派遣要請を求めるチラシが、街の至る所に貼り付けられていた。こういう要請があった場合、正規のギルドメンバーでなくても、『ギルド』が依頼された仕事に一般人が参加する事が出来る。

尤も、このような事態での仕事となると、内容は大規模な『討伐作戦』などになるので、参加する者はある程度の力量と覚悟を要求される事になる。

その頃俺は、丁度旅の資金が底を突き掛けていて、金を都合しようと『ギルド』の仕事に参加する事にした。

今にして思えば、そんな軽い気持ちで『ギルド』の仕事に参加した事が、俺とあいつが知り合うきっかけになったんだ。

俺の唯一の親友と呼べる少年。銀髪の剣士、ジン・ハートラーと――。

「――今回の『ゴーレム討伐作戦』に参加させてもらう事になった、ディーンだ。よろしく」
俺は特に何の感慨もなく、事務的な感じでギルドメンバーに挨拶した。
ミレーナを探す旅の途中で訪れた、『ケルフィオン』と言う街の『ギルド』内。周りの床より少し高くなった壇上のような場所に、俺は今立っている。
周りには男にしろ女にしろ、パッと見、ガラの悪そうな連中が大勢いる。『ギルド』内に並べられた丸いテーブルを囲むギルドメンバーたちは、それぞれ違った面持ちで俺の方を見ている。
実際、俺の挨拶を聞いた『ギルド』の連中の反応は個々で違っていた。大げさに拍手する者、俺と同じで事務的な感じで疎(まば)らに拍手する者、全く興味を示さない者。
だがどんな反応をするにしろ、俺にとってはどうでもいい事だった。
今回俺がこの作戦に参加したのは、あくまで旅の資金を工面したいが為の事だ。別に友達を作りに来てる訳じゃない。向こうの側にも、そうだと気付いてる奴が何人かいるみたいだしな。この方が俺としてもやりやすい。
「――じゃあディーン君には、遺跡の南側を担当するアルフレッド君のチームに参加してもらおう」
俺がぼんやり考え込んでいると、俺の隣に立った三十代後半の柿色の髪の男が、口に銜(くわ)えたパイプから煙を漂わせながら、俺の肩を軽く叩いた。

彼の名前はクルス・ランドリア。この『ケルフィオン』の『ギルド』の『ギルドマスター』で、この職と合わせて医者も兼任しているそうだ。俺もさっき知り合ったばかりで詳しくは知らないが、ジラータル大陸にある全『ギルド』の『ギルドマスター』の中で、最年少として今の地位に着いた結構な有名人らしい。

そんなクルスは、テーブルに着いているあるチームの方を見た。男三人、女一人の四人編成のそのチームの中、アルフレッドと呼ばれた二十代中頃の茶髪の男が、一瞬顔を顰(しか)めたのを俺は見逃さなかった。

（……歓迎されてないって訳ね。ま、金だけ稼ぎに来た余所者(よそもの)なんだから、当然か）

そんな風に思いながら、俺はふと、同じテーブルに座っている一人の少年に眼が行った。

俺の紅い髪と同じで目立ちそうな銀髪の髪に、整えられた端正な顔立ち。冷静さを纏っている雰囲気は、それだけで女を虜にしそうな感じだ。かっこいい、と素直に思える少年の背中には、鍔の形が違う二本の剣が背負われている。

と、俺はその銀髪の少年と眼が合った。すると少年は、ゆっくりとした動作で軽く俺に会釈した。

何だか爽やかな奴だな。そう思ったのを覚えている。

その少年こそ、後に俺と意気投合する事になる、ジン・ハートラーその人だった。

『ゴーレム討伐作戦』――。
妙に大げさに銘打たれたその作戦内容は、至って簡単なものだった。
『ケルフィオン』の街から南東に十キロ程離れた位置にある『アドルズ渓谷』。首都『テルノアリス』から遥か西の方角にある『ブラウズナー渓谷』程ではないが、未開の場所が多いと言われている渓谷だ。
その『アドルズ渓谷』でつい先日、『魔術戦争』時代に造られたと思われる遺跡が発見されたそうだ。
発見したのは『ケルフィオン』で考古学の研究を行なっている学者連中らしいのだが、発見したその遺跡に、『ある物』が大量に配置されていて、研究作業の妨げになっているそうなのだ。
その『ある物』と言うのが、『ゴーレム』。
遺跡を発見した際、学者連中は大量の『ゴーレム』に遭遇し、命辛々逃げてきたそうだ。だがもちろん、学者連中はその遺跡発掘を諦めるつもりはない。だから今回、『ケルフィオン』の『ギルド』に依頼があったのだ。
遺跡にいる大量の『ゴーレム』たちを破壊してほしい、と。

今回の大規模な作戦に辺り、『ギルド』は一般人の中からも参加者を募った。それによって編成された作戦チームは、ギルドメンバーも合わせて総勢七十人を超す大部隊となった。
もちろん正規軍の数に比べれば微々たるものだが、民間の、しかも一作戦においてこれだけの人数が揃う事はまずあり得ない。それだけ、『ギルドマスター』クルスが今回の作戦に掛ける意気込みは、今までとは違うという事なんだろう。

だからこそ、金を稼ぐという軽い気持ちでこの作戦に参加した事を、俺は早くから後悔していた。
まさかこんな凄い展開になるなんて予想もしてないんだ。ある意味他の人間よりやる気のない俺がこの場にいる事自体、酷く場違いなような気がしていた。
「――お前、ディーンとか言ったよな？」
現地に着く直前、俺が参加したチームのリーダーである男、アルフレッド・ダグラスが、酷く嫌悪したような口調で俺に声を掛けてきた。
恐らく彼は、俺が金目当てである事、そして他の人間に比べてやる気がない事に、早くから気付いていたのだろう。だからこそ、どこか敵意を向けるかのように俺に声を掛けてきたのだ。
俺もそうとわかっていて、それでも無視する事なく適当に言葉を返した。
「……それがどうかしたのか？」
「戦いが始まる前に言っとく。このチームに参加した以上、お前は俺の指示に従ってもらう。俺が戦えと言えば戦い、死ねと言えばその場で即死ね。わかったか？」
彼が嫌味な感じで笑って言うと、周りの仲間たちは同じく嫌味な感じで小さく笑い声を上げた。
こういう時、俺はどうしても喧嘩腰になってしまう。もう少し大人しく、柔軟な対応が出来ていればよかったんだろうが、生憎俺はそんな殊勝な部類の人間じゃない。媚を売るなんてまっぴら御免だった。
「随分と偉そうな物言いだな。高々一『ギルド』の一チームリーダーが王様気取りかよ？　ハッ、何とも器の小さい野郎だ」
俺の言葉が完全に癇に障ったんだろう。前を歩いていたアルフレッドは突然振り返り、右手で俺の胸倉を思い切り掴んだ。
「何だと？　何様のつもりだ。金を稼ぐ事しか考えてねぇ野郎がよ」
「あんたこそ何様なんだよ？　他人のあんたに俺のやる事イチイチ

指図される覚えはねぇけどな」
「てめぇ……！」
俺はアルフレッドと正面から睨み合った。自分でもなんて無意味な事をしているんだとは思っているが、どうにも感情を抑えられそうにない。
今思い返してみると、あの頃の俺はミレーナの行方が一向に掴めない事に、少し苛立ちを覚えていたのかも知れない。
そんな時に、眼の前のアルフレッドのような、格好のストレス解消相手が見つかったんだ。そう考えると、俺が喧嘩腰になっていたのも無理からぬ事だったのかも知れない。
睨み合い、お互いに殴り合いの喧嘩が始まりそうな張り詰めた空気。それを打ち破ったのは、あの銀髪の少年だった。
「止めろ、二人とも。まさかもう今回の目的を忘れてるんじゃないだろうな？」
声のした方を、俺とアルフレッドは同時に見つめた。
そこに立っていた銀髪の少年ジンは、呆れたように俺たち二人を見つめていた。
「まずアルフレッド。その右手を離せ。いくら彼が金目当てだからと言って、無下に扱っていい事にはならないだろ？」
ジンに諭すような言葉を掛けられ、アルフレッドは「チッ！」っと激しく舌打ちして、強引に右手を離した。それを確認した後、ジンは今度は俺に視線を向ける。
「キミもキミだ。確かにアルフレッドの言動にも問題はあるが、キミのその喧嘩腰の物言いにも賛同は出来ないな。それぞれ別の思惑はあるにしろ、今俺たちはチームを組んでるんだ。結束しろとまでは言わないが、せめてもう少しくらい協力的にしてくれ」
「……ああ、悪かった」
的確に痛い所を突かれた俺は、自分の非を認めざるを得なかった。呟くように謝り、何事もなかったかのように歩き出すジンの背中を俺は見つめた。

自分の非を認めると同時に、俺には思った事があった。
こいつは何だか凄い奴なんだな、と。

◆　◆　◆

「――自己紹介がまだだったな。俺の名はジン・ハートラー。キミの名前は……、とそうだ。ディーンと言う名前だったな」
『アドルズ渓谷』に着いた直後、俺たちのチームが配置に着く少し前に、そう言って銀髪の少年は話し掛けてきた。
正直な話、ジンに話し掛けられた時は戸惑わずにはいられなかった。先刻、アルフレッドと衝突し掛けていた件で、俺は少なからず、この少年からも反感を買っているんじゃないかと思っていたからだ。
だからこそ、ごく自然な感じで話し掛けてくれたジンに、感謝の念を抱いている面もあった。
「さっきは悪かったな。飛び入り参加の俺みたいな人間が、空気を悪くしちまって……」
「気にするな……、とまでは言えないが、思い悩む程でもない。『ギルド』で仕事をしていると、多かれ少なかれああいった衝突は嫌でも起きる。それぞれ思惑の違う人間が一堂に会しているんだ。それも仕方のない事さ」
ジンは軽い感じで溜め息をつくと苦笑した。その仕草が本当に自然で、嫌味のない感じだった。さっきのアルフレッドって奴とはエライ違いだ。
「あんたは正規のギルドメンバーなんだろ？　『ギルド』に参加して、どれぐらいになるんだ？」
気付けば俺は、そんな風に質問していた。一人旅をしている俺が

他人に興味を持つなんて、初めての事だったかも知れない。
そんな俺を不思議に思う事もなく、ジンは顎に手を当てて考えるような仕草をした。
「そうだな……。もう四年ぐらいになるはずだ。ある目的があってね……」
「目的？　金でも溜めて、何か買うのか？」
「……まぁ、そんな所だ」
俺の言葉に対するジンの答えは、どことなく歯切れが悪いような気がした。
俺がそれを訝しく思っていると、まるで話題を変えようとするかのように、今度はジンが尋ねてきた。
「俺もキミに聞きたい事があるんだけど、いいかい？」
「？　何だよ？」
「さっきキミは、自分の名前をフルネームで言わなかっただろ？ファーストネームしか名乗らないのは、何か理由があるのかい？」
「！　あ～、それはだな……」
焦った顔をして言い淀んだ俺を見て、ジンは首を傾げて訝しそうな顔をした。やはりこの世界、フルネームを名乗らないと不思議に思うのは、どこの人間も同じなんだろうか？
ジンの言う通り、俺にはフルネームを名乗らない明確な理由がある。
だがそれは、あくまでも俺個人の面倒臭い性格が災いしているだけの事で、別に名乗るのも憚(はばか)られるような名前だという訳ではない。むしろその逆で、『この名前』を聞けばこの大陸に住むほとんどの人間は驚くんじゃないかという有名な名前だ。
その為、騒がれるのが嫌な俺は、自己紹介をする時は極力、ファーストネームだけを名乗るように心掛けているのだ。だからこうして突っ込まれると、どう返そうか四苦八苦してしまう。
以前訝しげな顔をしたままのジンに、どう言い訳しようかあれこれ逡巡していた時だった。

「――よし、お前ら。ここが俺たちの配置場所だ」
前方を歩いていたアルフレッドの掛け声で、移動を続けていたチームの足が止まった。辺りを見ると、そこは『アドルズ渓谷』の南側、眼下に古びた遺跡を望む、切り立った崖の上部に当たる部分だった。谷底までは約五十メートル程。どうやってここから降りるつもりなのかと考えていると、アルフレッドのチームのメンバーが、崖下に降りる為のロープを設置し始めた。
「あと五分程で行動開始だ。全員、戦闘準備しとけ」
アルフレッドが真剣な表情で全員に呼び掛けると、俺の傍らにいたジンも表情を改めた。
「おしゃべりはここまでみたいだな。ここから先は、少しの油断が命取りになる」
「あ、ああ。そうだな」
ジンに生返事を返しながら、俺はこの時ばかりはアルフレッドに感謝した。実に上手いタイミングで、話を切り上げさせてくれたものだ。
だがジンの言う通り、そうゆったりと構えていられる訳でもない。アルフレッドが言った作戦開始時間は、間もなく訪れる。ジンやアルフレッド、そして他のチームメンバーがそれぞれ武器を構える中、俺は特に何もせず、ただ神経を集中させていた。
俺は武器を使わない。より厳密に言えば、使うのは『とある技術』だけだ。
と、その時。谷の北側上空に、紅い光を放つ何かが打ち上げられた。間違いなく、他のギルドメンバーからの合図だった。
その光を見上げながら、アルフレッドが叫ぶ。
「――作戦開始だ！　行くぞ！」
ロープを掴み、崖下へと飛び込んでいくアルフレッドたちに、俺も猛然と続いた。
いつの間にか、やる気が少し芽生えている。戦いを前に興奮しているのかも知れない。

とにかく今、『ゴーレム討伐作戦』は始まった！

Ｃｒｉｍｓｏｎ　&ａｍｐ；　Ｓｉｌｖｅｒ　－作戦内容－（後書き）

外伝もテルノアリス編（裏）と合わせるともう九話目とは……。
読書感想文すらまともに書けなかった自分が、これだけの文章書いてるなんて信じられません（笑）

Ｃｒｉｍｓｏｎ　&ａｍｐ；　Ｓｉｌｖｅｒ　－行動開始－（前書き）

前回の更新から間が開き過ぎましたね、すみません（汗）
という訳で、外伝十話目です！

　崖下に降り立ってすぐ、俺は遺跡の敷地内に直進するアルフレッドのチームとは別の方向へ向かって走り出した。
　すると背後から、例の如くアルフレッドの怒号が飛んでくる。
「おい、てめぇ！　勝手な行動すんな！　俺の命令に従え！　聞いてんのかクソ野郎！！」
　最後の言葉には若干苛立ちを覚えたが、俺はアルフレッドの言葉を無視して走り続けた。
　元々俺は、アルフレッドたちの前で戦う気は無かった。俺が扱う『とある技術』をあいつらの前で見せれば、それだけで俺は何者なのかと尋ねられる事だろう。それを防ぐ意味も込めて、俺は単独行動を取る事にした。
　それに恐らく、アルフレッドたちが向かった先には、『ゴーレム』はあまりいないはずだ。俺には『ゴーレム』たちが集まっていそうな場所の見当が付いていた。
　今回の作戦は『ゴーレム』の討伐。つまり、より多く『ゴーレム』がいそうな場所を探してさっさと片付ければ、それだけ早く仕事が終わる事にも繋がる。
「要するに、さっさと『ゴーレム』を全滅させればいいんだろ？　俺に掛かれば楽勝だっつーの！」
　俺は心の底から溢れてくるような高揚感で、自分を抑えられなくなっていた。
　早く戦いたい。
　余計な事を考えずに、ただひたすら戦っていたい。
　金を稼ぐ為にこの作戦に参加したはずだったのに、いつの間にか俺は、そんな戦闘狂染みた考えの下、遺跡のある一点を目指して走り続けていた。
　俺が向かっているのは遺跡の南西。数多くの石柱が並ぶ石畳の道

の中央に、高さ十五メートル程の大きさの、三角形型の神殿のような構造物がある。
俺はその神殿から三十メートル程の距離を開けて、一旦立ち止まった。
「いかにもって感じの場所だよな」
独り言を呟き、俺は乱れた息を落ち着かせて、ゆっくりと神殿に向かって歩き出した。
それは丁度半分の距離。十五メートル程進んだ時だった。
唐突に地面が短く、だが強く揺れたかと思うと、石畳の道の両脇に立ち並んだ石柱の根元が、砂を巻き上げながら口を開け、中から轟音を響かせながら無数の『ゴーレム』が現れた。
「ビンゴ、ってね」
これは神殿に近寄ろうとする者に対して発動する、言わばトラップのようなものだ。
作戦開始前、崖の上から遺跡の全体像を見渡した時、俺は遺跡の南西にあったこの神殿が妙に気になったのだ。
確かに、遺跡の本殿の方にもいくつか気になる点は見られたが、そこまで行くとさすがに他のギルドメンバーと鉢合わせる可能性がある。それを避け、かつ多くの『ゴーレム』を倒せる場所として、俺はこの場所に賭けてみたという訳だ。
而(しか)してその賭けは、どうやら俺の勝ちらしい。現にこうして、俺の眼の前には数多くの『ゴーレム』たちが立ち並んでいるのだから。
「……とは言っても、こいつら全員を倒さなきゃ、完全に賭けに勝ったとは言えねぇけどな！」
誰にともなく叫ぶと、俺は両腕を水平に構えた。
その瞬間、俺の周囲で異変が起きる。
ゴウッという唸り声のような音を立てながら、俺の周囲で発生したのは灼熱の炎。俺の紅い髪と同じ、深紅を思わせる炎。
自然現象などでは決してない。この灼熱の炎は、『魔術』によって生み出されたものだ。

そして『魔術』を行使する俺のような存在を、この世界では総じてこう呼ぶ。

『魔術師』、と。

「いきなりデカイの喰らわせてやるぜ！」

発生した灼熱の炎は、渦を巻きながら俺の頭上に集束していく。

出来上がった炎の塊は、続く俺の言葉を待っているかのように、空中で静止している。

「『深紅の流星（クリムゾン・レイン）』！」

俺が叫ぶと同時に、炎の塊が弾け飛び、無数の火球となって『ゴーレム』たちの身体に降り注いだ。

俺が扱う『深紅魔法』の中で、『深紅の流星（クリムゾン・レイン）』は一つの対象にその炎を集中砲火させれば、多大な破壊力を発揮する大技だ。

だが今眼の前にいる『ゴーレム』たちは、装甲が非常に硬い上、数が多い。その為、さすがに一撃で倒す事は困難だったようだ。『ゴーレム』たちは装甲の一部を崩しながらも、活動を停止させるまでには至っていないかった。

その巨体の一部を崩しながらも、ゆっくりと動き始める『ゴーレム』たち。

俺は再び『紅蓮の爆炎剣（フレイム・ロングソード）』を出現させ、群がる『ゴーレム』の中心に向かって走り出した。

疾走する俺を狙おうと、右側前方にいた『ゴーレム』が巨大な右拳を振り下ろしてきた。

「当たるか！」

一声叫び、俺は高く跳躍してその一撃を躱した。足の下を通り過ぎる巨大な拳を一瞥し、その腕の上に着地する。

「うおおおおおぉぉぉっ！」

まるで階段を駆け上がるみたいな感覚で、俺は『ゴーレム』の身体を踏み台にして進み、肩の辺りで再び跳躍する。そして『ゴーレ

ム』の顔の部分に向けて、炎剣を振り下ろした。
刀身が接触した部分から、爆発と炎が噴き出す。
俺は『ゴーレム』の背後に着地すると、その背中に向けて、虚空に浮かべた十字の炎を放った。『烈火の十字爆撃（バーニング・クロス）』は『ゴーレム』の背中に飛来すると、紅い爆発を起こしてその装甲を破壊する。
「ドンドン行くぜーーッ！」
俺は続け様に、辺りの『ゴーレム』たちに向かって、無数の『烈火の十字爆撃（バーニング・クロス）』を放った。
あちこちで起こる紅い爆発。それを見ていると、俺は何とも言えない気分になった。
自分は今、戦場にいる。数多くの『魔術兵器』を相手に、たった一人で戦い続けている。それが俺の胸の内に溜まっていた何かを、吹き飛ばしてくれていた。
もっとだ……！　もっと戦いを！
いつの間にか、戦いを欲する戦闘狂のようになっていた俺は、自分の周囲に気を配る事を怠っていた。
無数の『烈火の十字爆撃（バーニング・クロス）』の爆発で生まれた爆煙によって、俺は背後に迫る『ゴーレム』に気付くのが遅れた。
巨大な鋼鉄の塊の一撃が、俺の身体に振り下ろされる、まさにその寸前だった。
「伏せろ、ディーン！」
「！」
俺は声のした方を振り返るよりも、その指示に従う事の方を選んだ。
その直後。俺の頭上を巨大な鋼鉄の拳が通り過ぎた。あと一瞬伏せるのが遅かったら、俺の身体は粉砕されていただろう。
「そのままジッとしてろ！」
今度こそ俺は、声のした方を振り向く。
するとそこには、両手に刀身の色が違う剣を握り、こちらに疾走してくる銀髪の少年の姿があった。

確か名前は――、ジン・ハートラー！　何であいつがここに！？
「『黒裂剣（こくれつけん）』」
ジンが何かを呟いた瞬間、彼の右手に握られていた黒い刀身の剣が、微かに振動したように見えた。
そしてジンは、その剣を『ゴーレム』に向けて振るう。
するとその瞬間、黒い剣の刀身部分から黒い光のようなものが発生し、『ゴーレム』の右腕の部分に飛来した。
と同時に、黒い光が『ゴーレム』の右腕を容易く破壊してみせた。
俺はその場から飛び退いて、立ち止まったジンの隣に転がるように到達する。
「――悪い、助かった。だけどあんた、何でここに？」
体勢を立て直しながら尋ねると、ジンは『ゴーレム』の群れを見つめながら口を開く。
「単独行動するキミを止めに来たんだ。本来は五人編成のチームを崩す訳にはいかないんだが、キミはアルフレッドの言葉に聞く耳を持っていないようだったからね。キミ一人の為に、チーム全体の配置を変える訳にはいかない。だから俺が一人で来たんだ」
「そりゃどうも。――それで？　命令違反の俺を罰しに来たのか？」
「そのつもりだったが事情が変わった。まずは眼の前の『ゴーレム』たちを片付ける。キミに罰を与えるのは、その後だ」
何だか思っていた以上に、このジン・ハートラーと言う少年は手厳しい奴みたいだ。俺は苦笑しながら、ジンと同じように、眼の前の『ゴーレム』たちに視線を向ける。
「だったらお互い、絶対に生き残らなきゃな」
「そうしてもらわないとこっちも困る」
「行くぜ、ジン！」
「キミに言われるまでもない」
そう言い終えた瞬間、ジンは素早く駆け出す。
その後に続く為、俺は『紅蓮の爆炎剣（フレイム・ロングソード）』を構え、『ゴーレム』の群れに突貫した。

Ｃｒｉｍｓｏｎ　＆ａｍｐ；　Ｓｉｌｖｅｒ　－行動開始－（後書き）

本編の方に気を取られ過ぎて外伝が疎かになるっていう（笑）
まぁ逆のパターンじゃないだけマシなんですかね……？

とにかく、今後はこのような事がないよう気をつけたいと思います。
頑張れ俺！

Ｃｒｉｍｓｏｎ　&ａｍｐ；　Ｓｉｌｖｅｒ　－少年たちの過去－（前書き）

今更ながら、外伝最新話投稿です（苦笑）
本編に比べれば読んでる人少ないみたいですが、途中まで読んでた方、大変遅くなって申し訳ありません！

二十分ぐらい経った頃だろうか？
気付くと俺の周りには、数多くの『ゴーレム』の残骸が転がっていた。
俺の視界で捉えられる位置に『ゴーレム』の姿はない。恐らくこの辺りにいた『ゴーレム』は、全て破壊する事が出来たようだ。
とりあえずは戦闘終了と考え、俺は右手の『紅蓮の爆炎剣（フレイム・ロングソード）』を消滅させた。
その瞬間だった。
「動くな」
「！」
背後から俺の首筋に、黒い刀身の剣がピタリと張り付いた。剣の刃から、冷たく硬い感触が伝わってくる。
今俺の背後に立っているのは、間違いなくジン・ハートラーだ。これから彼の言っていた、『罰』とやらが始まろうとしているらしい。
「随分いきなりなんだな。あんたが言ってた罰ってのは、殺すって事なのか？」
「殺すつもりはない。そんな事をしても、何の意味もないからな」
「そうかよ。だったら何でこんな真似を？」
「キミにはいくつか尋ねたい事がある。こうした方が、正直に答えてもらい易いだろ？」
「尋ねたい事？」
ジンに背中を向けたまま、俺はチラリと背後を振り返る。真剣な表情でこっちを見ているジンの瞳には、確かに殺気のようなものは感じられない。
訝しく思っていると、ジンの口がゆっくりと動き始める。

「さっきのキミの力。俺は門外漢だからよくはわかないが、あの力は『魔術』だろ？」
「……ああ、そうだ」
「つまりキミは、『魔術師』という事だな？」
「……一体何が知りたいんだよ、あんたは？」
回りくどい質問の仕方は好きじゃない。俺は彼の真意を知る為、敢えて率直に尋ね返した。
するとジンは俺の意志を悟ったのか、黒い刃の剣をゆっくりと俺の首筋から外し、背中の鞘に納め直す。
「キミが『魔術師』なら、もしかしたら俺の追っている男の事を知っているんじゃないかと思ってね。それを確かめたかったんだ」
「あんたが追ってる男？」
「さっき、俺がいつから『ギルド』メンバーに加わったか、という話をしただろ？　俺が追っているその男は、俺が『ギルド』に入るきっかけを作った男だ」
ジンは僅かに俯いて間を開けた後、再び顔を上げて強い口調で言い放った。
「ボルガ・フライトと言う男を知っているか？」
「……いや、知らねぇ。聞いた事ない名前だ」
「本当か？」
変に疑り深い奴だな。この状況で嘘ついて何になんだよ？
俺は内心で少々イラッとしながらも、顔には出さないように平静を装う。
「本当に知らねぇよ。大体何なんだ、その男が作ったきっかけになった事って？」
俺がそう問い掛けると、ジンは一瞬言い淀んだようだが、意を決したかのようにゆっくりと口を開く。
「奴は……、ボルガ・フライトは――」
「俺の家族の命を奪った男だ」

「……え？」
命を奪った？　それは文字通りの意味として受け取っていい事なのか？
その言葉が本当なら、ボルガ・フライトって奴はあんたの――。
「奴は俺の仇だ」
「！」
俺が言い淀んでいた事を、ジンはあっさりと口にした。
『ギルド』で初めて顔を合わせた時とは違う。彼の瞳にはまるで、憎しみの炎が宿っているかのようだ。
だけど俺には疑問が残る。
彼はなぜ、その仇の名前を俺に訪ねてきたんだろう？　俺にその質問をぶつけた意図は何なんだ？
あれこれ思考する俺をよそに、ジンは真剣な眼差しで続ける。
「俺がボルガ・フライトに会ったのは一度きり。その時奴は、『雷』を操る大剣、『魔剣』を所持していたんだ」
「『雷』を操る『魔剣』だと……？」
この大陸には、『魔術』を武器に介して殺傷能力を高めた希少な武器、『魔剣』と呼ばれる物が存在する。
『印術』を用いて武器に特殊な能力を付けるのとは違い、『魔剣』は製造の段階から、高尚な『魔術師』と高い技術を持った『刀鍛冶』が、共同で造り出していく事で生まれる、最も強大な力を持った武器だ。
だが『魔術師』と『刀鍛冶』の両方が揃ったからと言って、必ずしも『魔剣』製造が上手くいく訳じゃない。
昔ミレーナに聞いた話だが、『魔剣』は普通の武器を造るのと違い、武器その物に『魔術』の力を定着させなければならない。その作業の難易度がとてつもなく高い為、『魔剣』一本を製造するのに年単位の時間が掛かるらしい。
だからこそ失敗や挫折を繰り返す者が多く、『魔剣』は希少な物

となっているんだ。
そしてその『魔剣』には、様々な『魔術』の力が宿っているとされる。多分、今ジンが持っている二本の剣も『魔剣』なんだろう。さっき見た黒い衝撃波なんかが、その証拠だ。
希少とはいえ、数種類はあるとされる『魔剣』。もしかしたらその中に、彼が言った『雷』を操る『魔剣』というのも、存在しているのかも知れない。
「なるほど？　俺が『魔術師』だってわかったから、その男の話をしたって訳だな？　上手くいけばその『魔剣』を造り出した『魔術師』を特定し、なおかつ男の行方を追う手掛かりにもなると思って」
「ああ、そうだ。――だがどうやら、キミは本当に何も知らないようだな。さっきの非礼は詫びるよ。すまなかった」
そう言ってジンは、深々と頭を下げた。
だが俺としては、まだ気持ちの整理が付いていない。一度に色んな事を暴露されて少々混乱している。
何があったのか……、というのは、あまり深く聞くべきじゃないんだろう。それは知り合って間もない俺がする役目じゃないはずだ。
「と、とにかく頭を上げてくれよ。別に気にしてないからさ……」
「……そうか？　ならその言葉、有り難く受け取っておくよ、ディーン」
「……」
何だろう……。何か凄く自分が悪い事をしている気がする。
いや、何となく理由はわかってるんだ。彼は自分の事情を、少なからず俺に話してくれたというのに、俺の方はと言えば、未だに彼に隠している事がある。
それは俺のフルネームであり、俺がどんな存在かという事だ。
『深紅魔法』の事。
ミレーナの事。
どこからどこまでを、どういう風に話せばいいのかわからないが、それでも俺は思う。

このままじゃダメだ……！
「なぁ、ジ――」
だがその時、彼の名前を呼ぼうとした俺の声は、遠くから響いてきた爆音によって掻き消された。
俺とジンは同時にその方向を振り返る。
音のした方向は遺跡の中心部。そこから土煙のようなものが、次々と舞い上がっていくのが見えた。
「あそこは確か、アルフレッドたちが向かった方向のはずだ……！」
「……おい、まさか」
俺は思わずジンと顔を見合わせる。
そして次の瞬間には、二人同時に駆け出していた。
今回の作戦の目的は、遺跡を徘徊する『ゴーレム』を一体残らず破壊する事。
ついさっきまでの俺たちと同じように、あそこでも激しい戦闘が繰り広げられている。
どうやらジンに俺の事を話すのは、もう少し後になりそうだ。

Ｃｒｉｍｓｏｎ　＆ａｍｐ；　Ｓｉｌｖｅｒ　－少年たちの過去－（後書き）

ああ……、一体どれだけの間外伝に手を付けてなかった事か……。
やはり二足の草鞋なんて作者には到底無理だったという事なんでしょう（苦笑）

また時間掛かるかも知れませんが、それでも何とか書き上げられるよう努力していきます。

Crimson & Silver ―邪魔者―（前書き）

またまた遅くなりました。
それでは外伝十二話目です！

俺とジンが辿り着いた先では、確かに大規模な戦闘が行なわれていた。

ただし、『ギルド』の精鋭たちが圧倒されているという状況で。

単に彼らと『ゴーレム』たちの間に力の差があるからじゃない。

俺のような『魔術師』じゃないとはいえ、『ギルド』に所属している人間は『ゴーレム』を倒せるだけの力は有しているはずだ。

そう。これは単純に数の問題だった。

相手側の数、遺跡の中心部から現れた『ゴーレム』の数が多すぎるんだ。俺とジンが戦っていた場所にもかなりの数がいたが、ここはその比じゃない。数えられるだけでも、五十体はいる。

「アルフレッド！」

今だ大量の『ゴーレム』が蹂躙し続ける中、激しい戦闘によって出来た瓦礫の影にアルフレッドの姿を見つけ、ジンが足早に駆け寄る。

「一体何があったんだ？　他のチームのメンバーは？」

「多分ブービートラップってヤツだ。俺たちが遺跡の中心に入った瞬間、それが作動しちまったらしい。それにこの『ゴーレム』の群れのせいで仲間と分断されてな。俺以外の奴らは他の場所で戦ってる」

と、そこまでジンに状況を説明していたアルフレッドは、俺の姿を見るなり顔をしかめて、酷くイラついた口調で言う。

「てめぇ、今頃何しに現れやがった!?　元はと言えば、てめぇが勝手に動いてチームの連携を崩したからこんな状況になったんだぞ！」

よく言うぜ、俺とは協力する気なんて無かった奴がよ。まぁ、確かに俺に非があるのは認めるけど……。

内心で俺がそう思っていると、傍らのジンが難しそうな顔で言う。
「とにかく、この数が相手じゃ分が悪過ぎる。信号弾を使って、他のみんなにも撤退を呼び掛けよう」
「ああ？　撤退だと！？　何言ってんだジン！　ここまで来て引き下がれる訳ねぇだろうが！」
俺の眼から見ても、アルフレッドの奴は冷静な判断力を失ってる。確実に、ジンの言ってる事の方が正しいはずだ。
「お前こそ何を言ってるんだ！　これ以上戦いが長引けば、不利になるのはこっちだ！　お前一人の勝手な意地で、犠牲者が出たらどうするつもりだ！？」
「うるせぇ！　このチームのリーダーは俺だ！」
制止しようとするジンを振り払い、アルフレッドは駆け出そうとする。
その彼の肩を、ジンが掴んだ時だった。
「邪魔なんだよてめぇ！」
アルフレッドの右拳が、完全に不意を突かれたジンの左頬に叩き込まれた。
俺の眼の前で、銀色の髪の少年の身体が一瞬宙に浮き、受け身を取れずにそのまま地面へ倒れ込む。
その光景を見た時、突然俺の中で何かが弾けた。
なぜこんな腹立たしい気分になったんだろう？
ジンとは今日会ったばかりで、会話するのも初めてで、作戦の中で出来たチームのメンバー内の一人でしかない。
それなのに、アルフレッドに殴られたジンを見た時、俺が感じたものは怒りだった。
アルフレッドへの静かな怒り。
それが原動力となって、気付けば俺の身体は動いていた。
右掌に集めた、炎の塊。
それを再び駆け出そうとしているアルフレッドの背に向かって、思い切り投げつけた。

「ぐあああああっ！」
アルフレッドの背中に炎が命中し、前のめりに倒れ込む。
するとその様子を見ていたジンが、すぐ様アルフレッドの傍らに駆け寄った。
「大丈夫かアルフレッド！？　――何をしているんだディーン！」
左頬を腫らした顔で、ジンは俺を問い詰める。
そのジンに倣うみたいに、倒れているアルフレッドが憎しみの籠った瞳で俺を睨んで言う。
「てめぇ……！　一体どういうつもりだ！？」
二人の視線を受けながら、俺はアルフレッドが向かおうとしていた方向へ歩き出しながら、出来るだけ冷たい感じがするように言葉を紡ぐ。
この状況を収める為には、さっさと『ゴーレム』たちを倒す必要がある。俺が今からしようとする事にジンやアルフレッドを巻き込まないようにするには、こうするしかない。
「どうもこうも、あんたがさっき言ったじゃねぇか。こんな状況になったのは、チームの輪を乱した俺のせいだってよ。だから俺が責任を取ろうとしてんだよ。一人でな」
「ああ……！？」
「その為にはあんたがいると邪魔なんだ。だからそこで大人しく寝てろ」
「何ィ……ッ！」
俺は一旦立ち止まり、アルフレッドの言葉を無視してジンに言う。
「ジン。こいつの事を頼む」
俺がそれだけ告げると、案の定ジンから制止しようとするみたいな台詞が出てきた。
「キミはどうするつもりなんだ。まさかあの数の『ゴーレム』を一人で倒せるとでも思ってるのか？」
「そのまさかだよ」
「ダメだ！　いくらキミが『魔術師』とはいえ無謀過ぎる！　大体

キミはさっき一人で戦って苦戦していただろ？」
確かにジンの言う通りだ。いくら俺が『魔術師』だからといって、何体もの『ゴーレム』を一度に相手にするのは無理がある。
さっきまでの俺は、そんな当たり前の事すら判断出来ない程、冷静さを失っていたんだ。
だからこんな事態を招いてしまった。
チームの連携を乱し、メンバー全員を危険に晒すような事を。
誰かのせいだと言うなら、間違いなく俺のせいだ。
でも、だからこそ――。
「さっきは色々と油断してたからな。今度は大丈夫だって」
俺は、ジンを拍子抜けさせるような呑気な声を敢えて出した。彼に俺の内心を、悟らせない為に。
「そんな根拠の無い理屈――」
「もう一回、改めて自己紹介しとくよ」
俺はジンの言葉を遮りながら後ろを振り向いた。
さっき言おうとして言えなかった事を、真実を告げる為に。
「俺の名前は、ディーン・イアルフス」
「！　何……？」
「イアルフスだと……！？」
俺が自分の名前を告げただけで、ジンだけじゃなくアルフレッドまで驚きの声を上げる。やっぱりこの名前を知らない人間はこの大陸にはいないらしい。
だからこそ俺は黙っていたんだ。
自分の名前を。
自分の素性を。
俺は今、その全てを自分の意志で明かそうとしている。
「俺は、『英雄』ミレーナ・イアルフスの弟子で『深紅魔法』の使い手だ。だから大丈夫なんだよ。こんな『ゴーレム』の群れ如き、俺一人で破壊し尽くしてやる」
俺はもう一度前を向き、両腕を水平に構えた。

その瞬間、俺の周囲に激しい熱を持った炎の渦が発生し、俺の頭上に集束し始める。『深紅魔法』の中でも大技として高い攻撃力と破壊力を持つ技、『深紅の流星（クリムゾン・レイン）』発動の為の予備動作だ。

集束し切って一つの塊となった炎を頭上に発生させたまま、俺は眼の前の『ゴーレム』たちを見つめて叫ぶ。

「『深紅の流星（クリムゾン・レイン）』！」

戦いの開始を告げるかのような爆音が辺りに響き渡り、無数の紅い炎が流星のように流れていく。

その後を追う形で、俺は地面を強く蹴って駆け出した。

鋼鉄の魔物たちが待つ、戦場へと向かって。

Ｃｒｉｍｓｏｎ　&ａｍｐ；　Ｓｉｌｖｅｒ　－邪魔者－（後書き）

今回の外伝の話は、フレイム・ウォーカー本編の方とリンクした作りにしてみました。
別に大袈裟な繋がりがある訳ではないですが、両方読んでくれてる方はそれなりに楽しめるかと思います（笑）

Ｃｒｉｍｓｏｎ　&ａｍｐ；　Ｓｉｌｖｅｒ　―別れと旅立ち―（前書き）

今回の話で外伝『過去話』は終わりです。
それでは、外伝第十三話スタート！（笑）

Ｃｒｉｍｓｏｎ　&ａｍｐ；　Ｓｉｌｖｅｒ　－別れと旅立ち－

思い切り振り被られた右拳が、俺の左頬に叩き込まれた。殴られた衝撃で俺は後ろに倒れ込み、背中から壁に激突した。全身を軽い衝撃が走り抜ける。

口の中に鉄の味を感じる。どうやら殴られた事で、口の中を切ってしまったらしい。俺は左頬の辺りを右手で軽く拭いながらゆっくりと顔を上げた。

「ふざけんじゃねぇぞ、クソ野郎が……ッ！」

俺の事を殴り付けたのは、少々息を荒げながら、どうにか自分の足で立っているアルフレッドだった。彼は今も、憎しみの籠った瞳で俺を睨み付けている。

「止せアルフレッド。お前も怪我をしてるんだ。暴れたら傷に響く」

「うるせぇ！　その傷を付けたのは誰だと思ってんだ！？　他でもねぇこの大バカ野郎だろうが！」

どうにか制止しようとするジンの腕を振り払って、アルフレッドは力いっぱい俺の方を指差して叫ぶ。

『ケルフィオン』の『ギルド』内。あの後どうにか、俺一人で『ゴーレム』の軍勢を退けた結果、当初の目的である『ゴーレム討伐作戦』は、一応の終結を見た。

だが当然、俺たち作戦参加者の被害は甚大なものだった。

死者すら出なかったものの怪我人が相次ぎ、全滅しなかったのが奇跡のような幕引きだった。

もしあのままアルフレッドたちが戦い続けていたら、そうなっていたとしても可笑しくはない。そんな状況を作り出したのは、他でもない俺自身だ。

「わかってんのか！？　てめぇ一人が勝手な行動を取ったせいで、これだけ大きな被害が出ちまったんだ！　何が『魔術師』だ！　何が『英雄』の弟子だ！　こんな結末になったのは、全部てめぇのせ

いだ！！」
「アルフレッド……！　お前――」
「そうだな。全部あんたの言う通りだ」
ジンが庇おうとしている気配を察知した俺は、彼の言葉を遮るようにしてそう言った。
俺は何事もなかったように立ち上がって、平静を装う。ジンに迷惑を掛ける訳にはいかなかった。
「それにしても、ギルドメンバーってのがこんなに弱い奴らだなんて知らなかったぜ。あの程度の『ゴーレム』を倒す事すら出来ないなんて、拍子抜けもいいとこだ。あの場に俺がいなかったら、ホントに全滅してたかもな」
「なッ、んだとォ……ッ！？」
俺と対峙しているアルフレッドだけじゃなく、周りで傷の手当てをしている他のメンバーの視線が、一気に俺に注がれる。そのどれもが、俺を悪者だと認識している軽蔑の眼差しだった。
「こんな弱い連中と一緒に戦わされたなんて、迷惑としか思えねぇ。こんな事になるんだったら、最初から俺一人でやってればよかったな」
周りから非難の眼差しを浴びながら、俺は『ギルド』の奥にあるカウンターを目指した。その上には今回の作戦の報酬が山分けされて置いてあり、俺はそこから自分の取り分を掴み、強引に荷物の中に押し込んだ。
するとその様子を見ていたアルフレッドが、怒りの表情で怒鳴りつけてくる。
「このクソ野郎がぁ！　てめぇのツラなんざ見たくねぇ！　とっとと失せろ！　二度と『ギルド』に近寄るな！！」
息を荒げるアルフレッドの横を通り抜け、俺は入口の辺りで振り返り様にこう告げた。最後まで、嫌われる役を引き受ける為に。
「言われなくてもそうするよ。あんたらに関わって面倒な事になるのは、俺だって願い下げだ」

◆　◆　◆

それからしばらくして、俺は『ケルフィオン』の駅で列車を待っていた。
ホームに佇んで、俺は一人物思いに耽る。
さっきの『ギルド』での出来事。あれだけの数の人間から軽蔑の眼差しを向けられたのは、多分生まれて初めてだと思う。
だけどそれがどうしたってんだ。別に『ギルド』の人間と確執が出来たからって、俺には特に問題はない。今までずっと一人旅をしてきたんだ。このくらいの事、いちいち気にしてたらキリがないだろ？
それに道筋はどうあれ、旅の資金を調達出来た事に変わりはない。ミレーナの行方を追う為にも、今は手掛かりを探して旅を続けるだけだ。
「さってとぉ、次はどこに行こうか」
わざとらしく独り言を呟いて、次の目的地を決めようとしていた時だった。
「キミ一人が悪者になる事はなかったんじゃないか？」
「！」
俺は思わず驚いて、その声のした方を振り向いた。
するとそこに立っていたのは、銀髪碧眼の少年。どこか爽やかな雰囲気のある二刀流の剣士、ジン・ハートラーだった。彼は真剣な表情で、固まっている俺の方を見ている。

「……な、何しに来たんだよ、あんた」
「キミに言いたい事があってね。見送りのついでに後を付けてきた」
「見送りって……、あんた何言ってんだ？　さっきの一部始終見てなかったのかよ？　俺なんかといるとこあいつらに見られたらあんたまで――」
「キミに礼を言っておきたかったんだ。遺跡でキミが自分の素性を明かしてまで戦ってくれていなかったら、俺たちはどうなっていたかわからない。本当に助かった。ありがとう」
「な……、あ……」
　意外な言葉を掛けられて、俺は言葉を失うしかない。
　どうやら眼の前の少年は、俺の考えに気付いているらしい。俺が口をパクパクさせている間に、畳み掛けるように続ける。
「確かにキミの行動には問題があったが、今回のような結末になったのは、何もキミ一人の責任という訳じゃない。持ち場を離れたのは俺も同じだし、それにキミは、罠に嵌って冷静さを失っていたアルフレッドを止めてくれた。しかも最後には悪役を買って出てくれた。俺の言葉を遮ったのも、本当は俺が巻き込まれないようにする為だったんだろ？　何から何まで、本当にすまなかった」
　そう言ってジンは深々と頭を下げた。礼儀正しさを形にしたら、多分今のこいつみたいになるんだろう。
　俺の方はと言えば、やり辛くてしょうがない。ジンは俺が言わんとしていた事を、全部看破してみせたんだ。何だか丸裸にされたみたいで、酷く居心地が悪い。
　俺は軽く溜め息をついて、ガリガリと頭を掻く。ここまで言われたら、俺も言い返さないと気が済まない。
「変な奴だな、お前」
「そうか？　変に格好付けたがりなキミに言われたくはないけどな」
　頭を上げながらそう言うジン。そのジンと眼が合った所で、俺たちはどちらからともなく笑い出した。変に気兼ねする事なく、自然な感じで。

◆　◆　◆

そしてしばらくしてから、列車が『ケルフィオン』の駅に近付いてくるのが見えた。
その頃にはもう落ち着いていた俺たちは、近付いてくる列車を見ながら、視線を交わさずに会話をする。
「キミはなぜ一人旅をしているんだ？」
「ミレーナ・イアルフスが俺の師匠だってのは話しただろ？　その師匠が、五ヵ月程前に急にいなくなったんだ。で、俺はその行方を追う為に旅をしてるって訳」
「行方不明……？　手掛かりはあるのか？」
「あったら良かったんだけどな……。だからとりあえず今は、ミレーナが行きそうな所を虱潰(しらみつぶ)しに回ってるんだ」
「随分のんびりとした探し方だな……。そんな方法で大丈夫なのか？」
「さぁな。ま、さすがにこの大陸から出てるって事はないだろうし、一人でもやれるだけやってみるさ」
俺は彼女に聞きたい事がある。
それは、俺を置いて行った理由。何も言わずにいなくなった理由。
それを確かめる為には、俺自身の力で探し出さなきゃいけない。
例えどれだけ時間が掛かったとしても。
心の中で再確認していた俺は、不意に視線を感じて向き直る。
隣に立っているジンは微かに笑った表情で、ジッと俺の事を見ていた。
「？　何だよ？」

「……いや。ただ何となく、予感みたいなものがあってな」
「予感……？」
首を傾げる俺を見ながら、ジンはゆっくりと言葉を紡ぐ。
「キミとは……いや、お前とは、不思議とまたどこかで会いそうな気がする」
「！　ハハ、奇遇だな。俺もそんな気がしてた」
互いにそんな事を言い合って、俺たちは快活に笑い合う。
すると、俺たちの会話の終わりを告げるかのように、列車が駅のホームに流れ込んできた。
俺はそこで、ジンの方に向けて軽く右拳を突き出す。俺たちの別れの挨拶は、この方がしっくりくるような気がした。
「じゃあまたな、ジン」
「……！　ああ。また会おう、ディーン」
俺が突き出した右拳に、ジンは自分の右拳を軽く当てる。
この時初めて実感した。
例え一人で旅をしていても、俺はもう、一人じゃないんだって事を。

それが俺とジンの、初めての出会いだった。
この後も俺たちは、『テルノアリス』で再会するまでに二、三回会う事があった。
今はそれぞれ違う道を進んでいる。それでもいつか、俺たちの道は交差する事だろう。
銀髪の剣士、ジン・ハートラー。
俺の数少ない、友達と呼べる存在。

彼とはまた出会う機会が必ず来ると、俺は確信している。

Ｃｒｉｍｓｏｎ　＆ａｍｐ；　Ｓｉｌｖｅｒ　－別れと旅立ち－（後書き）

今回の『過去話』、間にブランクがあり過ぎましたね……（汗）
『紺碧の泉』に着く前に語ってるって設定なのに、『紺碧の泉編』より後に書き終わるってどういう事だ（笑）

さて、次はシャルミナを主人公にした話を書こうかなと思っておりますので、本編の合間にでも読みに来てみてくださいｍ（＿＿）ｍ
それでは！ノシ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１　魔女と呼ばれた少女（前書き）

前言通り、今回は本編の『魔女の森編』に出て来たシャルミナを主人公にしたお話です。
ちなみに今回は三人称。
三人称を書くのは久しぶりなので、可笑しな点があればドンドン指摘してください（笑）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１　魔女と呼ばれた少女

『風守り』の一族――。
その一族は、『ゴルムダル大森林』と言う広大な森林地帯において、『魔術戦争』の時代に造られた遺跡を、何百年もの間人知れず守ってきた存在だ。
そんな一族の唯一の生き残りである少女、シャルミナ・ファルメ。
彼女はつい最近まで外の世界、つまり、森林地帯の外へ出た事がなかった。一族の長たちが、掟を守らせる為に彼女に与えた『呪い』によって、彼女は生まれてからの十数年、ずっと森の中で暮らしてきた。
長い間、ずっと一人で。
だがそんな彼女は、ある時紅い髪の少年によって、その『呪い』から解き放たれた。
真の自由を手にした彼女は、初めて自分の生まれ育った森林地帯を旅立つ決意をする。
ここに語る話は、そんな彼女の奮闘を描いた物語である。

「つーかよぉ。何だってこんな所で足止め喰らわなきゃいけねぇんだ？」
雲一つない晴天の青空を見上げながら、少し癖のある茶髪の青年は、心底気だるそうにそんな事を言った。
すると、その隣にいた天色の髪をポニーテールにした女性が、宥めるような言葉を掛ける。
「仕方ないでしょ？　首都の方で起きた事件のせいで、列車が運行

してないって言うんだから。文句言ってる暇があったら、少しはこれからどうするかって事ぐらい考えなさいよ」
　天色の髪の女性はそう言って、やれやれと言いたげな溜め息をつく。そして、傍らにいる牡丹色の髪をした十代後半の少女に、申し訳なさそうに声を掛ける。
「悪いわね、シャルミナ。せっかくあんたが新しい旅立ちを迎えたってのに、こんな展開になっちゃってさ」
「ううん、気にしてないわ。それにレイミーのせいでもないでしょ。列車が動いてないって言うなら、他の方法を考えればいいんだし」
　牡丹色の髪の少女シャルミナは、そんな風に笑って答える。まだ十代だというのに落ち着きのあるその言動には、大人らしさを感じずにはいられない。
「はぁ～、シャルミナは相変わらず大人だわねぇ。どっかの男にも見習わせたいわ」
「それ俺の事言ってんのか？」
「あら何？　ちゃんと自覚があるんじゃない、ジグラン・グラニードくん」
「レイミー、てめぇ……」
「もう、止めなってば二人とも」
　今にも取っ組み合いの喧嘩を始めそうな二人の間に、シャルミナは躊躇いながらも割って入る。
　ジグラン・グラニード。
　レイミー・リゼルブ。
　そして、シャルミナ・ファルメ。
　この三人は『ゴルムダル大森林』という森林地帯で、とある紅い髪の少年と出会い、とある経緯を経て共に旅をする仲になった三人である。
　彼らの現在の行き先は、ジラータル大陸の首都『テルノアリス』。
　トレジャーハンターを職業としているジグランとレイミーは、首都に住まう一部の王族たちと面識がある。シャルミナが二人に同行

する以前の旅の成果を、その王族たちに報告する為、三人は首都を目指している最中という訳だ。
だがこれも奇妙な偶然だが、シャルミナたちが出会った紅い髪の少年が関わった事件のせいで、彼女らは足止めを喰らっている。
『テルノアリス襲撃事件』――。
後にそう呼ばれるようになった事件において、首都を発着する列車と、停車する為の駅が爆破された事により、現在ジラータル大陸の一部の区間で、列車が正常に運行しなくなっている。
シャルミナたちが今いる街『ファレスタウン』は、丁度その列車が運行していない地域だ。故に彼女らはこうして、どのようにして首都へ向かうかを話し合っているという訳だ。
まぁ話し合うと言うのは言葉だけで、レイミーとジグランに至っては殴り合いになりそうな雰囲気なのだが。
「列車の運行が再開されるのはいつなの？」
二人を宥める意味も込めて、シャルミナはレイミーにそう尋ねる。
するとレイミーは、睨み合っていたジグランから視線を外し、考え込むような仕草でシャルミナを見た。
「さっき駅に行って確認した感じだと、最低でも後一週間は掛かるらしいわ。正直、そんなには待ってられないんだよ」
「何か急がなきゃいけない理由でもあるの？　首都の王族に会うって事は聞いたけど……」
首を傾げて疑問の表情を浮かべるシャルミナに対して、今度はジグランが言葉を返す。
「オレたちにも競争相手ってのがいるんだよ。トレジャーハンターってのはどれだけ新しい発見をしたかによって、与えられる褒章や勲章が変わってくるからな。当然同業者の間じゃあ対抗意識が強くなる。それに早いもん勝ちってのがオレたちのルールだ。だから他の奴らに先を越されないように、出来るだけ早く、首都の王族に調査報告をする必要があるって訳なんだよ」
「へぇ～……、何か色々大変なのね」

納得したように頷くシャルミナに対して、傍らのレイミーが付け足すように言葉を紡ぐ。
「それにシャルミナ。あんたが今まで暮らしてたあの遺跡。ダンテさんや集落の人が代わりに守っていってくれるって言っても、あの集落には『ギルド』すらないでしょ？　だからアタシたちが王族に提案して、軍の詰所を造ってもらえるようにお願いしなきゃいけないんだから。これはその為の旅でもあるんだよ？」
「……そっか。そうよね。あそこから旅立つ事を決めたからって、それで私が『風守り』の一族じゃなくなった訳じゃないのよね」
忘れていた、という訳ではないだろうが、それでもシャルミナは自虐するように苦笑する。
『風守り』の一族――。
広大な森林地帯『ゴルムダル大森林』の奥地で、何百年も前に造られた遺跡を代々守護していた、風の『魔術』を操る一族。少女シャルミナはその唯一の生き残りだ。
一族の長たちが残したとある『呪い』によって、シャルミナは生まれてから今の年齢に至るまで、森林地帯の外へ出る事が出来ない存在だった。
だが紅い髪の少年の活躍により、その呪縛から解かれた彼女は、こうして森を離れ、旅立とうとしている。
（きっと私自身、心のどこかで願っていたんだわ。『風守り』の一族であるという事実を、捨ててしまいたいって……）
自身の暗い感情に触れてしまったような気がして、シャルミナは僅かに俯く。
自由になりたい。
それがいつの頃からか、シャルミナの切なる願いになっていた。
十数年、森の中で一人きりで生きてきた少女。だからこそ、その願いがある日突然叶えられた事で、彼女の中の本心が顔を覗かせているのだろう。
森を出たのだから、もう自分は自由だ。

『風守り』の一族なんて関係ない。
守り続けた遺跡がこの先どうなろうと、自分は知らない。
自分とはすでに何の関わりもない存在だ、と。
（虫が良過ぎるよね、そんなの……）
例えどんなに否定しても、事実が変わる事はない。
森林地帯から旅立ったからと言って、彼女が『風守り』の一族の生き残りである事実は消えないのだ。
「――シャルミナ？　どうしたの、ボーっとして」
あれこれ考えていた事で、シャルミナは自然と黙り込んでしまっていた。レイミーに心配そうな声を掛けられた事で、少女は漸く我に返る。
「う、ううん、何でもない。――それよりこれからどうする？　別に徒歩ででも首都には行けるんでしょ？」
シャルミナは無理矢理話題を変え、何もない風を装う。
レイミーも深くは言及せず、駅の方に視線を向けて言葉を返した。
「う～ん、それはそうなんだけどねぇ……。歩くにしろ列車の運行再開を待つにしろ、時間が掛かるってのが問題なんだよねぇ」
困った顔で頭を掻くレイミーの横で、う～んと唸っていたジグランがパッと顔を上げる。何かを閃いたような表情だ。
「だったらよ、馬を使うってのはどうだ？　徒歩で歩くよりは、確実に早く首都に着けるだろ？」
「確かに名案だけど、でも馬なんてどこで調達する気？」
即座に反論しながら辺りを見回すレイミー。当然のように、近い場所に馬を売っているような店は見当たらない。
するとそんなレイミーの仕草を遮るように、ジグランが右手をひらひらと振る。
「別に買う必要はねぇって。確かこの街って『ギルド』があったよな？　そこで馬を貸してもらえるかどうか、聞いてみればいいんじゃねぇか？」
「って言うか、まずその前に『ギルド』に馬が置いてある可能性の

方が低いと思うんだけど……」
「いいじゃねぇかよぉ、他に手段がねぇんだし。聞くだけ聞いてみようぜ？　なっ？」
「まぁ確かに、何もしないよりはマシかもね」
渋々承諾しながら、レイミーはもう一度キョロキョロと辺りを見回す。そして遠くの方に何かを見つけ、シャルミナに声を掛けてくる。
「アタシとジグランで『ギルド』に行ってくるから、シャルミナはもう少し街の中を見て回っておいでよ。折角森林地帯の外に出たんだ。外の世界の事をもっと知っておきたいだろ？」
「えっ？　でも……」
二人に用事を押し付けるみたいで気が引けるシャルミナは、躊躇いがちに言い淀む。
確かにレイミーの言う通り、外の世界はシャルミナの興味を引くものがたくさんある。もっとジックリ見ておきたいというのが本心だ。
だが一人だけ遊んでいるような気分でいるのは、二人にも申し訳ない気がする。
どうしようかと逡巡しているシャルミナの胸中を気に掛けた様子もなく、レイミーとジグランはすでに歩き出していた。
「多分こっちの用事はすぐ終わるからよ。三十分ぐらいしたら街の入口で合流しようぜ」
「あんまり遠くへ行かない事。それから迷子になるんじゃないよ」
「えっ？　ちょ、ちょっと二人とも……！」
まるで保護者のような台詞を残して、レイミーとジグランはスタスタと歩いて行ってしまう。
一人残されたシャルミナは、しばらく呆然と立ち尽くしていた。
が、考えてみればこれは人生初となる街巡りだ。しかも周りには自分の興味を引くものが山のようにある。こんな夢みたいな状況の中で、ウキウキして来ない訳がなかった。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えてちょっとだけ……」
とか何とか言いながら、心の中ではちょっとで済みそうにない程興奮している。
シャルミナは踵を返し、街の通りを歩き始めた。
周りには、未知の世界が広がっている。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１　魔女と呼ばれた少女（後書き）

今回のお話は多分四話か五話構成ぐらいになるんじゃないかな？
……という気持ちで書いてます。
今後のシャルミナさんの活躍にこうご期待！

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２　無垢な少年

澄み渡る空の下、シャルミナは快調な足取りで、『ファレスタウン』の通りを歩いていた。
道幅が二十メートル程の通りの両側には、商店や酒場といった人が集まりそうな建物が多く乱立している。
（こんな風に街の中を歩ける日が来るなんて思わなかったな……）
森林地帯から出た事のないシャルミナにとって、街の風景というものは非常に新鮮なものだ。
彼女には商店で品物を買ったり、酒場で酒を飲むなどと言った行動そのものの知識はあるが、それを実際に自分の眼で見る事が初めてなのだ。ゆえに、周りの人々の一挙手一投足が気になって仕方ない。
（あっ！　あの男の人、店で野菜を選んでるのかな？　……あれ？　野菜を受け取る代わりに何かを渡してる……？　――ああ、そっか。あれがお金を払うって事なのね）
シャルミナは声に出さず、心の中で街の様子を実況する。
彼女が見ている通り、少し離れた位置にある商店では、中年の男性が商店の主人からキュウリやキャベツを受け取り、代わりに野菜の代金を支払っている。
こんな普通の人間からすればごく当たり前の光景でも、シャルミナにとっては初めて見る光景だった。
（……建物にもそれぞれ大きさや形が違う物があるのね。造りも煉瓦だったり木だったりして……。あ、お店っぽい看板が掛かってないのが、人が住んでる家って事なのかな？）
傍から見ると挙動不審な者に見える程、今のシャルミナは忙しなく周りをキョロキョロと見回している。
自分はまだまだ世界の事を知らない。
世界には、もっと面白いものがたくさんある。

街の通りを歩くだけで、自然とシャルミナはそんな風に考えていた。
「――あれ？」
ウキウキした気分で歩き続けていたシャルミナは、視界の端にあるものを見つけた。
それは短く茶色い髪の少年。歳は四、五歳といった所だろうか。
その少年は通りの隅の方で蹲り、膝を抱えるようにして俯いている。どうやら泣いているらしい。
（……何で誰も声を掛けてあげないんだろう？　あんなに小さい子なのに……）
通りには多くの人が行き交っている。シャルミナより年上の人間も多くいる事だろう。
だが大人たちはその少年に見向きもしない。或いは本当に、その視界に少年を捉えていないのかも知れない。
とにかく誰一人として、少年に声を掛けようとする者はいなかった。
（泣いてる……のかな？）
ゆっくりと少年の方に歩み寄りながら、シャルミナは逡巡していた。
こういう時どうすればいいのだろう？　自分より年下の、況してこんな小さい子に話し掛けるなんて初めての事だ。
怖がられたりしないだろうか？
嫌われたりしないだろうか？
色んな不安が一気にシャルミナの心を駆け巡ったが、それでもやはり、なぜ少年が泣いているのかという事が気になった。
まさに恐る恐るといった感じで、シャルミナは声を掛ける。
「えっと……。ボウヤ、どうしたの……？　何で泣いてるの？」
出来るだけ優しい感じが出るように注意しながら、シャルミナは慎重に言葉を選んだ。
すると俯いていた少年がゆっくりと顔を上げ、茶色い大きな瞳で

シャルミナの事を見つめ返してきた。
やはり泣いていたのだろう。その大きな瞳は紅くなり、少し腫れているように見える。
「ママが……、いなくなちゃったんだ……」
「ママ？　お母さんと一緒だったの？」
「うん……」
少年は寂しそうに呟くと、また顔を俯けてしまう。
シャルミナは困りながらも、辺りの様子を窺ってみた。
周りの人間は相変わらず、我関せずといった様子で通りを歩いている。この少年を探している様子の人間も見当たらない。
それならばと、シャルミナは少年を元気付ける為に明るい声で言った。
「じゃあ私が一緒に探してあげる。一緒にママを探しに行こう？」
「……え？　いいの？」
少年は顔を上げ、眼を丸くしてシャルミナに尋ね返してきた。当然シャルミナは拒否などせず、明るく笑って言う。
「もちろん！　いいに決まってるよ！」

◆　◆　◆

「――そういえばボウヤ。名前は何て言うの？」
少年を連れ立って歩き始めたシャルミナは、少し間を開けて隣を歩く少年に声を掛ける。
シャルミナ自身自覚している事だが、やはり少年の方は少し、シャルミナの事を警戒しているようだ。隣同士で歩く両者の距離が、それをあからさまに表している。

「……リッツ」
「リッツくんかぁ。可愛い名前だね」
シャルミナが笑顔でそう言うと、少年リッツは照れたように少し俯く。
（可愛いなぁ。私にも弟がいたら、こんな感じなのかな？）
自分の隣をテクテク歩く少年を見つめて、シャルミナは不意にそんな事を思う。
すると今度はリッツの方が、シャルミナにおずおずと尋ねてくる。
「……お姉ちゃんは、何て名前なの？」
「私？　私の名前はシャルミナ・ファルメ。――どう？　覚えられる？」
「……う～ん。……お姉ちゃんって呼んだ方が呼び易い」
「フフ、そっか。じゃあそれでいいよ」
何だか思っていたよりも自然と会話出来ている事に、シャルミナは少し安心していた。
リッツの方がどう思っているかはわからないが、とりあえず返事は返してくれる。
あの森から出て、レイミーとジグラン以外で初めに会話したのがこんな小さな少年というのは、何だか変な話だ。
そんな風に思いながら自分でクスッと笑い、シャルミナはリッツの歩幅に合わせて、ゆっくりと歩き続ける。
「――ねぇ、お姉ちゃん」
不意にリッツの方から声を掛けられ、シャルミナは笑顔で振り向く。
「ん？　何？」
「お姉ちゃんって、『魔女』さんなの？」
「！！」
リッツの無邪気とも言える唐突な質問に、シャルミナは思わず立

ち止ってしまう。
一体どういう事だろう？　なぜこの少年の口から、『魔女』という言葉が飛び出したのか？
少し動揺したものの、シャルミナは何とか顔には出さず、その場に屈んでリッツと目線を同じにする。
「どういう事かな？　何でそんな風に思ったの？」
「……ママが言ってたんだ。この街の近くの森には、ピンク色の髪をした『魔女』さんが住んでるって。その『魔女』さんに悪い事されるから、森には近付いちゃダメなんだって」
「……そっか」
何も知らないリッツの言葉に、シャルミナは返す言葉が見つからない。
確かにリッツの言う通り、彼女が『魔女』と呼ばれていた存在である事は間違いない。
しかしそれは、複雑かつ様々な事情が絡んで引き起こされた結果に過ぎない。正しいと言えば正しいし、間違っていると言えば間違っている。
だがそれをリッツに、こんな子供に話して聞かせても、到底理解など出来るはずもないだろう。
それに例え相手が大人だったとしても、シャルミナの言葉を受け入れてくれる人間はいないはずだ。
彼女の事実を、真実を知っているのは、ごく少数の人間だけなのだから。
「……う～ん、そうだねぇ。リッツくんはどう思う？　リッツくんから見て、私はその悪い『魔女』さんに見えるかな？」
質問された事をはぐらかしている事は、彼女自身もわかっていた。それでもシャルミナには、事実を打ち明ける事が出来なかった。
認めてしまえば、この少年が恐れ怯える事は明白だろう。そうなってしまう事への恐怖が、シャルミナの口を噤んでしまう。
事実を知らず、また告げられなかった少年リッツは、少し照れ臭

そうに笑って言う。
「……ううん、見えない。優しいお姉ちゃんだよ」
「……そっか。ありがと、リッツくん」
少年に嘘をついているような気分に苛まれながらも、シャルミナは笑って、リッツの頭を優しく撫でた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２　無垢な少年（後書き）

書いていて思った事なんですが、シャルミナさんの性格が若干変わってしまっている気がします（笑）
そこは作者である自分自身が把握してなきゃいけない事なんですけどねぇ……。
う～ん、やっぱりキャラ性を出すってのは難しい事なんだなぁ……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３　悲しき存在

母親と逸れてしまったと言う幼い少年リッツを連れ、シャルミナは街の中を彷徨い歩いていた。
先程『魔女』に関する事を話してから、リッツはシャルミナの事を警戒しなくなったようだ。隣同士並んで歩く二人の間に距離はほとんどなく、リッツは小さな左手でシャルミナの右手を握っている。傍から見れば、まるで本当の姉弟のようだ。
（……本当の事を言ってないのが、少し心苦しいけど）
未だに母親を見つけられない為か、不安そうな顔をしているリッツを見つめ、シャルミナは内心でそんな事を思う。
ただそれでも、この小さな少年の力になってあげたい。そう思うのも事実だった。
リッツの話だと、母親と逸れてからだいぶ時間が経っているらしい。
今頃母親の方も、この少年の事を心配して街の中を探し歩いている頃だろう。早くリッツと母親を引き合わせてあげたいと、シャルミナは強く感じていた。
何かを話していた方がリッツも安心するかと思い、シャルミナはあれこれ考えながら口を開く。
「ねぇ、リッツくんのお母さんってどんな人なの？」
「え……？　う～ん……、すっごく優しいママだよ。この前、ボクがお花で作った輪っかをあげたら、とっても喜んで頭を撫でてくれたんだ」
「お花で作った輪っか？」
髪飾りのような物だろうか？　と、シャルミナは想像してみる。
昔自分も、鮮やかな色合いの綺麗な花で髪飾りを作り、母親に渡していた事があった。

その母親も数年前に疫病で死んでしまったが、確かにシャルミナの母親も、リッツの母親と同じようにとても喜んでくれた記憶がある。
「リッツくんはそういうの上手に作れるの？」
「うん、作れるよ。お姉ちゃんもほしい？」
「そうだなぁ、リッツくんが作ってくれるなら私も嬉しいなぁ」
「ホント？　じゃあ作ってあげる！」
「ありがとう。でも、まずはリッツくんのママを探さないとね。きっとママも、リッツくんの事心配してるよ？」
「うん！」
リッツの顔から漸く子供らしい笑顔が零れた事で、シャルミナは一先ず安心した。この笑顔が陰る前に、早く母親を見つけてあげなければならない。
小さな少年の手を引きながら歩いていたシャルミナが、前方に酒場が見える位置に差し掛かった時だった。
「――あ！　ママだ！」
突然リッツがそんな風に明るい声を上げて、シャルミナから手を離して一目散に走り出した。
シャルミナがその方向に眼を向けると、リッツが走っていく道の直線上に、二十代後半ぐらいの歳の女性が立っているのが見えた。
キョロキョロと辺りを見回していた女性はリッツの姿を捉えたらしく、心配そうな顔でこちらに駆けてくる。
（これで一応解決、かな）
そんな風に思い、シャルミナが笑みを零した時だった。
丁度酒場から出て来た、いかにもガラの悪そうな男の集団の一人に、母親の許へと走っていたリッツがぶつかってしまった。
ぶつかった拍子に、リッツは尻餅をついてしまう。するとそのリッツを蔑むように見下ろして、ぶつかられた男が叫んだ。

「痛(いって)ぇなこのクソガキ！　どこに眼ェ付けてんだ！？」
「おいおい、急にぶつかってくるなんて酷いじゃねぇか。仲間が怪我したらどうすんだ？」
ぶつかられた男の仲間が、尻餅をついたリッツと同じ目線になるように、屈んでそんな事を言う。
最早雰囲気や言葉遣いでわかる。完全に因縁をつけるつもりだ。
するとその場に駆けて来たリッツの母親が、間に割って入るように我が子を抱き抱えた。そして自分たちを囲む五人の男たちに向けて、申し訳なさそうに頭を下げる。
「すみません、この子が余所見をしていたもので……。お怪我はありませんか？」
「ああん？　てめぇこのガキの母親か？　母親ならちゃんと面倒見とけオラァ！」
声を荒げながら、ぶつかられた男が屈んでいるリッツの母親の右肩の辺りを思い切り蹴り飛ばした。
ほとんど問答無用の一方的な暴力だった。
その光景を目の当たりにした瞬間、シャルミナはその場から瞬時に走り出していた。
「もう少し教育しといた方がいいかもなぁ」
そう言って拳を握り、リッツの母親に殴り掛かろうとした男の手を、シャルミナは自らの右掌に風を生み出し、その勢いを殺す事で受け止めた。
風を生み出す『魔術』を操る彼女にこそ、出来る芸当だ。
「ああ？　何だてめぇは？」
イラついた口調と顔で睨み付けてくる男の右腕を、シャルミナは軽く捻り上げ、関節が曲がりにくい方向へと無理矢理捻じ曲げた。
「あいでででででぇぇぇっ！！」
つい先程までの威勢はどこかへ消え、男は痛みに悶えながら悲痛な叫び声を上げる。
「なっ、何しやがんだこの女(あま)ァ……ッ！？」

「それはこっちの台詞よ。何、今の？　ごめんなさいって謝ってるのに、問答無用で蹴り飛ばすってどういう事よ？　私気に喰わないのよねぇ、あんたたちみたいな虚勢しか張れない連中って」
「あんだとぉ……ッ！？」
　他の男たちが飛び掛かって来そうな気配を素早く察知して、シャルミナは風の力を利用して腕を捻り上げていた男を軽く吹き飛ばした。
『魔術』に詳しくない人間が見れば、今のシャルミナはとんでもない力の持ち主に見える事だろう。
　だが実際は、彼女が操る『烈風魔法』によって生み出した風の力で、瞬間的に爆発的な力を生み出しているだけなのだ。
　それは先程のような相手の攻撃を受け止める為であったり、今のように体重差のある相手を軽く投げ飛ばす事にも利用出来る。
　その為シャルミナは、華奢な体格でありながら格闘家のような戦い方が出来る。一見腕っ節の殴り合いには不向きな体格と思われがちだが、彼女は風の『魔術』でその一面をカバーしている訳だ。
「クソがぁ！　畳み掛けてやる！」
　男たちはシャルミナを囲むように立ち塞がると、腰に下げていたロングソードや懐に納めていたナイフを手に取った。男たちの眼は獲物を狙う狩人のように鋭くギラ付いている。
「リッツくん。お母さんと一緒に離れてて！」
　シャルミナは殆ど怒鳴るように背後のリッツに告げる。
　リッツと彼の母親の呆然とした表情を見る事なく、シャルミナは男たちと対峙する。
　相手側の数は五人。形勢的には不利な状況だが、『魔術師』であるシャルミナにとっては問題なく戦えるレベルだ。『魔術師』と普通の人間とではそれ程までに力量の差がある。
「オラァッ！！」
　猛るような勢いで、男たちは一斉にシャルミナに襲い掛かった。
　その瞬間、シャルミナは『魔術』を発動する。

「『旋風（サークル・ウィンド）』！」
両腕を水平に払うと同時に、シャルミナの周囲に激しい風が巻き起こり、竜巻となって男たちの身体を軽々と吹き飛ばした。
「どわあああああぁぁぁっ！？」
四方八方に飛ばされ地面に叩き付けられた男たちは、身体にまともな衝撃を受け、痛みに悶える。
するとリーダー格らしき男が、どうにか身体を起こしながら叫んだ。
「て、めぇ……！　まさかその力、『魔術』か！？」
「……だったら何？　もしかして『魔術師』に遭うのは初めてなのかしら？」
「牡丹色の長い髪に、風を操る『魔術』……。間違いねぇ！　こいつ『ゴルムダル大森林』の『魔女』だ！！」
シャルミナが冷たく言い返した傍から、別の男がシャルミナの容姿を見てそんな風に叫んだ。
するとその瞬間。一連の騒ぎを遠巻きに見ていた野次馬たちからも、驚いたような声が出始める。
「『魔女』だって……！？」
「『魔女』って……、だいぶ前から噂になってる『あの』！？」
「森に入った旅人を襲ってたって奴だろ！？」
「噂は本当だったのね……」
遠巻きにシャルミナの姿を見つめる野次馬たちは、口々にそんな事を呟く。
それをシャルミナは複雑な思いで聞いていたが、言い返す事など出来なかった。
全くの出鱈目という訳ではない。結果として、シャルミナが森から人を遠ざける為に襲い掛かるような真似をしていたのは事実だ。
だがそれが全てではない。
今ここにいる周りの人間が知らない事実が、確かに存在しているのだ。

ただ、それをシャルミナ自身が口にしたとしても、ここにいる誰一人としてその言葉を信じる者はいないだろう。
そう、誰一人――。
「お姉ちゃんが……、『魔女』さん……？」
「！」
背後から聴こえたその言葉に、シャルミナは思わず振り向いてしまう。
胸が張り裂けそうだった。
母親に大事そうに抱えられながら、自分を見つめるリッツの瞳は揺らいでいた。明らかに、少年の瞳には動揺の色が浮かんでいた。
「……ごめんね、リッツくん」
悲痛な思いを抱え、少女は切なく笑ってそう呟く。
結果的にとはいえ、少年に対して嘘をついてしまった事を、シャルミナは激しく後悔した。
こんな形で明かしたくなど無かった。
出来ればちゃんと、自分の口から伝えたかった事だったのに。
（……結局、自分の存在は変えられない物なのかもね）
諦めに似た思いを胸の内に抱え、シャルミナは再び前を向く。その表情には、少年に見せた切ない笑顔は無くなっていた。
今はただ前を見る。
少しでも早く、この状況を収拾する為に。
「恐れが無いなら掛かって来なさい。あんたたちの言う通り、『魔女』が相手になってあげるわ！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３　悲しき存在（後書き）

シャルミナさんのお話もこれで三話目。
このまま順調にうｐ出来ると良いんですが……（笑）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　４　幕引き（前書き）

外伝１７話、漸く掲載です！
本編の合間にでも楽しんで頂ければ幸いだなぁ～、という気持ちで書いておりますので、今後ともよろしくです！

Episode 4 幕引き

「おい、ホントか今の話！？」
「あ、ああ。もう直、西の遠征から首都に帰る『ギルド』の一団がこの街を通る。その一団は騎馬隊だからな。旅人三人ぐらいなら、頼めば首都まで運んでくれると思うぞ？」
『ファレスタウン』の『ギルド』内。カウンターの向こう側から返ってきたその言葉に、ジグランは子供のように飛び跳ねて喜びを表現する。
「マジかよ！　いやぁ～ツイてるなぁオレたち！　なっ、レイ――」
そう言い掛けながらジグランが隣を見ると、さっきまでそこにいたはずのレイミーの姿が無い。
不思議に思い周りを見回すと、レイミーはカウンターから少し離れた位置に立って、窓の外の様子を窺っていた。
「レイミー？　どうかしたのか？」
レイミーの隣に歩み寄りながらジグランが尋ねると、彼女は視線を窓の外に向けたまま口を開く。
「外の様子。何だか騒がしいと思わない？」
「あん？　――あ～、そういや少し妙だな……」
レイミーに倣うように、ジグランも窓の外の様子を窺って怪訝な声を上げる。
「何だかんだでこの街も結構人が多そうだからな。誰かが諍い起こして、道の真ん中で喧嘩でもしてんじゃねぇのか？」
窓から顔を離しながら、冗談っぽく笑ってジグランがそう言うと、レイミーは無言のまま真剣な表情を向けて来た。
それを見て思わず笑みを消したジグランは、彼女が何を言わんとしているのかを瞬時に察する。
「おい、まさか……」

「そのまさかだったら？」
暫しの沈黙と硬直。
そして次の瞬間。恐らく同じ結論に辿り着いたであろう二人は、ほとんど同時に『ギルド』を飛び出していた。
なぜなら二人の脳裏には、とある少女の姿が過ぎっていたのだから。

◆　◆　◆

『魔術師』シャルミナとチンピラ五人の戦いは、戦いと呼べるかどうかも疑わしい程、圧倒的で一方的な展開を見せていた。
つまりは、シャルミナの圧勝。
ナイフやロングソードを振り回すチンピラ五人に対し、シャルミナは『烈風魔法』を応用した投げ技で応じ、男たちの身体を軽々と投げ飛ばしていく。
「クソがぁ！」
ロングソードを握った男が、シャルミナの身体を両断しようと真横に剣を振るう。
だがシャルミナは軽い動作でその場に屈み、回避と同時にがら空きになった男の腹に、風の力を加えた右掌底を叩き込む。
「がはぁっ！」
くの字に折れ曲がった男の身体は、まるで何かに吸い寄せられているかのように、酒場の近くにあった廃材置き場に背中から突っ込んだ。
轟音を上げながら整頓されていた廃材が崩れ、男の姿が見えなくなる。

「まだ続けるつもり？　あんたたちみたいな『普通の』人間じゃあ、どう足掻いても私には勝てないわよ」
未だ自分を囲む四人の男たちに向けて、シャルミナは冷たく言い放つ。
男たちの方は、シャルミナの投げ技や打撃を何度も受けながらも、しつこく喰らい付こうとしてくる。
「舐めやがって……！　『魔術師』のくせに殺傷技を使わねぇなんてよぉ！　余裕のつもりか、この『魔女』がぁ！」
確かにその言葉通り、シャルミナは一度として、投げ技や打撃以外の殺傷能力のある『魔法』を使っていない。
彼女の行使する『烈風魔法』の場合、『斬風（ブレイド・ウィンド）』などがそれに該当する。
だがシャルミナは使わない。その気になれば一撃で男たちの身体を斬り裂く事が出来るにも拘らず、彼女は使おうとしない。
完全に、手加減していた。
彼女はこの場で、人を傷付ける『魔法』を使う事を躊躇っていた。
なぜならここには、あの少年がいるからだ。
あの少年、リッツの見ている前で誰かを傷付ける事を、シャルミナは意識して恐れている。
自分の存在が『魔女』だとバレている今、何も気にする事などないはずだ。無闇に人を傷付けたとしても、ここにいる者たちは、この女は『魔女』なのだから当然だ、と思うはずだ。その一言で済んでしまうだろう。
だがそれでも、シャルミナは非情になり切れない。
意識して人を傷付ければその瞬間、自分は『本当の魔女』になってしまう。その思いが働いて、シャルミナの身体を躊躇わせていた。
（確かに私は『魔女』と呼ばれてる。この街の人たちが私の事を恐れてるって事も、充分わかってる。でも、だからって私には――）
「ボサッとしてんなよ『魔女』がぁ！」
「！」

完全に不意を突かれ、シャルミナは無防備だった。ナイフを持った男二人が、同時に彼女の身体を貫こうと突進してくる。
回避どころか、防御も間に合わない。そう感じた瞬間だった。
「「何してんだこのチンピラがーーーーッ！！」」
突然シャルミナの視界に新たな二つの影が飛び込み、男二人を一撃で卒倒させた。
驚くシャルミナの眼に映ったのは、息を荒げる男女のペア。
片方の女性は薙刀を構え、もう片方の男性は、両手に籠手を装備している。
シャルミナがよく見知っている二人、レイミー・リゼルブとジグラン・グラニードだった。
「二人とも、どうしてここに……」
呆気に取られたように眼を瞬かせるシャルミナに、問われた二人は息を整えもせずに答える。
「どうしても何も、あんたが、ここで暴れてると、思ったから、すっ飛んで来たのよ……」
「ったく、感謝、しろよな……。お前の事だから、一人で、何とかしようと、してるんじゃねぇかと、思って、ここまで、走って来たんだぜ……」
「レイミー。ジグラン……」
弱々しく呟いたシャルミナの肩を両側から軽くポンと叩き、レイミーとジグランは一歩前に進み出る。そして一度息を整えると、残っているチンピラ二人に強い口調で言い放つ。
「事情はさっぱり呑み込めないけど、ウチの連れに手を出そうってんなら相手になるよ」
「オラ、さっさと掛かって来い。このジグラン・グラニード様が、喧嘩のやり方ってモンを教えてやるぜ」
シャルミナを庇うように闘争心を剥き出しにする二人に、チンピラの二人は僅かにたじろぐ。
すると、その時だった。

「お前たち！　そこで何をしている？　何の騒ぎだこれは？」
シャルミナが声のした方を見ると、剣や斧を携えた四、五人の男女が、険しい顔でこっちを見ていた。風貌から、恐らく『ギルド』の人間だろう。
「やべぇ！　逃げるぞ！」
残っていたチンピラの片割れ、リーダー格らしき男もそれに気付いたらしく、気絶している仲間を見捨てて一目散に逃げ出した。
「おい、待て！」
リーダ格の男に続いて逃げ出したチンピラの後を追って、『ギルド』の人間二人が一斉に走り出す。そして残った者たちは、気絶しているチンピラたちを次々と拘束し始めた。
「何だよ。つまんねぇ幕引きだな」
事態が終息した事を悟ったのか、ジグランは不満そうな声を上げた。傍らのレイミーも、可変式の薙刀を三つに折り、腰のホルダーへと仕舞う。
するとレイミーは、心配そうな顔でシャルミナに声を掛けて来る。
「シャルミナ、大丈夫？　あんたの事だから、一人で無茶してたんじゃない？」
「ううん、私は平気。ありがとね、レイミー」
軽く首を横に振ってそう言った後、シャルミナは少し離れた位置にいるリッツに眼を向けた。
今も母親に大事そうに抱かれ、リッツは眼に涙を溜めながらも、嬉しそうに笑っている。
（よかった……。これで、いいんだよね……）
心の中でそう呟き、シャルミナは切なそうに笑って眼を伏せる。
リッツに自分の正体がバレてしまった事は確かに悲しいが、それでもどうにか、親子を巡り合わせる事は出来た。
これでいい。あの少年が笑っていてくれるなら、それで……。
「ちょっといいか？」
物思いに耽っていたシャルミナの耳に、厳しい声が響いてくる。

振り向くと、さっき現れたギルドメンバーの内の一人。斧を携えた体格のいい男が、シャルミナ、レイミー、ジグランを探るような眼付きで見つめていた。
「こいつらの事で聞きたい事がある。悪いが『ギルド』まで同行してもらえないか？」
そこまで口にした後、男は「それに……」と言ってシャルミナの方を見た。
「キミはこいつらに『魔女』と呼ばれていたそうだが、本当か？」
仲間が拘束しているチンピラを一瞥し、男はシャルミナにそう問い掛ける。すると傍らのレイミーとジグランが男の意図を察し、割り込むように口を開く。
「ちょっと待てよ。まさかてめぇ、シャルミナの事を――」
「ああ、その通り。キミが『ゴルムダル大森林』で噂になっている『魔女』なのか、と聞いてるんだ」
「随分一方的じゃないか。こっちにだってちゃんとした事情があるんだ。それを無視して問い詰めるような真似、この子にしないでくれる？」
「何もそんなつもりはないさ。話ならちゃんと『ギルド』で聞かせてもらう。――じゃあ、行こうか」
男に促され、レイミーとジグランは渋々従った。
シャルミナも抵抗する意志など無く、素直にそれに従う。彼女には、好奇な眼に晒されているこの状況から、早く抜け出したいという気持ちもあった。
『ギルド』の人間に付いて歩き始める直前、不意にシャルミナは肩越しにチラリと振り返る。
視線の先には、母親に抱かれたリッツがいる。彼はその大きな瞳で、真っ直ぐにシャルミナの事を見ていた。
だがシャルミナは、何も声を掛けなかった。掛ける事など出来なかった。
「……ごめんね、リッツくん」

小声でそう呟き、シャルミナは視線を戻して歩き始める。
無垢な少年の視線を、背中に感じながら。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　４　幕引き（後書き）

この次の話で、シャルミナさんのお話は終わりとなります。

少し気が早いですが、次はどんな外伝を書こうか悩んでます。

このキャラの話書いてくれ！……っていうのがありましたら、メッセージや感想に書いてもらえると有り難いです。

それでは！ノシ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　５　少女が夢見た世界（前書き）

大変遅くなりました。
これにてシャルミナさんのお話、終幕となります。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　５　少女が夢見た世界

「――全く、散々な眼に遭ったわ」
少々窶(やつ)れた表情で、レイミーは『ギルド』の建物から出た。
取り調べの為に、結局二時間も室内に閉じ込められていたのだ。
何だか久しぶりに吸ったように感じる外の空気が、否応なく開放感を与えてくれる。
「勘弁してほしいわよねぇ……。同じような質問何度も何度も繰り返してきてさぁ」
「確かにな。あ～、何か肩凝ってる気がするぜ」
だるそうな声を出すレイミーの隣で、ジグランも肩を回しながら疲れた声で言う。
その二人の背後。少し間を開けて歩くシャルミナは、前を歩く二人とは違った意味で俯いていた。
「ごめんね、二人とも。私のせいで余計な事に巻き込んで……」
かなり萎(しお)れた声でシャルミナが呟くと、レイミーとジグランは慌てた様子で振り返る。
「あ、いや、別にシャルミナのせいにしてる訳じゃないのよ？　ねぇジグラン」
「お、おうよ！　何も気にする必要ねぇって。首都に向かう『ギルド』の遠征隊が来たら、さっさとこの街から出て行こうぜ」
『この街から出る』
その言葉を耳にしたシャルミナの胸に、ズキッとした痛みのようなものが訪れる。
その原因は言うまでもない。
彼女は後悔し、そして考えてしまうのだ。
本当にこのままでいいのか、と。
あの少年、リッツに謝りたい。謝らなければならない。

自分の正体を隠していた事を。自分が『魔女』と呼ばれている存在だという事を。ちゃんと自分の口から、説明しなければならない。

（……いいえ。今更そんな事しても、きっと意味なんてないよね）

自問自答を繰り返してみるものの、結局行き着く答えはそれだった。

今自分が少年の前に現れたとしても、あの少年は、きっと笑顔を見せてはくれない。あの現場にいた野次馬たちと同じく、畏怖の対象としてシャルミナの事を見るだろう。

そんな事になるのだけは耐えられない。

そんな事になるぐらいなら、いっそ何も言わずに消えた方がいい。その方が、辛さとしては充分マシだ。

「――シャルミナ。何かあったんじゃないの？」

暗い気分に支配され、僅かに俯いていたシャルミナは、全てを見透かしたようなレイミーの言葉で顔を上げる。

シャルミナを見つめるレイミーの表情は、真剣なものだった。その傍らにいるジグランも、何かを察しているらしい。飄々としている普段の様子とは違って、レイミー同様真剣な顔付きだ。

「一人で抱えんなよシャルミナ。オレたちはもう、赤の他人じゃない。一緒に旅をする仲間なんだぜ？」

「……」

そんな二人を前にして、シャルミナは思わず言葉を失う。

素直に嬉しかった。

眼の前の二人は、自分の事を本当に心配してくれている。仲間だと思ってくれている。そう素直に感じる事が出来た。

だからこそシャルミナは打ち明ける。二人が駆け付ける前に、一体何があったのかを。

シャルミナが言葉を紡ぐ間、レイミーとジグランは黙って彼女の言葉を聞いていた。口を挟まず、茶々を入れず、ただジッと、シャルミナの言葉を聞き続けてくれた。

「――そう。あの時あそこにいた男の子と、そんな事になってたの

ね」
「チッ。何も知らねぇ奴らが好き勝手ほざきやがって……！　オレがその場にいれば、一人残らずブン殴ってやったってのに」
酷くイラついたように顔を顰め、ジグランは両拳を乱暴に打ち付け合う。
それを横目に見ながら、レイミーは呆れたようにジグランを窘める。
「止めなさいって。今更そんな事言ってもどうにもなんないでしょ？」
「だけどよぉ……！」
「もういいんだよ二人とも。そう言ってくれるだけで、私は充分嬉しいから」
また言い合いをし始めそうな二人の間に割って入りながら、シャルミナは苦笑してみせる。
「結局同じなのよ。何をどうしたって、私が『魔女』と呼ばれてる事に変わりはない。人から恐れられる存在だって事は、変えようがない事なんだよ、きっと……」
自分自身を貶(おとし)めるような言葉を吐く事で、シャルミナは諦めようとしていた。
リッツへの思いを。少年と接した、あの優しい時間を。
もう二度と戻れないと言うのなら、未練がましく持っているこの思いの全てを、跡形も無く消し去ってしまおう。そうすれば、今より少しは楽になれる。
そうシャルミナは思っていた。
だが――。
「それはちょっと違うんじゃない？」
「！」
そんなシャルミナの考えを打ち破ったのは、レイミーのその一言だった。
「レイミー……？」

思わず問い返してしまったシャルミナは、不思議な気持ちでレイミーを見つめた。
彼女は一体、自分に何を言おうとしているんだろう？
「確かにあんたは『魔女』と呼ばれてる。実際、アタシたち二人だってそう呼んでた訳だし、ここらの地域に根付いた噂や伝説は、そう簡単に取り除けるものじゃないんだろうね」
レイミーはまるで自分を皮肉っているみたいに、苦笑しながらそう告げる。
だが次の瞬間には笑みを消し、真剣な表情でシャルミナを見つめ、ゆっくりと口を開いた。
「でもさ。どんなに根が深いとはいえ、それはたったそれだけの事だろ？　確かに難しい問題だろうけど、絶対に変わらないなんて証拠がどこにある？　なのにあんたは、たった一度の挫折で全てを諦めるの？　諦める事が出来るの？　本当に諦めたいの？」
「それは……」
的確に痛い所を突かれ、シャルミナは言い淀む。
結果として、それが他ならぬ答えになっていた。
本音を言えば当然、諦められるはずがない。諦めたくないに決まっている。
僅かに俯き、唇を噛み締めるシャルミナに、レイミーは追い討ちを掛けるように続ける。
「思い出してごらんよシャルミナ。『ゴルムダル大森林』でアタシたちが会った『アイツ』は、そんな簡単に諦めてたかい？　どんなに困難な状況でも、最後の最後まで戦い抜いてたはずだろ？」
「……」
レイミーに言われ、シャルミナは思い出す。あの森で出会った、紅い髪の少年の事を。
彼女の言う通り、あの少年は決して諦めようとはしなかった。最後の最後まで、自分の存在を利用した『魔術師』を追い詰める為に、決死の覚悟で戦っていた。

それに比べて今の自分は……？
「『アイツ』を見習えとまでは言わないさ。アタシだって、そんな大層な事言える立場じゃないしね。――でもさ。あんたを自由の身にしてくれたのは、他でもない『アイツ』自身だろ？　だったら、その『アイツ』に恩を返す為にも、諦めず立ち向かう事も必要なんじゃない？」
「まぁ、ちょっとお節介が過ぎる気もするけどな、あの紅髪（あかがみ）――ぐはぁっ！」
余計な横槍を入れたジグランの鳩尾（みぞおち）に、レイミーが鋭い肘鉄を喰らわせる。
微かに震えながら悶絶しているジグランを尻目に、レイミーはシャルミナの方を軽く叩いた。
「それにね、シャルミナ。この世界ってヤツは、多分あんたが思ってる程酷いものじゃないみたいよ」
「え？」
レイミーの言葉の真意がわからず、シャルミナは僅かに首を傾げる。
と、その時だった。
「お姉ちゃ～ん！」
「……！」
通りの向こうから聴こえてくる、幼い子供の声。
その声はシャルミナ自身、もう二度と聴く事など出来ないだろうと思っていた声だった。
そう。それは間違いなく、シャルミナが望んでいた声。
明るい笑顔と共にこちらへと駆けてくる、少年リッツの声だった。
「そんな……。どうして……？」
本当は嬉しいはずなのに。
本来は喜ぶべき事のはずなのに。
真っ先にシャルミナの口から出たのは、疑問の言葉だった。
驚きのあまり硬直しているシャルミナの腰の辺りに、駆けてきた

リッツが勢い良く抱き付く。
「さっきは助けてくれてありがとう！　お姉ちゃん、とってもカッコ良かったよ！」
「え……？」
「ママが言ってたんだ。助けてもらったんだから、ちゃんとお礼しなきゃいけないって」
一旦リッツから眼を離し、シャルミナが通りの方を見ると、確かにリッツの母親が立っているのが見えた。
気不味いのか、リッツの母親は近付いて来ようとはしない。だがシャルミナたちと眼が合うと、母親は申し訳なさそうに深々と頭を下げた。
なぜそんな申し訳なさそうな顔をするんだろう？
なぜこの少年は、何の恐れも無く自分に抱き付く事が出来るんだろう？
何もかも不思議としか思えないシャルミナは、ゆっくりとリッツに視線を合わせ、そして問い掛ける。
「リッツくん……、私が怖くないの？　恐ろしくないの？　私は悪い『魔女』なんだよ？」
シャルミナが恐る恐るそう口にすると、リッツは「怖くなんかないよ！」と断言し、何の迷いも無い瞳で続けた。
「だってボクとママを助けてくれたお姉ちゃんが、悪い『魔女』さんな訳ないもん！」
リッツはシャルミナをジッと見つめる。
迷いの無い、揺らぎの無い瞳で。
そんな少年の瞳を見つめ返し、シャルミナはただ黙り込む事しか出来なかった。言葉を失っていた。
「あ、そうだ。――これ、お姉ちゃんにあげる！」
リッツは唐突に何かを思い出し、自分のズボンの小さなポケット

をゴソゴソと探ってから、両手をシャルミナの方へ差し出してきた。
その小さな両手に収まっていたのは、花の茎で作られた、小さな輪っか。
「もしかして、花飾り……？」
小さな花の輪っかを受け取りながら尋ねると、リッツは笑って頷く。
「約束したでしょ？　お姉ちゃんにも作ってあげるって」
「リッツ、くん……」
少年の優しさに、何よりも無垢で純粋な優しさに、シャルミナは声を詰まらせる。
泣いてしまいそうだった。いや、実際シャルミナの眼には、涙が溜まっていた。
それでもシャルミナは、涙を零す事はしない。
眼の前の小さな少年を、不安な気持ちにさせる訳にはいかなかったからだ。
「ありがとう。本当に本当に、ありがとう……」
微かに震える声で、それでもシャルミナは笑顔で礼を言った。小さな少年の身体を、ゆっくりと優しく抱き締めながら、心から幸せそうに。

少女はずっと、外の世界に憧れを抱いていた。自由になりたいと、ずっと夢見ていた。
だが現実の世界は必ずしも、常に優しさに溢れている訳ではない。
辛い事もあれば、悲しい事もある。それは紛れもない事実だ。
ただ、それでも。
『魔女』と呼ばれた少女はもう、一人ではない。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　５　少女が夢見た世界（後書き）

シャルミナさんのお話、いかがだったでしょう？
少し無理矢理な終わらせ方かも知れませんが、作者的にはこういう終わらせ方もありかなと思っております。
ただ、少しジグランが空気になり過ぎてたような気がするんですが……ｗ

さぁ、次はどんな外伝を書こうか……、って前にも書いたなこの台詞ｗ
とりあえず、次の更新を待って頂けると幸いです（＿＿）

チョコと少女と少年と　前編（前書き）

今回はバレンタイン特別編と題しまして、本編とは全く繋がりの無い、とある日常の風景を描いてみました。
少しでものほほんとして頂ければ幸いですw

チョコと少女と少年と　前編

「はい、これ。ディーンにあげる」
それは、そんな一言から始まった。
ジラータル大陸最大の街にして、首都である『テルノアリス』。
その街並みの中に存在する、一軒の宿屋。
部屋の一室でベッドに横になっていたディーンは、突然部屋を訪れたリネにそう告げられた。
これは、とある日に起きた出来事。
少年少女たちの、穏やかな日常の物語。

少し照れ臭そうに笑って、リネは紅いリボンで綺麗に包まれた四角い箱を、両手で持って差し出している。
「……何だこれ？」
差し出された本人であるディーンは、上半身を起こし、箱とリネの顔を交互に見ながら、不思議そうな顔をした。
するとリネは照れ臭そうな表情のまま、ディーンに説明し始める。
「チョコレートだよ。ディーンに食べてもらいたいなぁ～と思って、昨日の夜に作ったの」
「チョコレート？　作ったって……、お前が？」
「うん。だから受け取ってほしいんだけど……、ダメ？」
そう言ってリネは、少し躊躇いがちに尋ねてくる。
ディーンは箱をまじまじと見つめた後、若干眉根を寄せて顔を上げた。
「ダメって訳じゃねぇけど、誕生日でもないのに何で俺に渡すんだ？」
「えっ！？　そ、それは、その……。あ、そうそう。何かディーン

疲れてるみたいに見えたから、甘い物でもどうかなぁ～と思って」
「……別に疲れてねぇけど？　って言うか、甘い物なら何もチョコレートじゃなくてもいいだろ」
会話を重ねていく毎に、徐々にリネの表情が曇り始める。が、ディーンはその事に全く気付いていない。
「な、何だっていいでしょ？　あげるって言ってるんだから、素直に受け取ってよ」
少しムッとした表情でリネは言うが、ディーンは相変わらず受け取ろうとしない。むしろ、どうしてここまでリネが頑なになるのかがわからずにいた。
「何ムキになってんだ、お前？　チョコレートくらいの事でギャーギャー喚くなよな」
その一言が決定打だった。
リネは差し出していた手を下ろし、僅かに俯く。
「……もういい」
「あ？」
「もういい！　知らない！　ディーンのバカ！！」
少し寂しそうな表情で怒鳴ると、リネは足早に部屋を出て行ってしまった。
一方、何が何やらわからないディーンは、しばらく呆然と、開けっ放しになった扉の方を見つめていた。が、やがて溜め息と共に、扉の方から視線を外す。
「……何なんだ？　一人で勝手にキレやがって」
「――やれやれ。女心がわからない人ねぇ」
扉の方から声がして、ディーンはふと顔を上げる。
すると、そこにはいつの間にか、銀色のベールで顔を隠した、不思議な雰囲気のある女性が立っていた。
彼女の名前はエリーゼ・スフィリア。ジンの古くからの友人であり、テルノアリスでは有名な占い師だ。全てを見抜いてしまいそうな翡翠色の瞳が、ディーンをジッと見つめている。

「何の話だ？　って言うか、いつの間に……」
「バレンタインデー」
「……は？」
何の脈絡も無く彼女が口にした言葉に、ディーンは怪訝な顔をする。
するとエリーゼは、銀色のベールの下でニコッと笑って、ゆっくりと部屋の中に入ってきた。
「ここジラータル大陸から、遥か東にある島国ではね、女性が男性に手作りのチョコレートをプレゼントするっていう、まぁ一種の催しみたいな風習があるの。私もつい最近知った事なんだけど、それをリネさんに話したら、『あたしもディーンにプレゼントする！』って言い出したのよ。で、昨日の夜、急遽チョコレート作りに励んでたって訳」
エリーゼの説明を聞き終えた事で、ディーンは漸く理解する。認めてしまうのが少し億劫だったが、この事実は間違いない。
「……なるほど。要するに今の俺は、やらかしてるって事なんだな？」
「そういう事」
銀色のベールの下で嫌味っぽく笑うエリーゼに、ディーンは浅く溜め息をついて応えた。
リネとは前にも、似たような感じで喧嘩した事がある。それ以来ディーンとしては、そうならないように気を付けていたつもりだったのだが……。いやはや、女心というものは複雑である。
「ホラホラ。ボサッとしてないで、早くリネさんを追い掛けなさい」
「わ～かってるって」
エリーゼに催促され、ディーンは軽く頭を掻きながら立ち上がる。
そしてふと、ある事を思い付いた。
「――そういえばさ。さっきのバレ何とか言う催し通りなら、もしかしてエリーゼも、俺にチョコレートを用意してくれてたりするのか？」

別に深く気にして聞いた訳ではないが、ディーンがそう尋ねると、エリーゼは悪戯っぽく笑ってみせる。
「ざ～んねん。私はもう渡す相手を決めてあるの」
「決めてあるって……、相手を選ぶ催しなのか？」
「まぁ、一応はね」
「どういう基準で？」
首を傾げて問うディーンに、エリーゼはわざとらしく知らない風を装う。
「さぁねぇ～。リネさんに直接聞いてみれば？　……まぁ、彼女が素直に教えてくれるとは限らないけど」
「はい？」
「いいからホラ、早く行きなさい」
「……？」
何だろう？　彼女は間違いなく何かを知っているようだが、それが何なのか考えてもさっぱりわからない。
若干どころか訳がわからないまま、とりあえずディーンは部屋を後にした。

◆　◆　◆

「――とまぁ、外に出てみたはいいものの……」
宿から外に出たディーンは、相変わらず人の多い『テルノアリス』の大通りで、どこへ向かうべきかを逡巡していた。
リネがどこへ行ったのかわからない上、首都『テルノアリス』はとにかく広い。
最近ここを訪れる機会が増えているものの、ディーンにはまだ、

この街の全体像を知る事が出来ていない。大通りから道を一本外れれば、それだけで今自分がどこにいるかわからなくなってしまう。
そんな状態の自分が、こんな人の多い街の中から、何の手掛かりも無く人一人を探し出すのは、かなり難しい事だ。
「う～ん……、どうすっかなぁ……」
早く彼女を見つけて謝ってしまいたいのに、そう簡単に事は運びそうにない。
と、そう思っていた時だった。
「こんな所で何をしてるんだ？」
聞き覚えのある声がして振り向くと、そこに立っていたのは銀髪の少年、ジン・ハートラーだった。
彼は不思議そうな顔で、ディーンの方を見ている。
「おうジン。いや、それがさ……。ちょっとリネの奴を探してて」
困り果てた様子でディーンが告げると、ジンの口から意外な答えが返ってきた。
「彼女ならさっきそこで見掛けたぞ」
思わぬ所で意表を突かれたディーンは、一瞬ガチっと固まってしまったが、すぐさまジンに問い掛け直す。
「ホントか？　さっきっていつ？　そこってどこ？」
「落ち着け」
矢継ぎ早に質問するディーンに、ジンは冷静なツッコミを入れてから、大通りの方を軽く指差した。
「本当についさっきだ。多分まだ二分も経ってない。大通りを城の方向に向かって、真っ直ぐ歩いて行った。走って追い掛ければ、まだ追い付けるんじゃないか？」
「そっか。ありがとな」
短く礼を言って、ディーンがその場を立ち去ろうとすると、ジンが「ちょっといいかディーン」と言って、引き止めるような言葉を掛ける。
「？　何だよ？」

「エリーゼを見掛けなかったか？　お前たちが宿泊してる宿に来てくれと言われたんだが……」
「え？　ああ、多分まだ俺が泊まってる部屋にいると思うけど」
そう答えた所で、ディーンはふとある事を思い出す。
さっき宿の一室で交わしたエリーゼとの会話。バレ何とか言う催しと、チョコレートの事。
ジンとエリーゼが、昔から長い付き合いだという事は知っているし、二人の仲が良いはずだという事も、ある程度予想出来ている。
という事は、だ。
（もしかして、エリーゼが言ってた渡す相手って……）
「どうかしたのか？」
「へ？　い、いや、何でもねぇ」
不思議そうな顔をしたジンに尋ねられ、ディーンは思わず何でもない風を装う。
「あ、でもこれだけは言える。頑張れよジン！」
「？」
最後に余計とも言える言葉を付け足してから、ディーンは首を傾げているジンと別れ、大通りをゆっくりと駆け出した。

チョコと少女と少年と　後編

『テルノアリス城』から程近い場所にある、首都の街並みを望む事の出来る高台。憩いの場としても使われている為、二、三人が腰を下ろせる幅のベンチも、いくつか設置されている。

その内の一つ。手摺りの前に設置されたベンチに、リネは一人で座り込んでいた。

もう夕暮れが近い。黒髪の少女の身体は、西の彼方に沈もうとしている太陽の光で、橙色に照らされている。

「はぁ～……。何でいつもあんな風になっちゃうんだろ……」

傍から見ても落ち込んでいるとわかる程、リネは肩を落としてそう呟いた。

ディーンとは普段から、軽い言い合いのような事はしているが、こんな肝心な時にまで雰囲気を悪くしてしまうなんて、間が悪いとしか言えない。

エリーゼから教えてもらい、リネ自身も素敵だと感じたバレンタインと言う催し。

遠い東の島国ではある月になると、女性が男性に、好きだという気持ちを形にして相手に渡すという、お祭りのようなものが行なわれているらしい。

それを知った時リネは、真っ先にディーンの事を思い浮かべた。

普段のディーンは冷たい印象を受けるが、いざという時の彼は頼りになって、素直にかっこいいと思える少年だ。それに本当は、優しい一面を持っている事もよく知っている。

そんな彼に対してリネが抱く感情は、好きか嫌いかで言えば間違いなく好きの方になる。

だがその想いが恋愛感情かどうかと聞かれると、正直リネはわからなくなってしまう。そう言った複雑な感情を確かめる事が、彼女

にはまだ出来ていない。
だからこそリネは、その気持ちを伝えるとまではいかないものの、せめて感謝の気持ちを表せられればと思い、ディーンにチョコレートを渡そうと決めたのだ。
自分を助けてくれた少年に。
孤独だった自分に、居場所をくれた彼に。
「……やっぱり渡さなきゃダメだよね。想いはきっと、伝えなきゃ伝わらないもん」
少し弱気になっていた気持ちを奮い立たせて、リネはもう一度立ち上がろうとした。
するとその時。
「はいこんばんわ」
「うひゃあ！？」
突然耳元で声がして、リネは驚きのあまりベンチから転げ落ちそうになった。心臓の鼓動を嫌な感じで高鳴らせながら、リネはベンチの後ろに立つ人物を見て眼を丸くする。
「ディーン……！」
「ハハッ。いや、すまん。まさかそんなに驚くとは思わなかった」
申し訳なさそうに苦笑しながら、ディーンは何気ない感じで、ゆっくりとリネの隣に腰を下ろした。
するとその途端、リネの鼓動が、さっきとは別の意味で高鳴り始める。軽く緊張しているのが、自分でもわかってしまう。
（どうしよう……。別にいつも通りの事なのに、変に緊張して来ちゃった）
内心で動揺を隠しきれないリネは、オロオロと視線をあちこちへ巡らせる。もしかしたら、頬も少し紅くなっているかも知れない。
しかしディーンの方は、そんなリネの様子に気付いていないようだ。軽く両手を組むと、静かに口を開く。
「さっきは悪かったな」
「は、はい！　――って、え？」

緊張のあまり、リネは思わず上擦った声で返事をしてしまう。
一人だけ動揺して慌てているリネを他所に、ディーンは真っ直ぐ正面を向いたまま話を続ける。
「エリーゼから聞いたんだ。何かよくわかんねぇけど、バレ何とか言う催しの真似して、俺にチョコレート渡そうとしてくれたんだろ？」
「あ……、う、うん……」
何かよくわからない、という事は、自分がディーンにチョコレートを渡そうと思った経緯は知らない、という事だろうか？
恐らくエリーゼも、そこまで詳しく話したりはしていないだろう。昨日一緒にチョコレートを作っていた時も、彼女は秘密は守ると言ってくれていたし。
「だからその……、ごめん。深く考えもせずに、さっきみたいな事言って」
いつもよりやけに照れ臭そうに、ディーンはそう言って顔を逸らした。
その仕草が何だか可笑しくて、思わずリネはクスッと笑ってしまう。
「ホント優しいよねぇ、ディーンって。いつもそういう感じでいてくれたらいいんだけどなぁ」
「……うるせぇな。俺の勝手だろ？」
ディーンは突き放すような事を言うが、リネにはもうわかっていた。彼は本心から、そういう事を言っている訳じゃないんだ、と。
そんな風に、普段と同じような会話が出来たからだろうか？　ふと気付くと、いつの間にか緊張が解れている。
今なら変に気負う事無く、素直に渡せそうな気がした。
「ねぇ、ディーン。今更だけどこれ……、受け取ってくれる？」
気分が落ち着いてはいるものの、リネは少し躊躇いがちにチョコレートを差し出す。
するとディーンは、また紅いリボンの付いた箱をまじまじと見つ

め、そして意を決したように、サッと右手で受け取ってくれた。
「あ……、えっと。ありがとな……」
まだ照れ臭そうにそう言って、ディーンは軽く頷いてみせる。
彼の顔がやや紅い気がするのは、夕日のせいなんだろうか？　それとも……。
何だか少し気になってリネが内心で考え込んでいると、ディーンが軽やかに立ち上がって、嫌味の無い笑顔で告げる。
「さて……、もう日も暮れるし、宿に帰ろうぜ」
「うん！」
気のせいだったのかなと思いつつも、リネは軽く笑い返して、ディーンの後を追う。
ゆっくりと、それでいて嬉しそうに。

◆　◆　◆

ディーンがリネと共に宿の前まで帰ってくると、まるで自分たちの帰りを待っていたかのように、ジンとエリーゼの二人が出迎えてくれた。
「お帰りなさい、二人とも。意外と早かったわね」
「何だよ。二人してずっと待ってたのか？」
「ええ、まぁね。――それで、どうだったのリネさん？」
「はい。ちゃんと受け取ってもらえました」
「そう。良かったじゃない」
お互いに嬉しそうな表情で会話するリネとエリーゼ。そんな二人の様子を見ていると、ディーンは何だかしてやられた気分になる。
（……まさか、最初から全部仕組まれてたりしねぇよな？）

と口に出す訳にもいかず、ディーンは自分の胸の内に、その言葉を押し留めた。
すると、その二人から離れてこちらに近付いてきたジンが、こっそりと声を掛けてくる。
「なぁディーン。もしかして、お前もチョコレートを渡されたのか？」
「ああ、まぁな。……って言うか、じゃあジンも？」
「ああ。宿に着くなり、有無を言わさず『受け取りなさい』だ。正直、何がしたいのかさっぱりわからん」
「ハハ……、そっか」
こっちはある程度予想していた事だが、ジンの方はやはり不思議がっているらしい。その表情を少しも変えないまま、再度ディーンに尋ねてくる。
「ところで、このチョコレートにどういう意味があるのか、お前知ってるか？」
「え？　ああ、そういえば俺もまだ聞いてなかったな……」
答えを求めて、ディーンとジンがほぼ同時にリネとエリーゼの方を振り向くと、二人は悪戯っぽく笑って同時にこう言った。
「「教えてあ～げない」」
「「？」」
楽しそうに笑い合うリネとエリーゼ。
そんな二人を前に、ディーンとジンは顔を見合わせ、首を傾げるしかなかった。

これは、とある日に起きた出来事。
少年少女たちの、穏やかな日常の物語。
大切な想いがたくさん詰まった、大切な一日の話。

チョコと少女と少年と　後編（後書き）

という訳で、特別編いかがだったでしょうか？
別に何が特別って訳でもないような気がしますが（笑）、たまにはこんな話を書いてみるのもいいものですね♪

ではまた、次の外伝のネタを思い付いた時にお会いしましょうw

Ａｃｔ．１　居場所を求めて（前書き）

一ヵ月半ぶりくらいの投稿ですね。
今回の主役は『鉱山都市編』に出てきたアルフレッドです。
ではさっそく行きましょう！ｗ

Ａｃｔ．１　居場所を求めて

アルフレッド・ダグラス――。
左耳に逆三角錐型のピアスを付けた、茶髪の青年。
民間組織『ギルド』に所属している彼は、とあるチームのリーダーとして様々な仕事をこなしながら、仲間と共に、変わらぬ日々を過ごしていた。
だがある時、彼の日常は様変わりする事になる。
全ての始まりは、とある大規模な作戦に参加し、とある紅い髪の少年と出会ったからだった。いつも通り、何の気もなく仕事を引き受けた事で、結果的に彼は、仲間を失う事になる。
自分の居場所を見失い、大陸の各地を彷徨い歩いた後、彼は再び紅い髪の少年と出会ってしまう。
今の自分が、最も憎んでいる相手に……。
だが運命は復讐を望んだアルフレッドに、思わぬ結果を齎した。
それは憎んだ相手との、紅い髪の少年との、一種の和解のようなもの。
そして、その意図せぬ結果によって、アルフレッドの中に生まれた一つの目的。それは、失ったものを取り戻す事。
過去を変える事は出来ない。
だが、未来を変える事は出来る。
漸くそれに気付く事の出来た青年は、仲間の行方を捜して一人、奔走する。
過去の因縁に別れを告げ、新たな未来を手に入れる為に――。

ジラータル大陸南西の街、『ケルフィオン』。そこはかつて、アルフレッドが参加した『あの作戦』を引き受けた『ギルド』のある街の名だ。

とある鉱山都市で紅い髪の少年と別れてから、アルフレッドはある目的の為、再びその街の近郊を訪れている。

そのある目的とは、絶縁に近い別れ方をした、かつての仲間との和解。

口に出せば案外簡単な事のように感じられるかも知れないが、彼の場合、そう単純で軽い話でもないのだ。

倒王暦〇〇一一年、五ノ月の頃。ジラータル大陸のとある場所で起きた、大規模な戦い。

その戦いは開始当初から、『ゴーレム討伐作戦』と参加者たちの間で大々的に銘打たれ、ギルドメンバーだけでなく、『ギルド』に所属していない一般人からも参加者を募っていた。

その参加者の中にいたのが、後にアルフレッドが諍いを起こす相手である、紅い髪の少年。

当初からアルフレッドは、彼が作戦に参加した目的が、単なる金稼ぎの為だという事を見抜いていた。それ故に彼に辛辣な態度を取り、また少年自身も、アルフレッドに対して噛み付くような姿勢を取っていた。

ほんの少しの会話で早くもチームに亀裂を生んでしまった二人は、言葉にならない気不味さと危うさを抱えたまま、作戦開始の時を迎えてしまう。

そしてついに、事は起きた。

作戦の目的は、とある遺跡を跋扈している魔術兵器『ゴーレム』たちを、一体残らず殲滅する事だった。

だが開始直後、ある思いを抱えていた紅い髪の少年が、突然単独行動を取り、その経緯から足並みが崩れたアルフレッドのチームは、作戦に参加していたその他のチームと共に、遺跡内に仕掛けられていた罠に掛かってしまう。

（確かに、あの時の俺は冷静さを欠いてた。あんな単純な罠に掛かったのも、眼の前の事に集中出来てなかったからだろうな……）
罠の発動と同時に、アルフレッドたちは『ゴーレム』の大群に襲われ、身動きが取れなくなる。
このままでは全滅かと思われたその時、事態の収拾に乗り出したのは、他でもない紅い髪の少年だった。
彼は、冷静さを失い暴走し掛けていたアルフレッドを無理矢理制止し、たった一人で群がる『ゴーレム』たちを退けてみせたのだ。
そこで漸く、アルフレッドは知る事になる。
少年の正体を。
彼が凄まじいまでの力を持った、『魔術師』であるという事を。
しかし、それで解決した事にはならなかった。死者こそ出なかったものの、数多くの負傷者が出た事から、アルフレッドは怒りの矛先を、単独行動を取った紅い髪の少年にぶつけた。
こんな結末になったのはお前のせいだ、と。
アルフレッド自身、それで全てが終わると思っていた。勝手な行動を取った者を断罪したのだから、これで全てが丸く収まると。
だがそれは、全くの勘違いだった。

『作戦が悲惨な結果に終わった責任は、チームのリーダーであるお前にもある』

仲間から告げられた予想もしない言葉。アルフレッドが怒りの矛先を紅い髪の少年に向けたように、今度はアルフレッド自身が、仲間から怒りの矛先を向けられてしまう。
そして結局、チームは崩壊した。
変わらない日常を過ごしてきた仲間と、縁を切るという形で。
そのような経緯があって以来、アルフレッドは一度もその仲間たちと顔を合わせていない。
大陸の各地を彷徨っていた時も、極力『ギルド』には近付かない

ようにしていた。そうする事で、自分の中に残る未練を捨て去ろうとしていたのだ。
（……まぁ、過去の事を今更掘り返したってどうにもならねぇ）
暗い感情を呼び起こしてしまいそうになったアルフレッドは、軽く首を振って頭を切り替える。
自分がここまでやってきたのは、そんな事を考える為ではない。
失ったものを取り戻す。ただその為だけに進んできたのだ。
鉱山都市『ワーズナル』で再会した、あの紅い髪の少年の顔を思い出しながら、アルフレッドは何気なく空を見上げる。
確かに最初は、彼の事を憎んだ。自分が今こんな惨めな思いをしているのは、あの少年のせいだ、と。だからこそ彼と再会した時、アルフレッドは迷わず恨みを晴らそうと行動を起こした。
だが結果的にそれが頓挫し、今度こそ何もかも失ったアルフレッドは、全てを諦めようとする。
その時、アルフレッドは見たのだ。困難な状況に陥ったにも拘らず、決して諦めようとしない少年の姿を。
笑えるくらい無様だった。
馬鹿馬鹿しいくらい必死だった。
そんな彼の姿を見て、アルフレッドの中で、確かに何かが変化したのだ。
（『アイツ』は過去を悔やむ事をしねぇ。決して弱音を吐かず、振り返る事なく、今の自分に出来る事を精一杯成し遂げようとしてやがるんだ）
その証拠に、彼はアルフレッドが復讐しようとした事を、一度も咎めようとはしていない。
少なからず不満には思っていただろう。それでも彼は、それをアルフレッドにぶつけようとする事はなかった。
それに別れ際、あの少年は自分に対してこう言った。
頑張れよ、と。
全くあの少年は、自分より随分年下のくせに、生意気な事ばかり

を口にする。
「やれやれ……。本当に、心底ムカつく野郎だぜ」
と、独り言を呟くアルフレッドの表情は、その言葉に反して薄く笑っている。
アルフレッド自身、もう充分わかっているのだ。『アイツ』の事が大嫌いなのは間違いないが、それでもきっと心のどこかで、『アイツ』の事を認めている、と。
だが負ける訳にはいかない。自分もあの少年以上に、力強く立ち上がらなければならないのだから。
笑みを消し、アルフレッドは真剣な表情で、再び前を向く。
（何も手掛かりがねぇのは事実だが……、もしかしたら、あいつらもここに帰って来てるかも知れねぇ）
一縷の望みを託して、アルフレッドは歩き始める。
遠く荒野の先に待ち受ける、かつての因縁の地へ向かって。

Ａｃｔ．１　居場所を求めて（後書き）

多分これも四話か五話くらいの長さになるんじゃないかと思います。
本編同様、順調にうｐしていければいいのですが……ｗ

Ａｃｔ．２　仲間の行方（前書き）

アルフレッドの外伝、第二章です。
シャルミナさんのはお話は割と好評だったようなので、この話も出来るだけ満足してもらえるよう頑張ろうと思います！

Ａｃｔ．２　仲間の行方

以前アルフレッドが共に仕事をこなしていた仲間の数は、全部で十二人。そのメンバーの中で、アルフレッドとよくチームを組んでいた男女二人がいる。

レオン・マーガスト。

リズベット・レイクシュオール。

これが、その男女の名前だ。

この二人は、残りの十人とは一線を画すと言っていい程、アルフレッドとの親交が深かった。彼が『ギルド』の仕事を始めたのは、幼馴染であるレオンに誘われたからだし、仕事仲間を探していた時に意気投合したリズベットには、『ゴーレム』退治の手解きなんかを受けた事もある。

二人の存在は、アルフレッドにとって間違いなく、特別なものだった。

だが今はもう、そんな二人との絆すら、欠片も残ってはいないのだろう。

あの作戦の後以来、仲間たちとは誰一人として連絡を取っていないし、アルフレッドは意識的に、一人になろうと心掛けていた。

今のように自分があの二人の事を気に掛けていても、彼らの方が自分の身を案じている事など、恐らく有り得ない。それだけ酷い別れ方をしたのだから。

（……虫が良過ぎるって言われりゃ、確かにその通りなんだがな）

一人『ケルフィオン』の大通りを歩きながら、アルフレッドは自虐的に笑みを零す。

今更関係を修復したいだなんて、これ以上虫の良い話はない。自分勝手な事だというのも、充分承知している。

だがそれでも、このままでは前に進めない。

過去に縛られたまま無意味に彷徨い続けるのは、もう止めるべきなのだ。
向き合わなければならない。
彼らと、眼を背けてきた自分自身の心に。
「――ここに来るのも久しぶりだな」
大通りを歩き続け、目的の場所に辿り着いたアルフレッドは、感慨深くそう呟いた。
彼の眼の前には、『ＧＵＩＬＤ』と書かれた看板を掲げた、茶色い木造二階建ての建物がある。
もう何ヵ月もの間、決して近付く事のなかった、『ケルフィオン』の『ギルド』だ。ここをよく利用していたレオンとリズベットなら、もしかしたら姿を見せる事があるかも知れない。
淡い期待を胸に、アルフレッドは『ギルド』の中へ足を踏み入れようとした。
するとその時――。

「おや？　アルフレッドくんじゃないか」

そんな明るい声が、アルフレッドの足を踏み止まらせる。
アルフレッドには、その声に心当たりがあった。懐かしさと、妙な緊張感が入り混じった面持ちで視線を向けた先には、予想通り、三十代後半の柿色の髪の男が立っていた。
口に銜（くわ）えた茶色いパイプから白い煙を漂わせながら、男は驚いた表情でこっちを見ている。
彼の名前はクルス・ランドリア。『ギルドマスター』と呼ばれる役職と医者を兼任している、アルフレッドの昔からの知り合いだ。
ジラータル大陸にある全『ギルド』の『ギルドマスター』の中で、最年少として今の地位に就いた事から、その筋では結構な有名な人間らしいのだが、昔から付き合いのあるアルフレッドには、自分のすぐ傍に有名人がいるという感覚がわからなかったりする。

アルフレッドは、若干重い口をどうにか開け、言葉を紡ぐ。
「あんた、こんな所で何してるんだ」
「久しぶりだっていうのに随分な挨拶だねぇ。――ま、相変わらずなようで安心したよ。『あの一件』があって以来、キミは全く顔を見せなかったから……。どうしているのか気に掛かってたんだ」
「……そう、か」
「まぁ立ち話もなんだ。中に入り給え。色々聞きたい事もあるしね」
クルスはニコリと笑うと、アルフレッドの返事も聞かずに、『ギルド』の中へと入って行ってしまう。
（あのおっさんだけは相変わらずみたいだな。マイペースっつーかなんつーか……）
以前と変わらない態度で声を掛けてくれたクルスに、感謝しつつも内心で少々呆れてみる。
だが、あまり気を緩めてもいられない。アルフレッドにとっての本番は、まさにここからなのだから。
軽く頭を掻きながら、アルフレッドは『ギルド』の中に足を踏み入れる。
自分にとってある意味、一世一代の勝敗を賭けた戦場へ。

◆　◆　◆

久しぶりに訪れた自分にとっての古巣に、アルフレッドは少し浮足立っていた。
正直な所、酷く居心地が悪い。仲間たちと絶縁状態にある今だからこそ、その思いが強く働いている訳だ。
「――そう固くならなくていい。私はキミを歓迎してるつもりなん

だがね」
建物の二階。『ギルドマスター』専用の仕事部屋。作業机の前に置かれたソファーに、アルフレッドはクルスと向かい合う形で腰を下ろした。
アルフレッドもクルスとは付き合いが長いとはいえ、こうして『ギルドマスター』の部屋に入るのは初めての事だ。
以前本人に聞いた話だと、『ギルドマスター』の仕事は事務的なものが多いそうだ。
請け負った依頼の進捗状況、被害や損害の規模を確認する作業、動かせる人員の整理などなど。書類上に記載されたそれらの事柄を確認するだけでも一苦労な上、月に一回は他の『ギルドマスター』たちと会議があり、そこでも情報の整理や交換や統制を行なわなければならないらしい。
しかもクルスの場合、医者も兼任しているのだ。こうなるともう、その仕事の量が計り知れないなとアルフレッドは思ってしまう。
休む暇がないのが難儀だね。クルスが愚痴っぽくそう漏らしたのは、一体いつの頃だったか。
「あの作戦からもう半年以上か……。随分長い間顔を見せなかったけど、あれからどうしてたんだい？」
今はもう大丈夫なのかと思うアルフレッドを尻目に、クルスは平然とそんな事を尋ねてくる。
気丈な人間なんだなと、アルフレッドは適当に思う事にした。
「別に、大した事はしてねぇ。特にやる事も見つからなかったんでな。大陸の各地を適当に歩き回ってただけだ」
「そうか……」
アルフレッドの言葉の端から、クルスは何かを察したらしい。それ以上何も言わず、まるで一呼吸置くかのように、パイプを吸って白い煙を吐き出す。
「こっちは以前と変わらず仕事を続けてるよ。キミがよく行動を共にしてたみんなも、変わらず元気に過ごしてる」

「……！」
変わらず、という言葉で、アルフレッドは若干気持ちが沈むのを感じた。仲違いした仲間たちは、やはり自分の事など気に掛けてくれていないのか、と。
別にクルスもそんなつもりで言った訳ではないのだろうが、それでも今のアルフレッドには、軽い衝撃を与えるのに充分な言葉だった。
本当にこのまま、彼らの事を探し続けていいのだろうか？
そんな迷いさえ生まれてしまいそうな程、アルフレッドはかつての仲間たちに対して引け目を感じている。
だが、それでも。
（馬鹿か俺は……。この程度の事で躊躇ってどうする。諦めたくねぇ。諦め切れねぇから、ここまで来たんだろうが！）
内心で自分自身を鼓舞し、弱気な思いを何とか封じ込める。
そうだ、この程度で終わる訳にはいかない。憎たらしくて生意気な、あの紅い髪の少年に笑われない為にも。
「なぁ、クルスさん」
「ん？　何だい？」
「その……、レオンとリズの行方を知らねぇか？」
少し躊躇いがちにとはいえ、どうにかアルフレッドが口にすると、クルスは若干眼を丸くした。もしかしたら彼も、アルフレッドの口からその名前を聞けるとは思っていなかったのかも知れない。
以前の仲間内でアルフレッドとレオンだけが、リズベットの事を『リズ』という愛称で呼んでいた。
もちろんクルスはその事を知っている。
大勢の仲間の内で、特に三人の仲が良かったという事も。
「レオンくんとリズベットくんか。確か今、二人は一緒に依頼を受けてるんじゃなかったかな？」
顎に手を当てて考える仕草をしながら、クルスは立ち上がって作業机の方に向かう。

一方アルフレッドは、クルスの口から意外にあっさりと二人の名前が出てきた事に、若干驚いていた。依頼を受けたかどうかをクルスが知っているという事は、彼らが今でもこの『ギルド』を利用しているという事に他ならない。
「レオンとリズは、今でもここに顔を出すのか？」
「ああ。頻繁に、という程ではないけど、ここ半年以上顔を見せなかったキミに比べれば、よく足を運んでる方だと思うよ」
机の上の書類の束を漁りながら、クルスは苦笑する。
やはり思っていた通りだった。彼らはこの『ギルド』で、以前と変わらず仕事を続けていたのだ。
確かな事実を手に入れた事で、不意にアルフレッドは思ってしまう。もしかしたら彼らは、自分が帰ってくるのを待ってくれていたのではないか、と。
（……いや。そんな訳ねぇよな）
僅かに芽生えた希望的観測を、アルフレッドは即座に切り捨てた。
いくらなんでも都合が良過ぎる。自分の良いように考え過ぎだ。そんな甘い考えが通用する程、この世界は優しくないのだから。
「――ああ、あった。やっぱり二人は仕事の依頼を受けて、二日前にここを出発してるね」
一枚の書類を手にして話すクルスは、椅子に腰掛けながら文字の羅列を追っていく。
アルフレッドはソファーから立ち上がると、作業机を挟む形でクルスの正面に立った。
「依頼の内容は？」
「申し訳ないけど、いくらキミでもさすがに詳細は教えられない。キミはこの仕事を正式に請け負った訳じゃ――」
「なら俺もその仕事を請け負う」
「！」
アルフレッドはほぼ反射的にそう答えていた。迷いの一切感じられない、真剣な顔付きで。

彼の言葉からただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、クルスは書類から眼を離し、探るような眼付きでアルフレッドを見つめ返した。
「……随分切羽詰まってるようだね。彼らの許へ行って、一体どうするつもりなんだい？」
「あんたには関係ねぇだろ。これは個人的な問題だ」
「残念だがそういう訳にはいかない。私は仮にも『ギルドマスター』なんだよ？　正式に依頼を受けた訳でもない人間が介入しようとする以上、その明確な意志と理由を知っておく必要が私にはある」
クルスの言葉は強い意志を感じさせるものだった。それこそ、適当に流してしまえるような雰囲気ではない。例えどれだけ時間が掛かろうと、アルフレッドが事情を説明しない限り、クルスは頑として情報を与えてくれはしないだろう。
（……チッ。ある意味これも、失ったモンを取り戻す為に必要な痛み、って事か）
観念するように内心で嘆息したアルフレッドは、重い口を開く。
クルスとの連絡を絶っていたこの半年以上の期間、自分が何をしていたのか。自分がどんな思いを抱えていたのか。
そして今、自分が何をしに、何を取り戻す為に、この街を訪れる決心をしたのか。
自らの思いを吐露し、全てを伝えたアルフレッドを見つめ、クルスは真剣な表情を崩さなかった。が、やがて一度眼を伏せると、パイプをゆっくりと吸い、白い煙を同じようにゆっくりと吐き出す。
「……『あの作戦』が齎したものは、確かに辛いものばかりだったね。私もね、あれからずっと後悔してるんだよ。なぜもっと上手く、人員の選定や配置に気を配れなかったのか、と。もちろんあの紅い髪の少年のせいにしているつもりはない。そんな事をする前に、私にはもっと出来る事があったはずだしね」
クルスは書類を机に戻して椅子から立ち上がると、アルフレッドに背を向け、窓の外を眺める。
そんな彼の姿からは、先程の強い意志を感じさせる雰囲気が消え

去っていた。どこか弱々しく、見ている者が言葉にならない苦々しさを感じてしまうような、そんな姿だった。
「だからこそだ。あれからずっと、何か自分に出来る事はないかと考え続けていた。……もしかしたら、今がその時なのかも知れないね」
そう呟き、クルスは振り返る。優しい頬笑みを湛え、全てを受け入れようとするかのように。それは明らかに、アルフレッドに情報を提供しようという意志の表れだった。
クルスの態度を眼にし、アルフレッドは今更ながらに戸惑いを覚える。
「依頼内容を教えてくれるのか？　あんたの言葉を借りるなら、俺は正式に依頼を受けた人間じゃないんだぜ？」
「知りたがったのはキミの方だろう？　何も気にする必要はない。例え何か問題になったとしても、責任は私が取る。極端な言い方をすれば、それが私の仕事でもあるしね」
苦笑しながら机の上の書類を手にしたクルスは、それをアルフレッドの方へと差し出しながら続ける。
「二人が受けた依頼は、ある遺跡調査団の護衛任務だ。遺跡の場所と詳しい依頼内容はここに書かれてる。持って行くといい」
「……悪いな、クルスさん」
「気にしなくていいと言ったろ？　――さぁ。早く行き給え」
催促するように微笑むクルスに、アルフレッドはその場で軽く頭を下げた。協力してくれた彼に報いる為にも、この情報を無駄にする訳にはいかない。
改めて気を引き締め直したアルフレッドは、踵を返して部屋を出て行こうとする。
「ああ、そうだ」
すると何かを思い出したようにクルスがそんな声を上げる。不思議に思ってアルフレッドが振り返ると、クルスは悪戯っぽく笑ってこう言った。

「一応後でその書類は返しに来てくれるかい？　部外者に関係書類を渡したのがバレたら、停職処分になるかも知れないから」
「……」
責任を取るのが私の仕事だ、とかカッコいい事言ったのはどこの誰だよ？　と内心で呆れつつ、アルフレッドは部屋を後にした。

Ａｃｔ．２　仲間の行方（後書き）

本編の方でも新キャラ出て来るのに、外伝でも新キャラ出すなんてどうかしてるぜ！ｗ
本編共々、ここらが踏ん張り時のようです。

Ａｃｔ．３　蛮勇（前書き）

アルフレッド編、第三章！
前話よりちょっと短くなってます。

Act. 3　蛮勇

新たな遺跡発掘に関する調査団の護衛兼調査補助任務。それが、レオンとリズベットが受けた依頼の内容だった。

新たに発見された遺跡の場所は、『ケルフィオン』の街から西の方角。丁度大陸一険しいとされる『ブラウズナー渓谷』に繋がる山脈地帯のすぐ傍だ。

依頼主は遺跡調査を専門とする考古学者三名。彼らは遺跡を調査するにあたって、その遺跡周辺に『ゴーレム』が出没する可能性を考慮した為に、今回の依頼を『ギルド』に出したらしい。

（『あの時』と状況が似てやがる……）

依頼内容が書かれた書類に目を通したアルフレッドは、すぐにそう思った。

『ゴーレム討伐作戦』。あれも元はと言えば、遺跡を調査していた学者たちが『ゴーレム』の群れを破壊してほしいという依頼から始まったものだった。

状況が似ているというだけで、アルフレッドは不安を覚える。

不吉な予感とも言うのだろうか。現にレオンとリズベットが『ケルフィオン』を出発したのが二日程前。書類上に書かれている街から遺跡までの距離は、馬を使えば三時間程で行ける距離だ。にも拘らず、二日経っても彼らが帰還していないというのがどうしても気になってしまう。

単に調査が長引いているだけという可能性もあるが、以前の事があるせいか、アルフレッドはどうしても楽観的に考えられなくなっていた。

もしかしたら何かあったんじゃないか、と。

「勘違いならそれでいい。あいつらが無事ならそれで……」

『ケルフィオン』の街で調達した馬の背に乗り、アルフレッドは荒野を疾走する。

目前には、既に山脈地帯が近付いて来ていた。

◆　◆　◆

走り続けてきた乾いた荒野とは打って変わり、周りには徐々に草木が多くなっていく。
目的地が近いと感じたアルフレッドは、適当な所で地面に降り、馬を手頃な大きさの木に結え付けてから、自分の足で歩き始めた。
ここからは書類に書かれている地図だけでは心許ない。正確な位置を把握する為に方位磁針を手に取って、アルフレッドは慎重に歩を進めていく。地図通りに来れているなら、遺跡はこの辺りにあるはずだ。
「――ん？」
それは立ち止まって、もう一度方角を確かめようとした時だった。
アルフレッドは僅かに目を瞬かせ、もう一度前方を注視してみる。つい今し方、前方の木々の隙間で何かが動いたような気がしたのだ。
一瞬『ゴーレム』が現れたのかとも思い、警戒心を強くするアルフレッド。
だが近付いてよく見てみると、動いているのは太い木の幹に結え付けられている二頭の馬だった。ホッとしたのも束の間、アルフレッドはその馬を見てある事を思い付く。
「まさかこの馬、レオンとリズの……？」
こんな人気のない場所に馬が結え付けられているという事は、誰かがここまで馬に乗ってきたという証拠だろう。しかも状況から考えれば、それはレオンやリズベットたちである可能性が非常に高い。
さらに言えば、こうして馬があるにも拘らず、彼らは未だに遺跡

から帰還していない。となると、考えられるのは最悪の可能性。
「まさか、あいつら……！」
出来れば現実のものになってほしくなかった可能性。
彼らは今、何かトラブルに巻き込まれているのかも知れない。そう考えると、アルフレッドは居ても立ってもいられなくなった。すぐさま方位磁針と地図を頼りに、再び遺跡の場所を探り始める。
何の迷いもなく進み始めた両足は、やがて早足になり、小走りになり、気付けば風を切るかのように駆け出していた。
鼓動が高鳴る。
息が切れる。
先を急ぐあまり、何度か足が縺れそうにもなった。
草を掻き分け、木々を通り越し、やっとの思いでアルフレッドが辿り着いたのは、山脈の麓の拓けた場所。周りには既に木々がなく、所々草の生えた地面が山側に向かって広がっている。
と、その光景の中に、アルフレッドは漸く自然物ではない物を見つける事が出来た。
山肌の一部を削って造られた、巨大な構造物。アルフレッドはその構造物に駆け寄ってから、乱れていた息を整える。
「……よし。どうやらここで間違いねぇらしい」
方位磁針と地図を数回確認し直して、アルフレッドは漸くそう結論付けた。そして改めて、眼の前の遺跡の姿に眼を向ける。
遺跡の入口となる山肌の部分には、高さが二十メートルはあろうかという、巨大な石柱に支えられた石造りの門があり、その先には同じく巨大な扉が屹立していて、両開きの形になっている。
遺跡その物は、山肌を丸ごと刳り貫いて造られているらしく、内部は恐らく洞穴のようになっているはずだ。
アルフレッドの脳裏に、つい最近立ち寄る機会のあった『グレッグス鉱山』の情景が呼び起こされる。尤も、入口の大きさからして、あの時とは少しばかり状況が異なってはいるが。
「……しかしどうなってんだ？　確かに入口はあるが、扉が完全に

閉まっちまってるぞ」
眼の前の巨大な石の扉は固く閉ざされていて、内部へ入る隙間などどこにも見当たらない。
もしかしたら、どこかに扉を開ける為の仕掛けがあるのかと思い、アルフレッドは扉の傍に近付いてみた。
するとその時。

『来訪者よ』

「！？」
突然、どこからともなく何者かの声が響いてきた。
思わず身構えるアルフレッドを他所に、謎の声は感情の起伏が感じられない、どこまでも平淡な口調で続ける。
『ここより先には試練がある。生きるも死ぬもそなた次第。臆せぬならば進むがいい。試練を乗り越えしその時に、そなたには栄光の光が訪れるであろう』
「あん？　一体何を――」
と問い掛けようとした時、石造りの扉が轟音を立てながら、ゆっくりと左右に開き始めた。丁度人が通れる程の隙間が出来た所で轟音は止み、扉はピタリと動かなくなる。
「……何なんだこの遺跡は？」
内部へ入る為の隙間が出来た扉の前で、アルフレッドは眉根を寄せて首を傾げる。
さっきの平淡な声はもう聴こえない。あの声が言っていた『試練』という言葉が気に掛かったが、それよりもアルフレッドには気掛かりな事があった。
それは当然、レオンとリズベットの行方だ。
彼らがここを訪れているのは、さっきの馬の件から考えてもほぼ間違いないだろう。
そして、彼らが未だ帰還していない理由。それはもしかしたら、

さっきの声が言っていた『試練』というものに挑戦したからなのではないだろうか。
（遺跡の扉は閉ざされてた。って事は、あいつらはまだ中にいる可能性が高い）
先程から考えていた最悪の可能性が、いよいよ現実味を帯びてきた。
トラブルに巻き込まれたどころの話じゃない。もしも彼らがこの中で、死体となって転がっているとしたら――。
（馬鹿野郎……ッ！　俺がそんな事考えてどうする！？）
一瞬でも想像してしまった悪夢のような光景を、アルフレッドは首を激しく左右に振る事で消し去る。
そうだ、望みを捨ててはいけない。まだ何の確証を得た訳でもないのだから。
彼らの安否を確かめたければ、今はとにかく進むしかない。
例えこの先に、どんな『試練』が待ち構えていようとも。
「待ってろよ。レオン、リズ」
二人の名前を呟く事で集中力を高めつつ、注意深く入口に近付き、アルフレッドは遺跡内へと足を踏み入れる。
進む先に、希望の光があると信じて。

Ａｃｔ．３　蛮勇（後書き）

本編と並行してると、どうしても投稿が遅くなるなぁ……。
特に今回、本編の方が重要な展開を招く所なんで、外伝はいつもより更新が遅れるかも知れません。
言い訳っぽく書いてますが、最後まで書くつもりなので、更新は遅くても頑張っていこうと思います。

Ａｃｔ．４　近付く者

巨大な扉を潜り、アルフレッドは遺跡の内部へと足を踏み入れた。
内部に外の光は届かないはずなのだが、どういう訳かアルフレッドのいる空間は、松明すらないにも拘らずほんのりと明るい。
まるで夜明け前の薄明かるさを感じさせる空間は、入り口から道が四つに別れている。どの道も道幅は大体五メートル、高さは七メートル程だ。足下を確認出来る程度の明るさはあるが、さすがに奥の方まで見通す事は出来そうにない。
（進める道は四つ……。レオンとリズが選んだ道はどれなんだ？）
分かれ道の前で立ち止まり、アルフレッドは僅かに考え込む。
と、その時だった。
アルフレッドが入ってきた入口の扉が、再び地鳴りのような轟音を上げて完全に閉じてしまった。思考が別の所に向いていた為、アルフレッドはそれに反応出来ず、結果として遺跡の内部に閉じ込められてしまう。
だがアルフレッドの心境は、思いのほか冷静だった。
「なるほど……、来訪者が中に入ると勝手に閉じる仕掛けなのか。――ま、外に出る方法を考えるのは、レオンとリズを見つけてからだな」
退路を断たれたという状況にも拘らず、アルフレッドには焦りが一切無い。適当にそう結論付けると扉から眼を離し、再び正面の分かれ道と睨み合う。
どの通路も決して視界は良くない。それぞれの道が、どのような場所に繋がっているかわからない上、進んだ道が行き止まりになっている可能性だってある。
本来なら慎重に道を選ぶべきなのだろうが、アルフレッドにはある考えがあった。
（そういやリズが言ってたっけな。迷路ってのは壁伝いに歩けば、

時間は掛かろうとも必ずゴールに辿り着く。こういう場所を探索する場合、何より一番重要なのは根気なんだ、ってよ）

アルフレッドは昔、レオンとリズベットの二人と古びた遺跡を探索した際、迷路のような場所に迷い込んだ事がある。出口が見つからない焦りから、慌てふためく自分とレオンを尻目に、リズベットだけは嘘みたいに冷静を保っていた。今の台詞は、その時彼女が言っていた言葉だ。

懐かしい記憶を思い出し、その顔に軽く笑みを湛えながら、アルフレッドは一番右にある道を選んだ。

少しゴツゴツとした地面をしっかりと踏み締めながら、アルフレッドは遺跡の奥に向かって歩いていく。その反面、内心では闇雲に走り出してしまいそうな気持ちを、必死に抑え込んでいた。

自分が今冷静さを失ってしまってはいけない。冷静さを欠いて無謀な行動を起こせば、それこそ以前の作戦の時のような事になりかねない。

（今度ばかりは失敗が許される状況じゃねぇ。あいつらが今もまだこの中で危機に晒されてるんだとしたら、尚更な）

例えどんなに詰（なじ）られようと、忌み嫌われようと、彼らともう一度話し合う事を決めたのは、他でもないアルフレッド自身だ。

あの紅い髪の少年に負けない為にも、自分の信念だけは曲げたくない。

そんな思いを胸の内に秘め、力強く歩き続けていた時だった。

ガコッという、何かの蓋が外れるような、硬い音が響いたのは。

「あん？　何の音――」

不思議に思い、その場に立ち止まろうとしたアルフレッドは、足下の小さく隆起した地面に足を取られ、思わず前のめりに転びそうになる。

するとその瞬間。天井から途徹もない速度で落下してきた何かが、

前のめりになったアルフレッドのすぐ後ろに、ザンッという鋭い音を立てて突き刺さった。
「！？」
背中に妙な悪寒を感じ、アルフレッドは恐る恐る背後を振り返る。
するとそこには、巨大な鏃型の刃物が、地面を抉るかの如く深々と突き刺さっていた。
刃物の大きさは大体一メートルくらい。全体が氷の塊で出来ているかのように、鏃の向こう側が薄らと見通せる。
そしてアルフレッドは今更ながらに気が付いた。よく見ると、自分が今立っている周囲の地面には、鏃が突き刺さった後のような切れ目がいくつも出来ている。
それを眼にした瞬間、アルフレッドは即座に、今の事態を把握した。
「侵入者用の罠か！」
誰にでもなくアルフレッドがそう叫ぶと、それに答えるかのように、さっきと全く同じ音が次々と聴こえ、天井から巨大な鏃型の刃物が、流星群のようにアルフレッドの許へと殺到してきた。
「どわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」
若干涙目になりつつ走るアルフレッドの背後には、天からの素敵な落とし物が容赦なく次々と降り注いでくる。
入り口であの謎の声が言っていた『試練』とは、これの事だったのだろうかと思いつつ、それでも今のアルフレッドには、深く考えている余裕は全く無かった。
今はただ走るしかない！　……という妙な強迫観念に囚われながら、まさに脱兎の如く、アルフレッドは必死に両足を動かし続けた。

◆　◆　◆

そんな強制トレーニングを続ける事五分。意図せずして遺跡のかなり奥まで進んだアルフレッドは、地面に泥のように倒れ込んで、ぜぇぜぇと激しい呼吸を繰り返していた。
「ふ……ッ、ふざけんじゃねぇぞ……！　いきなりあんなモン落下させるなんて……、どうなってやがんだこの遺跡の仕掛けは……！？」
誰に対しての文句なのかはわからないが、それでもアルフレッドは口にせずにはいられない。
しばらく地面に横になっていたアルフレッドだったが、また何か落下してくるんじゃないかという疑心暗鬼を覚え、乱れた息を整えながら、疲労している身体をどうにか立ち上がらせた。
（……それにしても、レオンとリズはどこにいやがるんだ？　確かに急な仕掛けで驚きはしたが、この程度の罠にあいつらが引っ掛かるとも思えねぇ。なのに何であいつらは、この遺跡から戻って来ねぇんだ？）
通路の奥の方へ視線を向けながら、アルフレッドは静かに考え込む。
一体彼らはここで、何に足止めを喰っているのだろう？
自分が通ってきた通路以外にも、罠がある可能性は充分ある。だが例えどんな罠だろうと、ギルドメンバーとして数々の苦難を乗り越えてきたあの二人が、遺跡の罠程度に時間を取られるとは思えない。
それこそ、強力な『ゴーレム』でもいれば話は別だろうが、あんな鉄の塊が内部で暴れていれば、その騒音が自分の耳にも届いているはずだ。だが遺跡に入って以降、それらしき音は一切聴こえて来ない。
これらの理由から、アルフレッドには全く見当が付かなくなった。今この遺跡の中で、一体何が起きているというのか？

（……いや、待てよ。例え何かが起きてたとしても、この遺跡の中、妙に静か過ぎやしねぇか？）
不気味な程に静まり返った遺跡内。仮にレオンやリズベットたちがこの中にいるとすれば、多少なり何かしらの反響音が聴こえて来てもいいはずだ。
だがそれが無い。
音が一切聴こえない。
まるでこの中には、アルフレッド以外の人間が存在していないかのように。
「……」
言い知れぬ不気味さが、今更のように胸を締め付け、アルフレッドは思わず黙り込んでしまう。
どれ位そうしていただろうか。その場に石像のように佇んでいたアルフレッドは、不意にある事に気付く。
それは、ついさっきまで一切聴こえて来なかったはずの、反響音。
何者かが、通路の奥からこちらへ近付いてくる、足音。
地面の細かな砂利を踏み締めながら、足音はゆっくりとアルフレッドの方へ近付いてくる。
アルフレッドは咄嗟に、腰のベルトに提げていた二本の短剣を、両手で握って構えを取った。
握られた短剣は、何の変哲もない片刃のダガー。戦闘の状況に応じて様々な武器を使いこなすアルフレッドが、常に持ち歩いている物の一つだ。
そのダガーを握り締め、薄暗闇の向こうから、足音の主が現れるのをジッと待つ。
そうして、数秒が経った頃だった。
アルフレッドは、現れた足音の主を眼にして、驚きの余り構えていたダガーを落としそうになる。
「レ……、レオン……！」

ゆっくりとした足取りで姿を現したのは、アルフレッドが探し求めていた人物。
長い間眼を背け、取り戻そうとしなかったかつての友。
レオン・マーガスト。
それが、足音の主の正体だった。

Ａｃｔ．４　近付く者（後書き）

という訳で、三ヵ月ぶりの更新です（汗）
どんだけ長い間放ったらかしにしてんだと思われるでしょうが、どうにか更新は続けていくつもりです。

それから一話前辺りの後書きで、アルフレッドの話は四話か五話構成になると書きましたが、もしかしたら少し長くなるかも知れません。
話全体の構成を考え直した所、当初考えていた物に色々な追加要素が入ってしまったが故の結果です。
順調にうｐ出来るかどうかはわかりませんが、頑張って執筆していきます。

Ａｃｔ．５　魔の巣窟

深い深い闇の奥。
遺跡の最深部の片隅に、『その者』はいた。
人の手を加えられず、永い永い時を経たが故に、朽ち果てて地面に倒れてしまった、鎧を纏った人間を模った銅像。その銅像をまるで踏み付けにするかの如く、自らの椅子代りに使っている『その者』は、とある気配を感じ取って、ふと虚空を見上げる。
「……へぇ、また誰かこの中に紛れ込んだのか。それなら、ちゃんと歓迎してあげなきゃいけないね」
独り言を呟き、口許に緩い笑みを湛えつつ、『その者』はゆっくりと腰を上げる。
どうやら獲物（おきゃくじん）は、すぐ近くまで来ているようだ。

◆　◆　◆

額の右側に、二匹の蛇が絡み付いた形の特徴的な赤褐色の刺青を入れた、アルフレッドと同年代の青年。
頭髪は右側が長く、左側は短いという左右非対称の変わった髪型をしており、青年が歩を進める度に、長い方の煉瓦色の髪が微かに揺れる。
と、ゆっくりとアルフレッドとの距離を詰めた青年は、数メートル程の間を開けて立ち止まった。
長い間会っていなかったとはいえ、見間違うはずがない。
その風貌も雰囲気も、最後に会った時のままだ。

こんな形で再会する事など想像していなかったが、アルフレッドはついにかつての仲間、レオン・マーガストと巡り会う事となったのだ。
「お前、無事だったのか！」
まず何よりも先に、レオンが無事だったという思いが口を突いて出た。そしてアルフレッドは、思わずレオンの許へ歩み寄りそうになる。
だが、安堵したのも束の間だった。
「……」
声を掛けたにも拘らず、レオンから反応が返って来ない。彼はただ無言を貫き、俯き加減でピクリとも動かない。
そこでアルフレッドは、今更のようにハッとする。
今の自分は、彼と容易く口を利けるような人間じゃない。そもそもこうしてここにいる事自体、責められても文句を言えない立場なのだ。
レオンに近付いてしまいそうになる足を何とか踏み止め、アルフレッドは重たい口を開く。
「その……、久しぶりだな。元気だったか？」
「……」
「ああ、何で俺がここにいるかって言やあ、『ケルフィオン』の『ギルド』で、お前とリズが働いてる事をクルスさんに聞いたからだ。……本当に今更な事だが、『あの時』の事をお前やリズに謝ろうと思ってな。俺が無理矢理、クルスさんにお前たちの居場所を問い質した」
「……」
「そう簡単に許してもらおうなんて甘い考えで、今ここに立ってるつもりはねぇ。ただ、話だけでも聞いてくれねぇか？」
「……」
「？　……レオン？」
ここに至って、アルフレッドは漸く違和感を覚え始めた。

レオンの様子がおかしい。さっきから一言も口にしないどころか、身動き一つ取ろうとしない。
そもそもなぜ彼は、自分に対して罵声の一つも浴びせる素振りがないのだろう？　彼らとの酷い別れ方から考えれば、それは至極当然な事のはずなのに。
仮に自分の事を無視しているのだとしたら、わざわざ立ち止まる必要など無い。最初から話など聞かず、さっさとここを立ち去ればいいだけの話だ。
いや、それ以前に――。
「……おい、リズや仕事の依頼人たちはどこだ？」
「……」
若干語気を強めて問い掛けたにも拘らず、尚も沈黙という答え。
その行為自体が、アルフレッドにある結論を齎した。
今、自分の眼の前に立っているのは、レオンであってレオンじゃない。明らかに、不気味な雰囲気を放つ別の人間へと変貌している、と。
「答えろレオン！　一体何が――」
あったんだ、と問い掛け終わる前に、事態は突然動き始める。
暗がりからゆっくりと歩み出し、全身を明るみに晒すレオン。その彼が力無くぶら下げた右手には、ロングソードが握られている。
彼の脛の辺りまで伸びた刀身に、ベッタリと血が付いたロングソードが。
「なっ……！？」
思わず声を詰まらせたアルフレッドが、数歩後退りをしたその瞬間だった。
「ァァ……、アガァァァァァッ！」
まるで怒り狂った獣のような、人間の物とは思えない叫び声を上げ、レオンは右手に持っていたロングソードを振り上げ、猛然とア

ルフレッドに襲い掛かってきた。
突然の事に驚きつつも、アルフレッドは反撃ではなく回避を選ぶ。
「止めろレオン！　一体どうしたってんだ！？」
アルフレッドが必死に呼び掛けても、レオンは反応を示さない。
それどころか、気でも狂ったように剣を振り回し、会話しようとする気配すら感じさせない。本当に獣になってしまったかのようだ。
（どうなってやがる……！？　別人なんてものじゃねぇ。まるで何かに操られてるみてぇな――）
闇雲に振るわれる剣線を躱しつつ、そう思い至った瞬間、アルフレッドはある可能性に辿り着いた。
他者を人形のように操る。そんな、普通ではあり得ない現象を引き起こせる技術。
人を生かさず、また活かさない、殺傷に特化した最悪の技術。
そんなものはこの世界において、一つしか考えられない。
「まさか、『魔術』か！？」
叫びつつ、レオンが大きく振りかぶって放った斬撃を、アルフレッドは後方に大きく飛び退いて躱した。
仮に自分の考えている通りだとしたら、本当に最悪な状況だ。
アルフレッドは『魔術』に関する深い知識は持っていないが、仕事柄、悪行を企む『魔術師』と交戦した事は幾度かある。その際、人や物を自由に操る『魔術師』も確かに存在した。
経験がある以上、術を発動している『魔術師』が近くにいるであろう事も、予想する事は出来る。

だがアルフレッドには、その『魔術師』に対抗し得る術がない。
『魔術』を使える者と使えない者の間には、致命的とも言える程の力量の差がある。それは『ギルド』で働く人間にとって、常識となっている事実だ。
だからこそギルドメンバーたちの中には、キチンと『魔術師』対

策を練っている者も多い。
常に五人一組のチームで行動し、充分な武装強化を施した戦力で、一気に押し切ろうとする者。
『ゴーレム』狩りで手に入れた『導力石』を用いて、『魔術』を封じ込める策を講じる者。
そしてもう一つ。これはギルドメンバーにおいてかなりの少数派だが、『魔剣』を使用する者だ。
『魔剣』を使用する者が少数となってしまうのは、『魔剣』その物の数が希少な上、製造に年単位での時間が掛かり、尚且つ必ず出来上がるという保証がないからだ。
その問題点がある為に、ギルドメンバーの中で『魔剣』を持つ者は少ない。『魔剣』所有者としてアルフレッドが知っているのは、以前共に働いた事のあるジン・ハートラーくらいのものだ。
（仮に今起きてる現象が『魔術師』によるものだとしたら、そいつはこの遺跡の中にいる可能性が高い。――まさか、リズベットがここにいない理由は……！）
最悪の事態を想像してしまったアルフレッドは、回避に専念していた両足を一瞬止めてしまう。
その一瞬を、暴れ回るレオンは見逃さなかった。
大きく振りかぶったロングソードを、容赦無くアルフレッドに振り下ろす。
以前、彼らの間に確かにあったはずの絆を、粉々に打ち砕くかのように。
「くっ！」
だがアルフレッドは、どうにかその一撃を防ぐ事が出来た。両手に握ったダガーを交差させるように構え、レオンの斬撃を正面から受け止める。
ギシギシと刀身を軋ませながら、アルフレッドは鍔迫り合いの状態でレオンと睨み合う。
「眼を覚ませレオン！　お前は俺なんかと違って、簡単に自分を見

失ったりするような人間じゃねぇだろ！」
「……」
レオンは答えない。虚ろな瞳でただ闇雲に剣を振るい、アルフレッドに牙を剥く。
まるで本当に、操り人形と化してしまったかのように。
（こうなったら仕方がねぇ。『魔術』で操られていようがいまいが、意識を奪っちまえばとりあえずこの場は治められる！）
意を決したアルフレッドは、まず鍔迫り合いの状態を脱しようと、全身に力を込め始める。
狙うは短期決戦。レオンの剣を押し返して距離を取り、懐に忍ばせてある閃光弾を使って視界を遮る。そして彼に再び近付いて、首筋などの急所を殴る事で意識を奪う。相手が人間である以上、物理的な攻撃は有効なはずだ。
瞬時に判断をつけ、すぐさまアルフレッドが行動に移そうとした、まさにその時だった。

「ハイ、そこまでだ」

突然レオンの後ろから男らしき声が聴こえ、アルフレッドは眉を顰める。
と、次の瞬間。鍔迫り合いの状態で剣に並々ならぬ力を込めていたはずのレオンが、自分から剣を弾いて後方に跳び、アルフレッドと距離を取った。
そこでアルフレッドは、思わず眼を瞬かせる。自分の視界の中に、レオンとは別の人物が現れたからだ。
容姿から男だとわかる眼の前の人物は、周りの薄暗さに溶け込むかのように、全身を黒一色に染めている。
短く切り揃えられ、清潔さの保たれた黒髪。
死神を思わせるかのような黒いマント。
が、唯一肌の色だけは、女性と見間違う程に色白い。

顔立ちにはどこか気品のようなものが溢れるその男は、レオンを一瞥してから、アルフレッドに向けて言い放つ。
「驚かせて悪かったね。ようこそ、来訪者さん。え～っと……、キミで一体何人目になるんだっけ……」
場違いな優しい頬笑みを見せながら、男は最後の方でブツブツと何かを呟いている。
アルフレッドは両手のダガーを仕舞う事無く、内心で身構えつつ問い掛けた。
「てめぇ……、一体何者だ？」
警戒心全開で尋ねられている事を自覚しているのか、男は優しい頬笑みを一変させ、邪悪な笑みをその顔に湛えた。
口角を軽く引き上げ、まるで獲物を品定めするかのような眼でアルフレッドの姿を捉えつつ、男はどこか愉快げに口を開く。
「ボクの名はハロルド・ベイワーク。――ああ、別に覚える必要はないよ。どうせすぐに何も考えられなくなるんだから」

Ａｃｔ．５　魔の巣窟（後書き）

書いてる自分が言うのもなんですが、今回のお話、若干展開がスローペースな気がしますｗ
外伝は本編の方よりも文字数を削ろうとしている面があるので、その分どうしても話数が増えてしまいますね。
う～ん、アルフレッドの話、あと何話で終わるんだろう？ｗ

Ａｃｔ．６　絶望を齎す征服者

薄暗く、暖かい陽の光が差さない場所。
外界から隔離され、少しひんやりとした空気が辺りを包む、四角く区切られた空間。
その片隅に、とある女性がいた。
艶のある真っ直ぐな菖蒲(あやめ)色の髪を、肩の辺りまで伸ばし、白を基調とした細身のローブに身を包んだ、二十代中頃の女性。
世間一般で言えば、間違いなく美人と呼ばれるはずの色白く端正な顔立ちは、しかし今、苦悶の表情を浮かべていた。
その女性は、空間内にある朽ちて倒れた石像の陰に、たった一人で蹲っている。
何かから逃れようとするかのように。
何かから隠れようとするかのように。
彼女の名は、リズベット・レイクシュオール。
かつてレオンと共に、アルフレッドとチームを組んでいたギルドメンバーだ。
一体どうしてこんな事になったのか。自分はただいつも通りに、レオンと共に『ギルド』で仕事を請け負って、仕事の依頼人に会い、この遺跡までやって来ただけだと言うのに……。
事の発端は『あの男』。
依頼人と共に遺跡内を調べていた時に、突然現れた『あの男』が、全てを狂わせてしまったのだ。
男の正体は『魔術師』だった。
邪悪な笑みを湛えつつ、男が口にした呪文のような言葉。それに呼応するかのように、異変は突如として起こった。

最初におかしくなったのは、依頼人である学者の一人だった。
その学者は『魔術師』の男に命じられるまま、レオンに襲い掛かり、リズベットを逃がそうとした彼は、『魔術師』の餌食になってしまった。
文字通り、操り人形となる形で。
そしてそこからが、悪夢の連続だった。
『魔術師』に操られ、乱心したように剣を振るうレオンは、残る二人の依頼人を持っていたロングソードで斬り付け、あろう事か逃がそうとしていたはずのリズベットにまで、その矛先を向けてきた。
最悪の状況の中、『魔術師』は嘲笑うかのような高笑いを上げつつ、さらにリズベットを追い込む行動を取る。
信じられなかった。
まさに悪夢としか言えなかった。

なぜならそう、操られていたのはレオンたちだけでは無かったのだ。

逃げようとするリズベットを取り囲んだのは、見知らぬ数人の人間。その姿から恐らく、遺跡近郊を通り掛かった旅人や、ここを根城にしていたチンピラたちだろう。
その全員が、リズベットを悉く、容赦無く痛め付けた。
男だけでなく女もいた。
だが何人いたのかまでは思い出せない。何をどうされたのかも思い出せない。
……いや、違う。彼女は思い出したくないのだ。
この現実を受け入れたくない。
これが現実だと認識したくない。
そんな思いが胸の内に溢れ返り、彼女は思い出す事を拒絶していた。
自分はもう駄目なのだろうと、リズベットは無意識に自覚する。

大人数からたった一人で痛め付けられた事による恐怖と、レオンが操り人形になってしまった事への悲壮感。さらには肉体的、精神的に蓄積された二つの疲労が彼女の身体を蝕み、一歩足りとも動けなくなっていた。その上薄暗い遺跡の中に長くいた事で、時間の感覚など疾(とう)の昔に狂っている。

きっと助けは来ないだろう。

救いが訪れる事は無いだろう。

全てを諦め、ほんの少し前まで戦士だったはずの女は、ゆっくりと瞼を閉じる。

この瞬間、リズベット・レイクシュオールは敗北した。

絶望と言う名の、自らの心の闇に。

◆

◆

◆

「……ベイワーク、だと？」

突如として現れ、レオンを操り人形のように従える男。ハロルドと名乗るその男が口走ったセカンドネームに、アルフレッドは何か聞き覚えがある気がした。

そう、あれは確か、自分が大陸のあちこちを転々としていた頃。『首都・テルノアリス』から北の方角にある広大な森林地帯、『ゴルムダル大森林』近郊にて耳にした出来事。

流れの『魔術師』が森林地帯において、通り掛かった旅人を次々に襲っていたという事件。

もちろん当事者ではないアルフレッドは、事件の詳しい内容を知らない。故にその事件を解決させたのが、あの紅い髪の少年だとは知る由も無いだろう。

ともかく、その時挙がっていた犯人とされる『魔術師』が、確か『リシド・ベイワーク』と呼ばれていたはずだと、アルフレッドは記憶している。
「あれぇ、おかしいな。キミはボクと初対面のはずだろ？　ボクの名前に心当たりでもあるのかい？」
アルフレッドが口にした疑問の声に対し、ハロルドは不思議そうに首を傾げた。
両手に握るダガーに込める力を若干弱めつつ、アルフレッドはレオンの様子を一瞥してから、その問いに答える。
「てめぇ個人にって訳じゃねぇ。前に『ゴルムダル大森林』っつー森林地帯の近くで、てめぇと似た名前を聞いた覚えがあったからな」
試しにと思って口にしたその言葉で、ハロルドは眼を瞬かせた。どうやらアルフレッドからその情報が出て来るとは、夢にも思っていなかったらしい。
が、ハロルドはすぐに表情を平淡な物に変え、平然とした様子で口を開く。
「……ああ、キミが聞いたって言うそれ、多分ボクの兄貴の事だと思うよ」
「兄貴？」
セカンドネームが同じという時点で大体予想は付いていたが、アルフレッドは思わず聞き返してしまっていた。
それに応じるかのように、ハロルドは言葉を続ける。
聞いている側が虚しくなってしまうような、どこまでも冷たい口調で。
「リシド・ベイワーク。それがボクの兄貴の名前だよ。――それにしても、まさか兄貴の事を知ってる人間に会うなんて、いやはや世間ってのは狭いもんだねぇ」
「……あまり悲しんでるようには見えねぇな、てめぇ」
「は？」
「確かそのリシドって奴、死んでるはずだろ？」

眼を丸くし、本気で驚いているような表情のハロルドに向けて、アルフレッドは事実を口にする。
アルフレッドが聞いた話では、リシド・ベイワークなる人物は『ゴルムダル大森林』において、既に死亡が確認されているという事だった。詳しい状況まではさすがにわからないが、それは間違いない。
だが眼の前のこの男。ハロルドと言うこの男の態度は、明らかに不自然だ。
この男は今確実に、自分の兄の死を知っているにも拘らず、何の興味も関心も示していなかった。
まるで、その男は赤の他人だから関係無い、と言い張っているかのように。
「自分の兄貴が死んでるってのに、随分冷静なんだな」
「ハッ。ハハッ、何？　もしかして悲しんでほしかった？　ヤダなぁ、止めてくれよそういう期待抱くの。鬱陶しいだけだって」
若干語気を荒くして話すアルフレッドに対し、ハロルドは心底うんざりした様子で、溜め息混じりに顔を逸らした。
「確かに『あいつ』はボクの兄貴だけど、だから何な訳？　あんな出来損ない、生きてようが死んでようがどうでもいいよ。大した才能もないくせに『魔術師』を気取ってる、救いようのないバカなんだから」
「……！」
「兄貴の名前を知ってるって事は、キミも大体の話は聞いてると思うけど、あいつはねぇ、自分の『魔術』の制御に失敗して、呆気なく絶命したんだ。バカバカしくて笑えるだろ？　噂じゃあ通りすがりの『魔術師』にコテンパンにされたらしいし……、ホント見事なまでの無能っぷりだよねぇ」
まるで話を聞いているアルフレッドに同意を求めるかのように、ハロルドは苦笑しながら話す。
その様子を、アルフレッドはただ黙って見つめていた。

正直な所、リシドと言う人間に対して、同情心のようなものを感じずにはいられない。実の弟であるはずのハロルドに、ここまで好き放題に言われるばかりか、悲しんですらもらえないなんて……。
話に聞いた限りでは、リシドと言う男もまた、決して褒められるような人間では無かった事は確かだ。しかしだからと言って、ここまで無下に扱われるのが正しい事だとは思えない。
現に今、アルフレッドは怒りを感じている。
まるで自分の知り合いを貶されているかのような、不愉快な腹立たしさを。
「最低のクソ野郎だな、てめぇは」
「！」
気付けばアルフレッドは、そんな風に口を開いていた。自分でも驚く程に、冷徹な声で。
もちろん、そんな言葉を浴びせられれば、大抵の人間は憤りを感じるだろう。
現にハロルドは笑みをスッと消し、眉間に皺を寄せつつ告げる。
「……何だって？　よく聴こえなかったから、もう一度言ってくれないか？」
「てめぇは最低のクソ野郎だ、っつったんだよ。てめぇの兄貴の事なんざほとんど知らねぇし興味もねぇが、これだけは言える」
一旦間を置き、ダガーを握ったままの右手の人差し指で、アルフレッドはハロルドの方を差し、力強く言い放つ。
「やってる事に関して言やぁ、てめぇも兄貴と大差ねぇんだよクソ野郎」
指を差したまま、無表情でハロルドを見つめ続けるアルフレッド。
またハロルドの方も、しばらく何の反応も見せず沈黙し、両者の間で数秒の時間が流れた。
が、その均衡は、突如として破れる。

「――ハッ！　ハハハッ！　ハハハハハハハハッ！　アハハハハハハハハハハハハハッ！」
アルフレッドの言葉に何を思ったのか、気が狂ったように笑い出すハロルド。
ところが次の瞬間――。
「ふッざけんなゴミカスがぁぁぁぁぁぁぁッ！！」
ほんの一瞬で言葉使いと表情を一変させたハロルドは、右腕を乱暴に真横に払う。
するとその瞬間、今まで静まり返っていたはずのレオンが動き出し、血の付いたロングソードで再びアルフレッドに斬り掛かってきた。
（チィ！　あの野郎、またレオンを……！）
先程の右腕を払う動作が合図だったのか、レオンはまたもや操り人形と化してしまう。
歯噛みしつつ回避を選ぶアルフレッドを嘲笑うかのように、激昂した様子のハロルドが叫ぶ。
「調子に乗ってんじゃねぇぞ！　テメェ如きゴミカスなんざ、その気になりゃあ簡単に始末出来るんだよ！　俺様は偉大な『魔術師』なんだからなぁッ！」
「ハンッ。自分で言ってりゃ世話ねぇよ」
ハロルドの言葉を軽く受け流しつつ、アルフレッドは不敵に笑ってみせる。
例え同じ『魔術師』ではあっても、眼の前の男とあの紅い髪の少年とでは、天と地程の差がある。それが理解出来たからこそ、アルフレッドには笑みを零せる余裕があった。
（『アイツ』は自分の事を、この男みてぇに図々しく誇ったりしねぇ。どんなに強大な力を持っていようが、それを過信して力に溺れるなんて事をしねぇんだ。……ま、その余裕ぶってる所が癪に障るんだがな）
内心で悪態を吐きつつも、アルフレッドは暗い気分になりはしな

かった。それはきっと、あの紅い髪の少年の事を認めているからに他ならない。
生意気で、ムカつく年下のガキ。
だがそう思うと同時に、彼の行動力を尊敬している自分がいる。
だからこそあの少年には負けられない。
いや、負けたくないのだ。
例え今が、どんなに困難な状況だったとしても、レオンとリズベットを取り戻す為に、アルフレッドは決して諦めない。
「悪ぃがてめぇの人形遊び、邪魔させてもらうぜ！　ハロルド・ベイワーク！」

Ａｃｔ．６　絶望を齎す征服者（後書き）

なぜかリシドの弟登場！ｗ
という訳で、いよいよアルフレッド編も第六話に入ってしまいました。
が、未だに終わる気配がありませんｗｗ
それにしても、よくもまぁ今更リシドの弟出そうなんて思い付いたモンだ。
『魔女の森編』では完全に噛ませ犬キャラ（笑）だったリシドくんに、まさか弟がいるなんて作者もビックリ！ｗ
いや、うん、もちろん冗談ですよ？

しかしながら、今回の外伝は結構長引きそうです。
一応もう結末までは考えてあるんですが、前話の後書きで書いた通り、本編と違って文字数をかなり抑えてあるので、あと何話続くかわかりません。
ですので、まぁ気長に更新を待ってもらえればと思います、ハイ。

……って言うか、はよ本編の方も更新せんとなｗ

Ａｃｔ．７　戦士への報酬

回避を選び続けていたアルフレッドは、ついに攻撃へと転じる為に動き出す。

「このゴミカスがぁ……ッ！　俺様の『魔術』が人形遊びだと！？」

レオンを操りながらアルフレッドに攻撃を仕掛けながら、ハロルドは怒りの声を上げる。

だが一貫して、アルフレッドは冷静さを保っていた。

レオンからの攻撃を両手のダガーで受け流しつつ、微かに笑みを含んで口を開く。

「違うってのか？　てめぇの『魔術』の仕組みはさっぱりわからねぇが、実際てめぇは人を操って、自分の手を汚さねぇようにしてるだけだろうが。にも拘らず、その程度の事で王様気分に浸るなんざ、『魔術師』の真似事して遊んでるようにしか見えねぇんだよ」

「！　クッ、ソがぁ……！」

アルフレッドの辛辣な言葉が完全に頭に来たのだろう。ハロルドは怒りに満ちていた表情をより一層険しくし、右腕を高々と掲げながら大声で叫ぶ。

「そんなに死にてぇなら望み通りにしてやるよ！　調子付いたゴミカス野郎が！！」

異変が起きたのは、その直後だった。

丁度ハロルドの背後。遺跡の奥へと続いているはずの通路の先から、複数の足音が聴こえてきた。

まるで兵士が隊列を組んで行進して来ているかのような、ザッザッザッという規則正しい足音。今のこの状況では、それが返って不気味さを醸し出している。

「俺様の『魔術』が人を操るものだってわかるなら、『こうなる事』も理解出来てんじゃねぇか？　えぇ？」

そう言って、ハロルドが邪悪な笑みを見せた時だった。足音が止み、絶望の象徴たる操り人形たちが、アルフレッドの視界に映り込む。

薄暗闇の中から現れたのは、見知らぬ人間ばかり。

一目で旅人だとわかる服装をした男や女。その辺のチンピラらしき、派手さやガラの悪さに重点を置いた服装の男。そして、恐らく考古学者か探検家らしき、機能性を重視した軽めの服装に、眼鏡を掛けた男。

数は全部で十人程。皆一様に、虚ろな瞳でアルフレッドの方を見つめている。

（おいおい、こいつら全員操られてやがんのかよ！？　――って、ちょっと待て）

大人数に取り囲まれそうになっているにも拘らず、アルフレッドの思考は別の所へと逸れていた。

眼の前の光景の中に足りないものがある、と。

そう、アルフレッドは気付いたのだ。

自分を取り囲もうとしている操り人形たち。その面子の中に、リズベットの姿が無い事に。

（あいつの姿だけが無いって事は……、まさか……！）

この瞬間、アルフレッドの脳裏には二つの可能性が浮かんだ。

一つは絶望。彼女が既に死んでいるという可能性。

だがもう一つは、希望。彼女は生きて、遺跡の奥で助けを待っているという可能性。

後者であってほしいという、心からの願いを胸に、アルフレッドは前進する決心を固めた。

前へ進むしかない。

そして信じるのだ。

リズベット・レイクシュオールもまた、自分と同じように戦っているという事を。

（悪ぃな、レオン。ちょっと痛ぇだろうが我慢してくれ！）

胸の内で叫びつつ、アルフレッドは相対していたレオンの腹の中心に、右足で思い切り蹴りを叩き込んだ。
くの字に折れ曲がって後ろへと倒れ込む友人の姿を見つつ、アルフレッドは右手のダガーを左脇に挟み、懐からある物を取り出した。
それは手榴弾型の閃光弾。十センチメートル程の長さで、黒く細長い筒状の形をしている。
アルフレッドは右手の親指で、上部にある鉄の留め金を器用に外すと、手から滑り落とす形で、それを地面に落下させた。
着地の瞬間、辺りに激しい閃光が撒き散らされ、周囲にいる者の視界を真っ白に染め上げる。
「な……ッ、閃光弾だと！？」
思わぬ攻撃に驚いたのか、ハロルドがどこか悔しげな声を上げる。
もちろんアルフレッドは眼を庇っていた為、閃光に眼が眩む事は無い。
眼潰しによってまともに動けなくなった操り人形たちの間を、縫うように走り抜けながら遺跡の奥へと進む。
「くっそ……！　舐めた真似してくれるじゃねぇかゴミカスがぁーーーッ！」
背後で苛立ったような声をハロルドが上げるが、アルフレッドは気にしない。
今はただ、走り続ける事の方が先決だった。
リズベットの安否を、この眼で確かめる為に。

◆　◆　◆

ハロルドと操り人形の群れから逃れ、走る事数分。アルフレッド

は漸くといった思いで、遺跡の最深部へと辿り着いた。
　操られていたとはいえ、レオンをあのままにして来た事に若干の心苦しさを覚えつつ、しかしアルフレッドは、どうにか頭を切り替える。
（あの『魔術師』に操られてねぇって事は、リズは必ずこの遺跡の中にいるはずだ）
　例え、彼女が死体となって冷たい地面の上に横たわっているとしても、その可能性だけは揺るがない。もちろんアルフレッドだって諦めたつもりは無いが、それでも一抹の不安は過ってしまう。
　だがのんびりもしていられない。いつハロルドが操り人形たちを従えて、ここへやって来るかもわからないのだ。
　数分先か、或いは数秒先か。いずれにしろ、リズベットを探したいのなら、すぐに行動に移らなければならないだろう。
「……とはいえ、どうしたモンか」
　言いつつ、アルフレッドは困り果てた顔で、意味も無く自分の周囲を見回してみる。
　辿り着いた大広間のような場所は、長い年月の間手付かずだった為か荒れ果ててはいるが、それでも貴族たちが行なうような舞踏会なら、問題無く開けそうな程の広さがある。
　全体像としては、四角く区切られている空間。それにアルフレッドが進んできた通路の他に、三本の通路がぽっかりと穴を開けている。最初に見た四本の通路は、どうやら全てがここに繋がっているらしい。
　アルフレッドは背後を気にしつつも、とりあえず大広間の奥にある巨大な台座の傍まで歩み寄った。
　台座の高さは大体三メートル程。その台座を上り切った壁の部分は壁画になっていて、何かしらの戦いの様子が描かれている。が、砂埃によって酷く汚れている為、どういう戦いの状況を描いているのか、詳しく読み取る事が出来ない。
「完全に行き止まり、だよな……」

古の壁画を見つめ、アルフレッドは溜め息混じりに呟く。
先へ進む道がない以上、ここが遺跡の最深部なのは間違いない。だが自分が今立っている大広間はもちろん、走り抜けてきた通路にさえ、リズベットの姿は見当たらなかった。
となると彼女は、残る三つの通路のどこかにいる、という事になるのだろうか？
もう一度、今度は別の道を使って引き返してみるか……と、アルフレッドが背後を振り向いた時だった。
「――！」
ほんの微かにだが、自分の頬を何かが掠めた気がした。
柔らかい、ほんのりと心地良さを感じさせるもの。
ここが屋外であったなら、流れて来る事に何の違和感も湧かないもの。
そう、今のは間違いなく――。
「風……？　だが、一体どっから……」
不思議に思いつつ、アルフレッドはもう一度、台座の周辺を遠巻きに見つめてみた。すると確かに、どこかから風が流れて来ている。どうやら風の元は、この台座の上の方にあるようだ。
注意深く気を配っていないと、感じ取る事すら出来ない程の微弱な風。
その風を頼りに、アルフレッドは台座の最上部を目指して、足早に石段を昇り始める。そして壁画のすぐ傍まで近付いた所で、アルフレッドは漸くその風の発生源を突き止めた。
台座の最上部の床と壁画が繋がっている部分に、人一人が辛うじて通れる程の小さな隙間がある。周りの薄暗さに溶け込んでいる為、じっくり観察しないと、恐らく簡単に見落としてしまうだろう。
「そういやぁ、『アイツ』と一緒に閉じ込められた『グレッグス鉱山』でも、確か似たような事があったっけな」
大嫌いな紅い髪の少年の顔を思い出しつつ、アルフレッドは苦笑する。

あの時と状況が似ている為、アルフレッドは容易に結論付ける事が出来た。
恐らくこの壁の向こうに隠された部屋がある、と。
そしてそれだけでは無い。
もしこの隠し部屋の存在に、あのハロルドと言う男が気付いていなかったとしたら。それに気付いたリズベットが、この中に身を潜ませているとしたら。彼女の姿だけが見当たらなかった事にも、充分納得がいく。
「……とりあえず調べてみるか。いるにしろいねぇにしろ、ここでジッとしてる訳にもいかねぇしな」
適当に考えをまとめ、アルフレッドは隙間の中へと潜り込む。
未知なる空間に足を踏み込む事に対する恐怖など、微塵も感じられなかった。

◆　◆　◆

結果的に、アルフレッドの予想は当たっていた。
狭い隙間を通り抜け、転げ落ちるかのようにどうにか入り込んだ空間は、さっきの大広間よりも格段に狭い、一般的な宿の一室くらいの広さしかなかった。
その片隅に、彼女はいた。内部が薄暗いとはいえ、見間違うはずもない。それ程までに、アルフレッドは渇望していたのだ。
彼女、リズベット・レイクシュオールとの再会を。
「リズベット！？」
暗がりの中にいた、どこか弱々しく見える姿のリズベットは、慌てて駆け寄るアルフレッドの声に、一度では反応を示さなかった。

彼女は罅割れの激しい壁に背を預け、浅く呼吸を繰り返している。
様子がおかしい事は、すぐにわかった。
「しっかりしろリズベット！　聴こえてるか！？　おい！」
リズベットの身体を優しく抱き起こし、アルフレッドは再度声を掛ける。
すると今度は、どうにか反応が返ってきた。
「アル……フレッド？　どうして、あなたがここに……」
ゆっくりと瞬きするリズベットは、弱々しくもかなり驚いた様子で、アルフレッドの顔を覗き込むように呟いた。
「今はそんな事どうでもいいだろうが！　お前これ、怪我してんだろ！　あの野郎に……、ハロルド・ベイワークにやられたのか！？」
薄暗い中、それでも眼を凝らしてリズベットの身体を見ると、白いローブの隙間から露出している彼女の身体は、擦り傷や打撲傷などが何カ所にも亘って見受けられた。しかも、白いローブと辛うじて認識出来たものの、リズベットの服はあちこちが破れたり裂けたりしていて、とてもみすぼらしい格好だった。
あまり想像したくは無いが、それでもアルフレッドは考えてしまう。
操り人形と化したレオンや、その他の人間。操られている者の中には女もいたが、それでも割合的には男の方が多かった。
その者たち全員が、ハロルドの思うままに動かせると言うのなら――。
「お前、もしかして……」
最悪の展開を想像してしまい、思わず口籠るアルフレッド。もしかしたら今、男の自分が傍にいるだけで、リズベットに耐え難い苦痛を与えてしまっているのではないだろうか。
だがリズベットは、そんなアルフレッドの考えを否定するように、ゆっくりと首を横に振った。
「……大、丈夫。アルフレッドが想像してるような事は、されてないから」

そう言って微笑むリズベットを見て、アルフレッドはただ黙り込む事しか出来なかった。
例えアルフレッドが想像したような事が無かったとしても、『大丈夫』などと言えるはずが無い。
どれだけ恐ろしかっただろう。
どれだけ苦しかっただろう。
この隠し部屋に自力で逃げ込むまでの間、きっとリズベットは、たった一人で戦い続けていたのだ。
それこそアルフレッドには想像もつかないような、恐怖と苦痛に晒されながら。
「もう心配する事はねぇ。俺が必ず、お前とレオンを助け出してやる」
まるで自分自身を鼓舞するかのように、アルフレッドは強い口調でリズベットに告げる。
と、その時だった。

『どこに行きやがったゴミカスがぁっ！』

盛大な叫び声が遺跡内に反響し、大広間の壁を通り越して、隠し部屋の中にまで響いてきた。
明らかに激怒しているらしい、聞き覚えのある男の声。恐らく壁一枚を隔てた向こう側には、操り人形たちを引き連れたハロルドが待ち構えているに違いない。
「チッ、あの野郎……もう追い付いて来やがったか」
予想よりも早い追い討ちに、アルフレッドは顔を顰める。
忌々しい事この上無いが、閃光弾による足止めだけでは、大した時間稼ぎにはならなかったという事なのだろう。
（どうする……。閃光弾を使った眼眩ましなんざ、そう何度も通用するモンじゃねぇ。だがここから安全に脱出する為には、是が非でもあの野郎を倒す必要がある。せめて何か、相手との戦力差を埋め

られるような武器があれば……）
思案しつつ、アルフレッドは何気無く隠し部屋の内部を見回してみる。
と、部屋の奥の方に眼を向けた所で、アルフレッドはある物を発見した。
「……？　あれは……」
部屋の奥にある物体を訝しく見つめながら、アルフレッドはゆっくりと歩き出し、その物体を完全に視界の中に捉える。
見つけた物体は、地面に突き刺さった一本の剣だった。
片刃の刀身に護拳が付いた、刃渡り一メートル程の剣。分類としてはサーベルになるのかも知れないが、刀身は曲線を描く事無く真っ直ぐに伸びている。
さらに眼を引くのは、刀身の根本にある黄金色（こがねいろ）の宝玉だ。近付く事で初めて気付いたが、宝玉は淡く明滅を繰り返している。
何だか不思議な雰囲気のある剣だと、アルフレッドは感じた。
「……他に武器になりそうなモンは見当たらねぇし、剣一本でもねぇよりはマシか」
即座に判断を下したアルフレッドは、剣の柄に手を掛け、それを一気に引き抜く。そしてそのまま、リズベットの方へと引き返し、彼女の傍らに屈み込んだ。
「リズ、お前はここに隠れてろ。俺が迎えに来るまで、絶対外に出るんじゃねぇぞ。いいな？」
砂で汚れたリズベットの頬を親指で優しく拭い、アルフレッドは静かに立ち上がる。
すると、リズベットはアルフレッドを見上げ、眼を丸くしながら弱々しく呟く。
「一人で……、どうする気、なの……？」
「決まってんだろ。この騒動を終わらせんのさ」
リズベットに悪戯っぽく笑い掛け、彼女から視線を外したアルフレッドは、すぐに真剣な顔付きになった。

やるべき事は既に決まっている。
彼女が、リズベットが見つかったからと言って、誰が気を緩められると言うのか。
安心していい訳が無い。
安心出来る訳が無い。
レオンだけでなく、リズベットまでこんな眼に遭わせたあのクソ野郎を、許す事など出来はしない。それこそ、天地がひっくり返ったとしても到底無理な話だ。
報いを受けさせるべきなのだ。
例えあの男の命を、この手で奪う事になろうとも。

「幕を引いてやるよ。この最低でくだらねぇ、独り善がりの人形劇にな！」

小声で呟いたその言葉は、声の大きさに反して、凄まじいまでの闘気を感じさせるものだった。
そしてアルフレッドは歩き出す。
大切な仲間を傷付けた下卑たる『魔術師』を、自らの手で討滅する為に。

この時はまだ、アルフレッドは気付いていなかった。
自らが今手にしている物が、一体どういう代物なのかを。
それは、手に入れる事すら困難とされる物。
数が希少とされてはいるが、『魔術師』と渡り合う為には有効な対抗手段とされる、魔の力を司る武器。
偶然か、或いは必然か。
アルフレッドが手にしているその剣こそ、この遺跡に眠っていた宝。

とある能力をその身に秘めた、『魔剣』だった。

Ａｃｔ．７　戦士への報酬（後書き）

という訳で、アルフレッド編第七話でした。
いや～、漸く持って行きたかった展開に辿り着いたなぁw
そのせいで外伝にしては、普段より文字数が多くなっております。
ついに『魔剣』を手に入れてしまったアルフレッド！
この先一体どうなるのか！？w

それにしても、この話もそろそろ終わりが近いかな……。
今度こそ、多分あと二話ぐらいで終わるんじゃないでしょうか。w
w

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6400n/

フレイム・ウォーカー外伝　-Behind the Scenes-

2011年7月27日03時24分発行